学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学　2019 秋

株式会社ディーシーアイ

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度からの推移も把握のため必要に応じて比較データを掲載しています。

目次

1.　全体概況 ･･ 3

2.　領域ごとの集計値にみる過去 3 回の推移とサマリー･･････････････････････････････ 6

3.　項目別集計結果 ･･ 8

参考資料１　実施率／回収率･･ 21

1-1 アンケート実施率（回収率）科目区分別･･････････････････････････････････････ 22

1-2 アンケート実施率（学部）　2005 年度春学期～2019 年度秋学期･･････････････ 23

参考資料２　自由記述回答　頻出キーワード分析･･････････････････････････････････ 25

＜集計グラフ＞

自由記述回答 頻出キーワード分析について･･････････････････････････････････････ 26

【効果点】「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点･･････････････････ 29

全学･･ 30

学部別･･ 31

回答人数帯別･･･ 32

学年別･･ 33

出現率前回比較　全学･･ 34

出現率前回比較　学部別･･ 35

出現率前回比較　回答人数帯別･･ 39

出現率前回比較　学年別･･ 42

【改善点】改善できる点･･ 45

全学･･ 46

学部別･･ 47

回答人数帯別･･･ 48

学年別･･ 49

出現率前回比較　全学･･ 50

出現率前回比較　学部別･･ 51

出現率前回比較　回答人数帯別･･ 55

出現率前回比較　学年別･･ 58

■全体概況

授業評価に際して採用した質問文と、それぞれの平均および標準偏差[1]は下表に示す通りです。無回答を除いた回答分布をもとに以下の方法で点数に換算してあります。

「5 そう思う」…5点、　「4 どちらかと言えばそう思う」…4点　「3 どちらともいえない」…3点
「2 どちらかと言えばそう思わない」…2点　「1 そう思わない」…1点

質問	質問内容	平均					標準偏差			
		年	19	18	17	16	19	18	17	16
Q1	教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した	春	4.54	4.51	4.47	4.46	0.31	0.33	0.33	0.34
		秋	4.58	4.54	4.49	4.47	0.29	0.31	0.32	0.34
Q2	教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ	春	4.55	4.51	4.48	4.46	0.31	0.32	0.33	0.34
		秋	4.57	4.53	4.48	4.47	0.29	0.32	0.32	0.34
Q3	教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った	春	4.53	4.48	4.43	4.40	0.30	0.31	0.33	0.35
		秋	4.56	4.50	4.43	4.41	0.28	0.30	0.32	0.33
Q4	教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した	春	4.44	4.38	4.35	4.32	0.36	0.38	0.40	0.41
		秋	4.50	4.42	4.35	4.35	0.34	0.36	0.38	0.40
Q5	教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた	春	4.57	4.54	4.51	4.49	0.31	0.32	0.33	0.36
		秋	4.60	4.56	4.50	4.51	0.30	0.32	0.33	0.35
Q6	教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった	春	4.49	4.44	4.40	4.37	0.33	0.35	0.36	0.38
		秋	4.52	4.46	4.39	4.37	0.31	0.35	0.36	0.38
Q7	私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ	春	4.42	4.36	4.31	4.28	0.31	0.31	0.33	0.34
		秋	4.45	4.38	4.31	4.28	0.30	0.32	0.32	0.34
Q8	私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた	春	4.23	4.14	4.07	4.00	0.36	0.37	0.38	0.42
		秋	4.26	4.18	4.10	4.04	0.37	0.38	0.37	0.42
Q9	私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）	春	4.18	4.11	4.05	4.00	0.36	0.35	0.35	0.38
		秋	4.21	4.14	4.06	4.02	0.34	0.35	0.35	0.37
Q10	私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた	春	4.35				0.36			
		秋	4.39				0.35			
Q11	私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった	春	4.20	4.16	4.12	4.09	0.45	0.44	0.45	0.49
		秋	4.25	4.19	4.12	4.12	0.43	0.44	0.45	0.47
Q12	私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に活きる	春	4.42	4.39	4.35	4.33	0.36	0.35	0.36	0.38
		秋	4.45	4.40	4.35	4.34	0.34	0.36	0.35	0.37
Q13	あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか	春	4.55	4.54	4.53	4.52	0.29	0.26	0.29	0.28
		秋	4.49	4.45	4.45	4.46	0.29	0.30	0.28	0.28
Q14	この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか	春	3.06	2.90	2.86	2.88	0.57	0.59	0.57	0.61
		秋	3.14	3.00	2.95	2.96	0.63	0.64	0.62	0.66
全質問合計（Q13、Q14 を除く）		春	4.41				0.30			
		秋	4.45				0.29			

※Q10 学生の成長実感は新設のため過年度データはありません。これに伴い全質問合計も今回からの表示です。

[1] 表中の数値「平均」及び「標準偏差」は、授業ごとの評価集計値を元に算出したものです。別紙集計報告書では区分毎の回答から直接計算を行っているため計算結果は一致しません。

昨年同時期（2018 秋学期）との比較では、すべての項目で平均値に統計的に有意な上昇が観測されました。上昇が最も大きかったのは前回に引き続き、Q14 平均学修時間で、「31～60 分」に相当する 3.0 を超え、春学期の 3.06 を更に上回りました。相対的に低位にあった Q9 目標達成、Q8 質問・調査努力、Q11 興味関心の向上の各項目も着実に向上しています。

質問項目	2018 秋		2019 秋		平均値の変化	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	実測値	t検定P値
Q14 平均学修時間	3.00	0.64	3.14	0.63	+0.14	0.0000 **
Q8 質問・調査努力	4.18	0.38	4.26	0.38	+0.09	0.0000 **
Q4 事前・事後学修指示	4.42	0.36	4.50	0.34	+0.08	0.0000 **
Q9 目標達成	4.14	0.35	4.21	0.35	+0.08	0.0000 **
Q11 興味関心の向上	4.19	0.44	4.25	0.43	+0.07	0.0001 **
Q7 授業に臨む姿勢	4.38	0.32	4.45	0.30	+0.07	0.0000 **
Q6 教材・教具効果	4.46	0.35	4.52	0.31	+0.06	0.0000 **
Q3 教員シラバス対応	4.50	0.30	4.56	0.28	+0.06	0.0000 **
Q12 有用性	4.40	0.36	4.45	0.34	+0.05	0.0002 **
Q2 教員努力	4.53	0.32	4.57	0.29	+0.05	0.0001 **
Q5 教員質問相談対応	4.56	0.32	4.60	0.30	+0.05	0.0003 **
Q1 教員目標明示	4.54	0.31	4.58	0.29	+0.04	0.0004 **
Q13 出席率	4.45	0.30	4.49	0.29	+0.04	0.0022 **

n=1,098（18 秋）、1,127（19 秋）　有意性の検定　＊：P<0.05、**：P<0.01

本年度新設の Q10 学生の成長実感（授業を受けての自身の成長を実感）では、「⑤そう思う」を選択した学生の割合が 8 割以上であった授業が前回の 11.9%から 14.3%に増えています。50%未満の授業も 4 ポイントほど減りました。なお、「④どちらかと言えばそう思う」を含んだ肯定率が 90%以上の授業も全体の 48.3%を占めました。昨年同時期との比較ができませんが、春学期との比較では、授業別集計値の母平均に有意な上昇（p=0.005）が確認できます。

Q10 学生の成長実感	⑤そう思う				肯定率（⑤＋④）			
	2019 春		2019 秋		2019 春		2019 秋	
	度数（%）	累積（%）	度数（%）	累積（%）	度数（%）	累積（%）	度数（%）	累積（%）
100%	4.0%	4.0%	5.1%	5.1%	25.0%	25.0%	28.4%	28.4%
95%以上	0.0%	4.0%	0.0%	5.1%	4.4%	29.5%	4.3%	32.7%
90%以上	0.8%	4.8%	1.8%	6.8%	16.0%	45.4%	15.5%	48.3%
85%以上	2.7%	7.5%	2.8%	9.6%	13.5%	58.9%	15.8%	64.1%
80%以上	4.3%	11.9%	4.7%	14.3%	12.7%	71.6%	11.0%	75.1%
75%以上	3.9%	15.8%	4.8%	19.1%	10.6%	82.2%	8.9%	83.9%
70%以上	4.3%	20.2%	5.9%	24.9%	5.5%	87.7%	5.0%	88.9%
65%以上	6.4%	26.6%	5.5%	30.4%	4.5%	92.2%	4.8%	93.7%
60%以上	8.6%	35.2%	9.0%	39.4%	2.8%	95.0%	2.4%	96.1%
55%以上	7.4%	42.6%	6.4%	45.8%	1.6%	96.6%	1.6%	97.7%
50%以上	13.0%	55.5%	13.5%	59.3%	1.9%	98.4%	1.2%	98.9%
50%未満	44.5%		40.7%		1.6%		1.1%	

単相関行列（学生の回答から直接算出）

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14
Q1 教員目標明示		.810	.729	.660	.705	.701	.567	.485	.518	.580	.527	.578	.181	.198
Q2 教員努力	.810		.748	.667	.745	.737	.592	.495	.526	.595	.553	.595	.196	.186
Q3 教員シラバス対応	.729	.748		.667	.695	.693	.550	.461	.495	.537	.491	.543	.193	.177
Q4 事前・事後学修指示	.660	.667	.667		.674	.641	.532	.522	.495	.505	.472	.520	.146	.284
Q5 教員質問相談対応	.705	.745	.695	.674		.730	.563	.494	.496	.566	.528	.563	.188	.183
Q6 教材・教具効果	.701	.737	.693	.641	.730		.603	.510	.547	.613	.594	.611	.181	.198
Q7 授業に臨む姿勢	.567	.592	.550	.532	.563	.603		.703	.713	.681	.629	.631	.330	.303
Q8 質問・調査努力	.485	.495	.461	.522	.494	.510	.703		.719	.638	.606	.576	.251	.369
Q9 目標達成	.518	.526	.495	.495	.496	.547	.713	.719		.715	.679	.623	.282	.321
Q10 学生の成長実感	.580	.595	.537	.505	.566	.613	.681	.638	.715		.754	.744	.272	.281
Q11 興味関心の向上	.527	.553	.491	.472	.528	.594	.629	.606	.679	.754		.724	.216	.285
Q12 有用性	.578	.595	.543	.520	.563	.611	.631	.576	.623	.744	.724		.268	.276
Q13 出席率	.181	.196	.193	.146	.188	.181	.330	.251	.282	.272	.216	.268		.137
Q14 平均学修時間	.198	.186	.177	.284	.183	.198	.303	.369	.321	.281	.285	.276	.137	

相関行列の中で上位 25%に含まれるセルに網掛を施してあります。相関係数の出方には以前と大きな違いはありません。{Q1～Q6 教員による授業への取り組み}、{Q7～Q9 学生による取り組みと成果}、{Q10～Q12 授業に対する満足度（学びの成果）} の各領域内の項目は総じて高い相関を持ち、それぞれのブロックを形成しますが、Q10 学生の成長実感が 2 つめと 3 つめのブロック成長を繋いでいます。この相関には「自信の成長を実感することが学びのモチベーションとなり、Q7 授業に臨む姿勢などの改善にも寄与する」と考えることで説明がつきそうです。

授業改善の進捗を把握する際の重要項目と考えられる、Q9 目標達成や Q11 興味関心の向上、本年度から設けた Q10 学生の成長実感のそれぞれを目的変数、先生方の直接的なコントールが比較的容易と思われる Q1～Q6 の各項目を説明変数に行った重回帰分析の結果は下表に示す通りです。プラスの有意な偏回帰係数が確認されたセルに網掛を施してあります。目的変数をどれにするかによって、優先的に改善を図るべき項目は異なる様子が見て取れますが、まずは、「授業の到達目標の達成（Q9）」を確実なものにすることに注力すべきと考えます。

目的変数	Q9 目標達成		Q10 学生の成長実感		Q11 興味関心の向上	
説明変数	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値
Q1 教員目標明示	0.131	0.0274 *	0.208	P < 0.001 **	0.066	0.3095
Q2 教員努力	−0.003	0.9713	0.245	P < 0.001 **	0.355	P < 0.001 **
Q3 教員シラバス対応	0.036	0.4906	−0.126	0.0065 **	−0.148	0.0101 *
Q4 事前・事後学修指示	0.168	P < 0.001 **	0.015	0.6758	−0.110	0.0106 *
Q5 教員質問相談対応	0.050	0.3792	0.160	0.0016 **	0.250	P < 0.001 **
Q6 教材・教具効果	0.431	P < 0.001 **	0.422	P < 0.001 **	0.707	P < 0.001 **
定数項	0.527	P < 0.001 **	0.177	0.1139	−0.844	P < 0.001 **

「教員による授業への取り組み」（Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6）

いずれの項目も着実に改善が積み上げられてきたのは下表が示す通りです。「どちらかと言えばそう思う」に相当する 4.0 ポイント未満の授業が占める割合も縮小傾向は明白であり、最も多くの授業がこの範囲にとどまっている Q4 事前・事後学修指示でも 8.3%まで縮小しています。「教え方」という視点での授業改善は、先生方のこれまでの工夫と努力が一定以上の成果を得ているのは間違いありません。なお、表内の「下方外れ値」は、箱ひげ図における下方のひげの先端の値を表示してあります。この値を下回る場合、改善は喫緊の課題です。

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満（%）
Q1教員目標明示	18秋	4.75	4.57	4.36	3.76	5.0%
	19春	4.75	4.58	4.38	3.84	4.9%
	19秋	4.78	4.60	4.42	3.88	3.5%
Q2教員努力	18秋	4.75	4.57	4.33	3.71	5.0%
	19春	4.75	4.58	4.40	3.88	4.5%
	19秋	4.77	4.60	4.42	3.89	3.3%
Q3教員シラバス対応	18秋	4.71	4.53	4.33	3.77	5.8%
	19春	4.71	4.57	4.39	3.89	4.3%
	19秋	4.75	4.58	4.40	3.88	2.9%
Q4事前・事後学修指示	18秋	4.69	4.47	4.18	3.42	12.0%
	19春	4.71	4.49	4.25	3.57	10.3%
	19秋	4.75	4.54	4.30	3.64	8.3%
Q5教員質問相談対応	18秋	4.80	4.61	4.37	3.72	5.5%
	19春	4.79	4.60	4.43	3.89	4.0%
	19秋	4.83	4.63	4.44	3.85	3.5%
Q6教材・教具効果	18秋	4.71	4.50	4.25	3.56	8.1%
	19春	4.70	4.52	4.33	3.78	6.8%
	19秋	4.74	4.55	4.33	3.73	5.1%

「学生による取り組みと成果」（Q7、Q8、Q9）

各項目とも年度ごとに着実な改善が重ねられてきましたが、Q8 質問・調査努力と Q9 目標達成では、4.0 ポイント未満に止まる授業がまだ 2 割を超える状態にあります。Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力のギャップは中央値で 0.18 ポイントと依然として大きく、学修行動の実態を伴わずに「真剣に臨んだ」との認識を持つ学生も少なからずいるようです。

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満（%）
Q7授業に臨む姿勢	18秋	4.60	4.39	4.17	3.52	10.2%
	19春	4.63	4.43	4.23	3.65	7.4%
	19秋	4.67	4.45	4.23	3.59	5.9%
Q8質問・調査努力	18秋	4.43	4.19	3.94	3.20	28.7%
	19春	4.46	4.25	4.00	3.31	22.1%
	19秋	4.53	4.27	4.00	3.21	21.6%
Q9目標達成	18秋	4.36	4.13	3.92	3.25	29.9%
	19春	4.42	4.18	3.98	3.33	25.4%
	19秋	4.45	4.21	4.00	3.32	23.4%

「授業に対する満足度（学びの成果）」（Q10、Q11、Q12）

学習者主体の学びの実現度を測る指標として、今後ますます重要度を増す項目群であると考えます。各項目とも、中央値や第 3 四分位数（箱ひげ図における箱の上端）には連続した上昇が見られ、優れた実践に更に磨きをかけている先生方が多くいらっしゃる様子ですが、Q10 学生の成長実感では、第 1 四分位数（箱の下端）に変化がありません。改善を急ぐ必要があった授業において有効な改善策を講じることができなかった可能性がありそうです。後述の通り、「丁寧に教えて理解させる」という戦略だけでは満たせない要素を含む項目であり、ＰＢＬ（課題解決型学習：Project Based Learning）要素の拡充を図る必要があると思われます。Q11 興味関心の向上も現時点で 4.0 ポイントに届かない授業が 4 分の 1 を占めます。高い評価を得た授業での実践を共有するなど、改善の加速を支援する仕組みをこれまで以上に活性化させる必要があろうかと存じます。

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満（%）
Q10学生の成長実感	18秋					
	19春	4.60	4.37	4.15	3.49	13.7%
	19秋	4.63	4.41	4.15	3.45	11.9%
Q11興味関心の向上	18秋	4.50	4.23	3.89	2.97	30.5%
	19春	4.50	4.27	3.94	3.09	27.8%
	19秋	4.57	4.29	3.97	3.06	25.6%
Q12有用性	18秋	4.66	4.43	4.19	3.48	11.9%
	19春	4.67	4.45	4.23	3.58	9.9%
	19秋	4.70	4.48	4.25	3.58	8.7%

「出席率、平均学修時間」（Q13、Q14）

出席率は春学期の実績値を下回るものの、昨年同時期をわずかながら上回る結果です。「90%以上」と回答した学生ののべ数は、昨年同時期の 59%から 61%へと 2 ポイント上昇しました。「90%以上」の出席率であった場合の Q9 目標達成の換算得点平均は 4.27 ですが、「75%以上」では 3.99、「60%以上」では 3.59 まで低下します。このデータは、学生に伝えて「出席が目的ではなく、科目の目標達成のためには高い出席率が必要」との認識作りに役立てたいところです。一方、平均学修時間も徐々に延伸が図られてきており、「121 分以上」「61～120 分」と答えた学生ののべ数は、昨年同時期の 26.3%から 30.1%に増加しました。改善の余地は小さくありませんが、先生方の改善努力の成果を見て取ることができます。

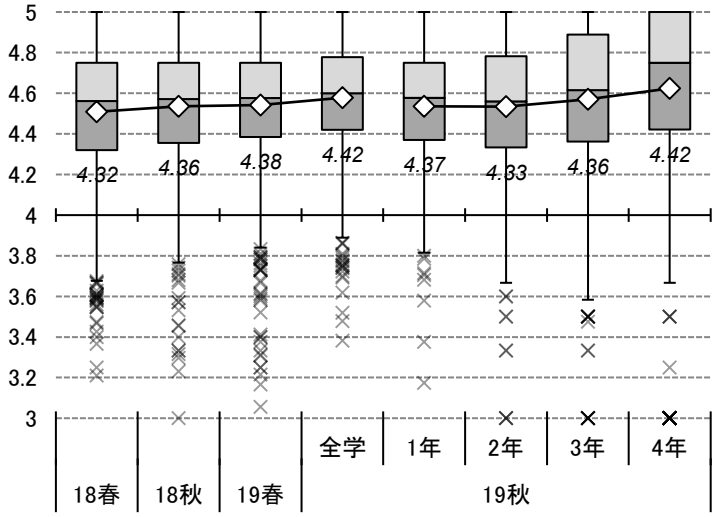
		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満（%）
Q13出席率	18秋	4.64	4.46	4.32	3.84	4.6%
	19春	4.75	4.59	4.43	3.95	3.3%
	19秋	4.67	4.50	4.33	3.83	4.3%

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満（%）
Q14平均学修時間	18秋	3.37	2.88	2.55	1.31	89.7%
	19春	3.39	3.00	2.66	1.57	92.0%
	19秋	3.51	3.04	2.68	1.42	87.5%

■項目別集計結果分析

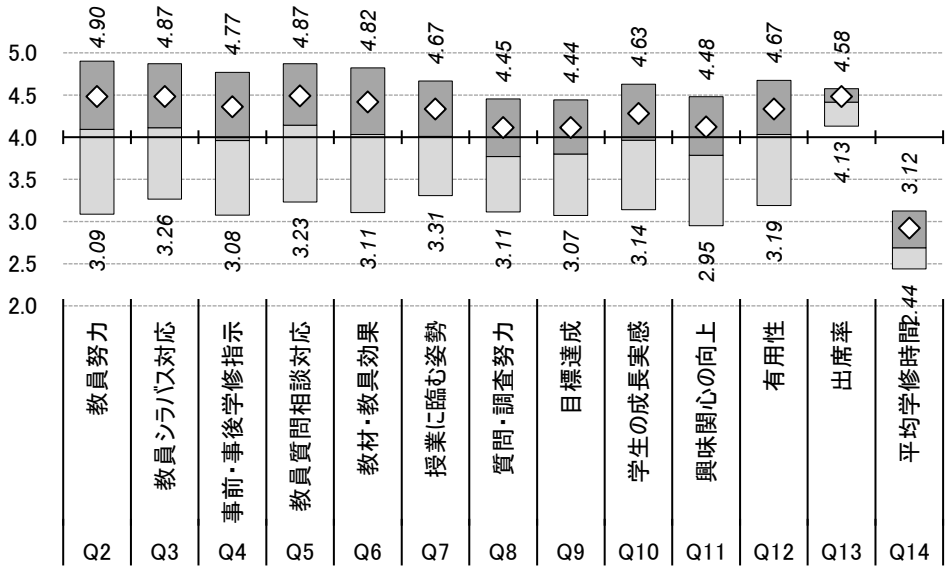
各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を直近 4 回分の追跡、および当期の学年別で表示した四分位図と、他項目との単相関・偏相関の一覧です。四分位図において「箱」のすぐ下に表示した数字は第 1 四分位数です。この値未満の場合、集計区分内で下位 25%に含まれることになりますので、改善は急務とお考えください。また、単相関と偏相関の双方について各々の相関行列全体で上位 25%に含まれる場合に網掛を施してあります。因果の方向や第三要素の介在など考慮しなければならないこともありますが、基本的には、高い偏相関で結ばれる項目はそれぞれ別に改善を図るよりも、セットにして改善を考えた方がうまく運ぶケースが多いように思われます。

Q1　教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示		
Q2教員努力	0.810	0.412
Q3教員シラバス対応	0.729	0.187
Q4事前・事後学修指示	0.660	0.115
Q5教員質問相談対応	0.705	0.087
Q6教材・教具効果	0.701	0.083
Q7授業に臨む姿勢	0.567	0.013
Q8質問・調査努力	0.485	−0.011
Q9目標達成	0.518	0.022
Q10学生の成長実感	0.580	0.050
Q11興味関心の向上	0.527	−0.019
Q12有用性	0.578	0.044
Q13出席率	0.181	−0.019
Q14平均学修時間	0.198	0.005

着実に改善が重ねられてきました。下図からは、「目標とするところを学生ときちんと共有しておくことが個々の指導に込める意図を理解させ様々な場面での肯定的な評価に繋がる」との因果が想定できます。到達目標を同じような表現と方法で示しても伝わり方は学生ごとに異なります。低い評価に止まった場合、より丁寧でわかりやすい説明を心掛ける必要がありそうです。



Q1教員目標提示の成否による影響

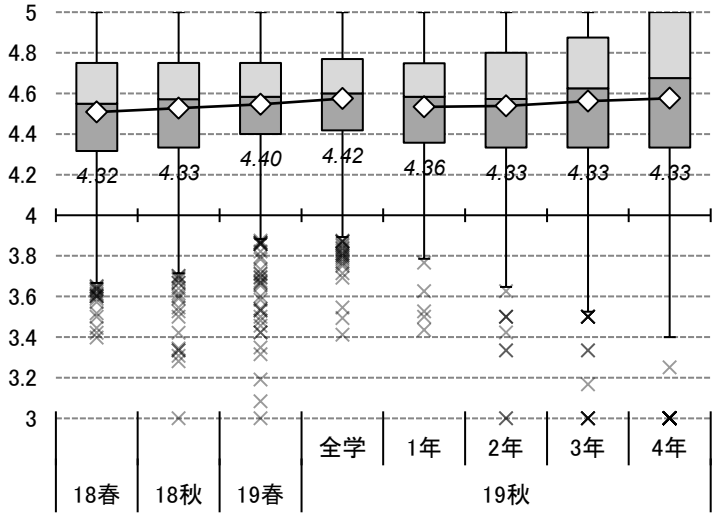
濃いグレーの箱の上端:
{Q1＝①}の場合の換算得点平均

グレーの濃淡の境界:
{Q2＝②}の場合の換算得点平均

薄いグレーの下端:
{Q1＝③④⑤}のときの換算得点平均

◇換算得点全学平均

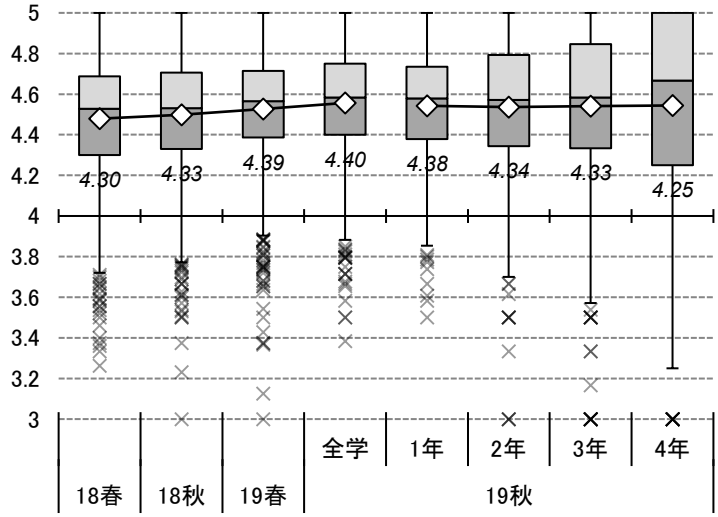
Q2　教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.810	0.412
Q2教員努力		
Q3教員シラバス対応	0.748	0.203
Q4事前・事後学修指示	0.667	0.073
Q5教員質問相談対応	0.745	0.193
Q6教材・教具効果	0.737	0.150
Q7授業に臨む姿勢	0.592	0.063
Q8質問・調査努力	0.495	−0.023
Q9目標達成	0.526	−0.013
Q10学生の成長実感	0.595	0.032
Q11興味関心の向上	0.553	0.027
Q12有用性	0.595	0.036
Q13出席率	0.196	0.006
Q14平均学修時間	0.186	−0.040

箱の下端は昨年同時期と比べて 0.09 ポイントも上昇しています。「どちらかと言えばそう思う」に相当する 4.0 ポイントに届かない授業は前回の 4.5%を更に下回り、3.3%にまで減少しました。この項目と特に高い相関で結ばれているのは以前と同じく、Q1 教員目標明示、Q3 教員シラバス対応、Q5 教員質問相談対応、Q6 教材・教具効果の 4 項目です。「目標をはっきり示さない」「シラバスを守らない」「質問や相談に不親切」「わかりにくい」との感想を（たとえ事実に反していたとしても）学生が抱けば、この項目で厳しい評価を受けるという構図に変化はありません。

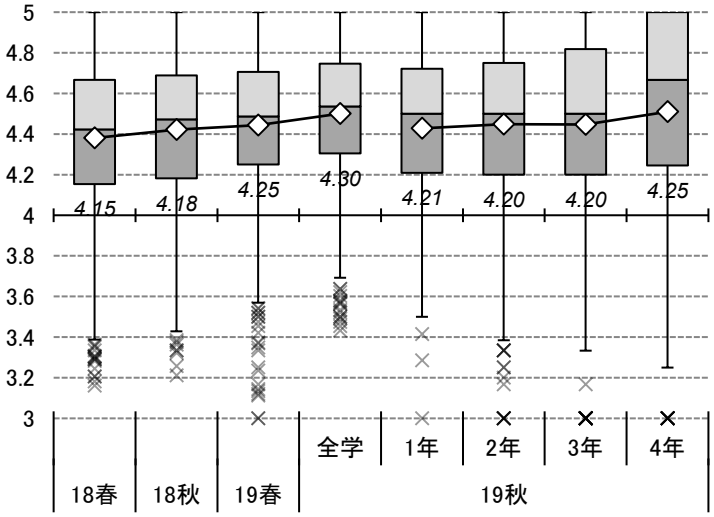
Q3　教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.729	0.187
Q2教員努力	0.748	0.203
Q3教員シラバス対応		
Q4事前・事後学修指示	0.667	0.195
Q5教員質問相談対応	0.695	0.122
Q6教材・教具効果	0.693	0.140
Q7授業に臨む姿勢	0.550	0.042
Q8質問・調査努力	0.461	−0.033
Q9目標達成	0.495	0.033
Q10学生の成長実感	0.537	0.000
Q11興味関心の向上	0.491	−0.031
Q12有用性	0.543	0.024
Q13出席率	0.193	0.034
Q14平均学修時間	0.177	−0.036

平均値や四分位数は着実に上昇を続けています。4.0 ポイント未満の授業の割合は Q1～Q6 の中で最も小さい 2.9%に止まります。多くの授業が高い評価を得ているだけに、箱の下端に届かない位置に止まっては、他の授業との比較の中で学生の不満が大きくなり、他項目の評価にも悪影響が及びそうです。シラバスを起草する段階で授業計画を練り上げ、記載内容の履行可能性を高めておかないと、授業開始後に変更を余儀なくされてしまい、改善は遠のくばかりです。

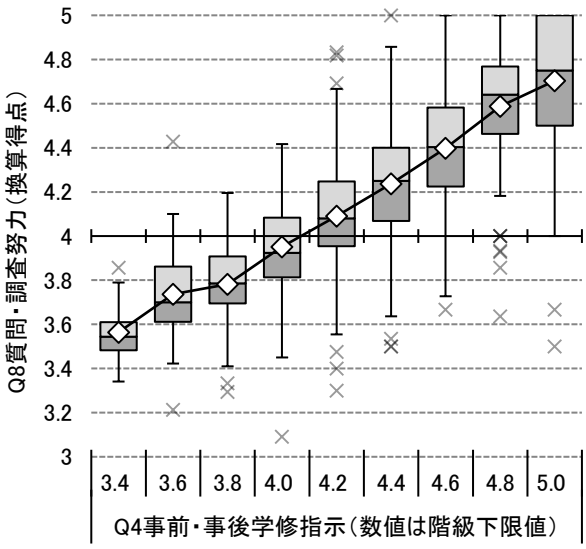
Q4　教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した

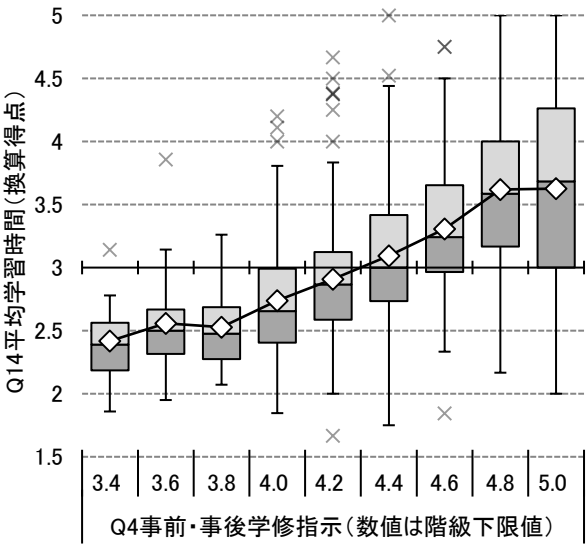


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.660	0.115
Q2教員努力	0.667	0.073
Q3教員シラバス対応	0.667	0.195
Q4事前・事後学修指示		
Q5教員質問相談対応	0.674	0.203
Q6教材・教具効果	0.641	0.091
Q7授業に臨む姿勢	0.532	0.001
Q8質問・調査努力	0.522	0.137
Q9目標達成	0.495	0.020
Q10学生の成長実感	0.505	−0.047
Q11興味関心の向上	0.472	−0.042
Q12有用性	0.520	0.038
Q13出席率	0.146	−0.061
Q14平均学修時間	0.284	0.148

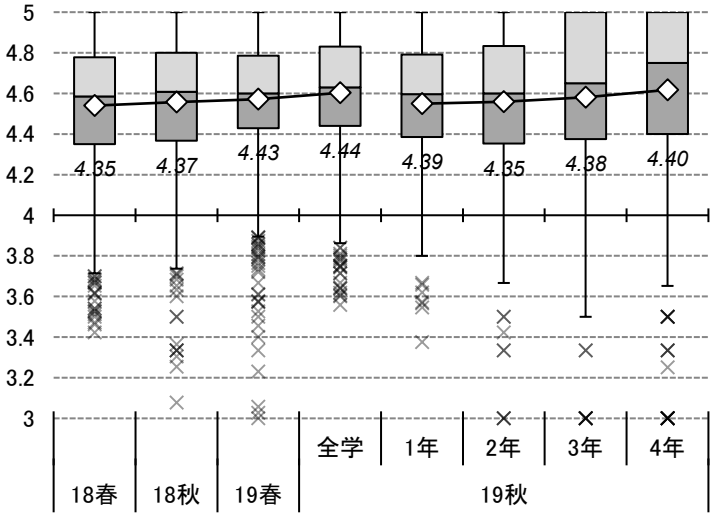
他項目と同様に改善が進んできていますが、授業間の差異を表す授業別集計値の標準偏差はQ1～Q6の各項目（教員による授業への取り組み）の中で最も大きい値を示しています。

Q1、Q3、Q5の各項目との間に高相関が確認できますが、Q8質問・調査努力、Q14平均学修時間との間にも強い偏相関が確認できます。Q4事前・事後学修時間の換算得点を0.2ポイント刻みに分け、各階級でのQ8とQ14の換算得点の分布を調べてみた結果は下図の通りです。下左図からは具体的な課題が指示されていなければ、学生は理解したことをもとに思考した結果をアウトプットする機会を持ちませんので、不明の所在にも気づかないまま質問すべき機を逃し、不明を解消するための行動も生じないというストーリーが想像されます。不明解消への努力がなければ平均学修時間も伸びないのは当然の帰結と思われます。逆に見れば、Q4事前・事後学修指示の改善を図りさえすれば、学生の主体的・積極的な学びの様子を示すQ8質問・調査努力とQ14平均学修時間にも向上が見込めるということです。なお、各階級の箱の下端に届かないケースで想定されるボトルネックとその解消策については、前回の報告書を併せてご参照いただければ幸甚です。





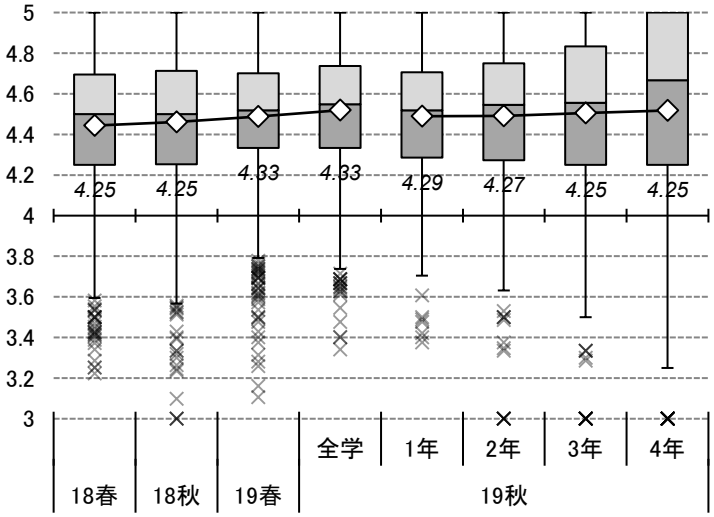
Q5　教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.705	0.087
Q2教員努力	0.745	0.193
Q3教員シラバス対応	0.695	0.122
Q4事前・事後学修指示	0.674	0.203
Q5教員質問相談対応		
Q6教材・教具効果	0.730	0.243
Q7授業に臨む姿勢	0.563	0.030
Q8質問・調査努力	0.494	0.037
Q9目標達成	0.496	−0.046
Q10学生の成長実感	0.566	0.038
Q11興味関心の向上	0.528	0.017
Q12有用性	0.563	0.017
Q13出席率	0.188	0.020
Q14平均学修時間	0.183	−0.046

前回までの高い評価を更に伸ばして、中央値は 4.63、箱の下端（第 1 四分位数）も 4.44 に達しました。4.0 ポイント未満に止まる授業は 3.5%に過ぎません。外れ値となった授業も、その位置はかなり高くなってきました。履修者が多く個別の質問対応が困難な場合でも、ミニッツペーパー等で寄せられた質問を教室で共有し、その答えをクラス全体で考えて行くやり方もあります。質問が出たら丁寧に回答することに加え、学生に質問を作らせることにも注力したいところです。質問を作る（＝既習範囲に問いを立てる）ことは、学びを深く確かなものにする好機です。

Q6　教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった

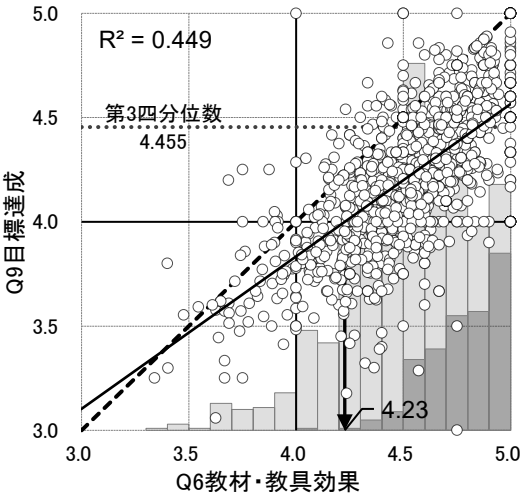


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.701	0.083
Q2教員努力	0.737	0.150
Q3教員シラバス対応	0.693	0.140
Q4事前・事後学修指示	0.641	0.091
Q5教員質問相談対応	0.730	0.243
Q6教材・教具効果		
Q7授業に臨む姿勢	0.603	0.084
Q8質問・調査努力	0.510	−0.025
Q9目標達成	0.547	0.012
Q10学生の成長実感	0.613	0.042
Q11興味関心の向上	0.594	0.109
Q12有用性	0.611	0.064
Q13出席率	0.181	−0.043
Q14平均学修時間	0.198	−0.032

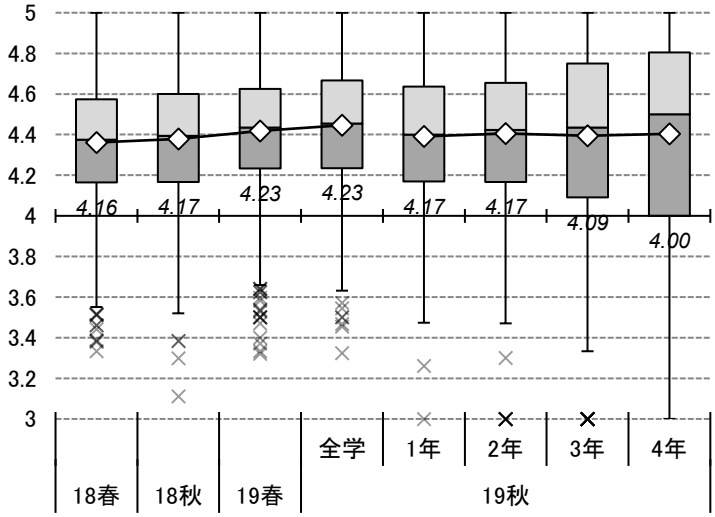
小幅ながら着実に改善が重ねられてきており、4.0 ポイント未満の授業は、昨年同時期の 8.1%から 5.1%に減少しています。次ページの散布図（Q6×Q9）に見る通り、基準線（Q6=Q9 となる位置に引いた破線）を上回る授業は、前回の分析と同様、例外的と言えるほどの少数に止まりますので、Q6 教材・教具効果の評価が、Q9 目標達成における評価の実質的な上限を定めると考えられます。学生の理解を「その場で」「言語化させて」という 2 つの鉄則を守ってこまめに確認しないと、意図した通りの理解を形成できなかった（＝教材や教具の使い方に改善が必要な）場面を見

過ごし、改善のチャンスを逃すばかりです。具体策の例については前回の報告をご参照ください。

近似線を大きく下回る（＝Q6 教材・教具効果でかなり高い評価を得ながら、Q9 目標達成が 4.0 ポイントに届かない）授業では、「授業は理解できるが、科目の目標達成は実感できない」ということですので、科目の目標達成を妨げているボトルネックの特定とその解消が課題です。Q9 目標達成を目的変数とする重回帰分析で算出した偏回帰係数が特に大きな値を示すのは、Q8 質問・調査努力と Q7 授業に臨む姿勢の 2 項目ですので、多くの場合、ボトルネックはこれら 2 項目にあるものと推測されます。

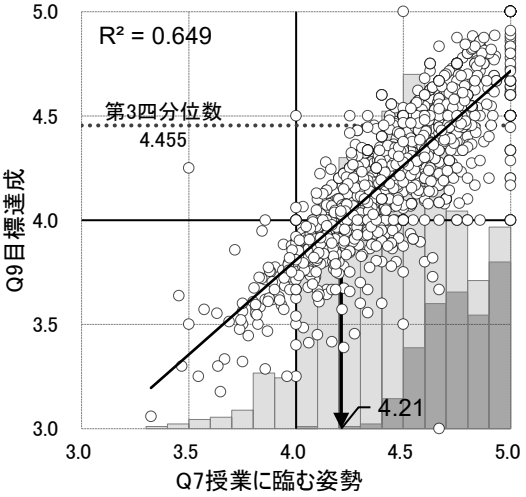


Q7　私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ

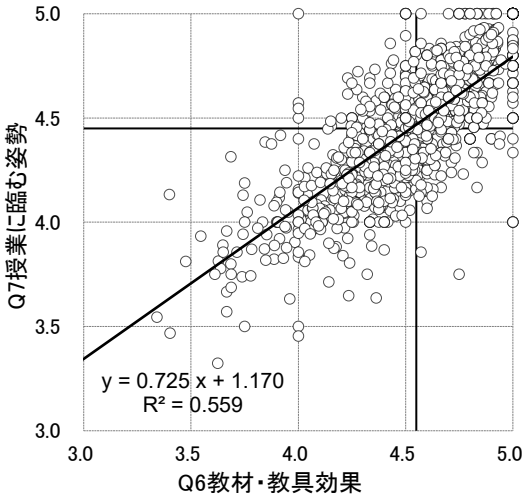


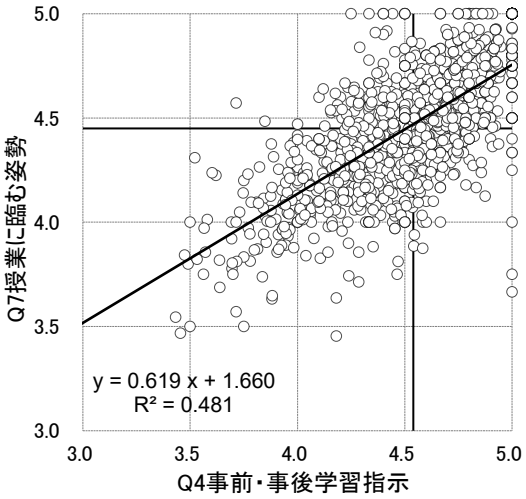
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.567	0.013
Q2教員努力	0.592	0.063
Q3教員シラバス対応	0.550	0.042
Q4事前・事後学修指示	0.532	0.001
Q5教員質問相談対応	0.563	0.030
Q6教材・教具効果	0.603	0.084
Q7授業に臨む姿勢		
Q8質問・調査努力	0.703	0.282
Q9目標達成	0.713	0.220
Q10学生の成長実感	0.681	0.097
Q11興味関心の向上	0.629	0.025
Q12有用性	0.631	0.064
Q13出席率	0.330	0.159
Q14平均学修時間	0.303	0.027

平均値や四分位数は昨年同時期を上回る水準にあり、着実に改善が重ねられてきています。相関行列に見る通り、Q9 目標達成との相関はかなり強固であり、「真剣に授業に取り組むことが授業目標の達成を確かなものにする」と考えられます。実際、右図の通り、Q9 目標達成の上位群に含まれる授業の大半は｛Q7 授業に臨む姿勢≧4.5｝の領域に分布しています。先生方からの直接的なコントロールが可能な Q1～Q6 の各項目を説明変数、Q7 を目的変数とする偏回帰係数は、Q6 教材・教具効果が 0.38 でトップ、Q4 事前・事後学修指示が 0.23 で第 2 位につけ、第 3 位以下を大きく引き離します。授業内容が理解できなければ、真剣に取り組もうにもレディネスの不備で課題に歯が立たず、結果的

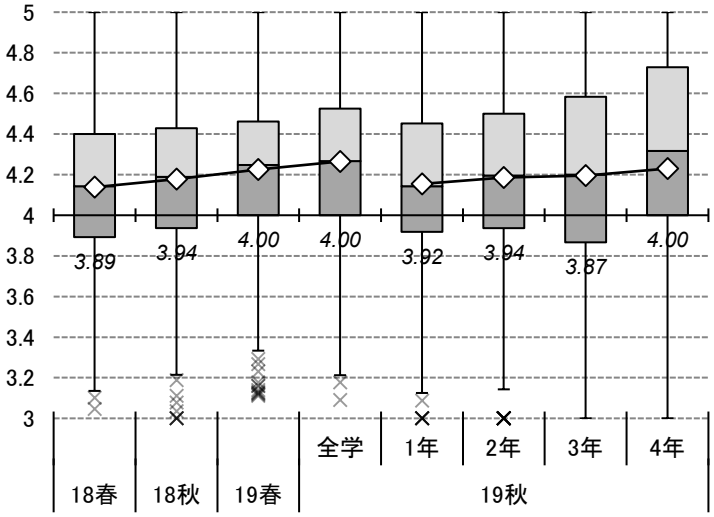


にモチベーションが維持できないことも想定されますし、具体的な課題がなければ何を頑張ればよいのか判断がつかないという因果は、これらのデータから十分に想定することができそうです。下図では横軸と縦軸に置いたそれぞれの変数の中央値で座標面を切り分けました。第三象限に位置する場合は、右方向への移動を目指した改善が必要であり、第四象限に位置する場合は、他所に存在するはずであるボトルネックの特定とその解消が必要ということになります。





Q8　私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた

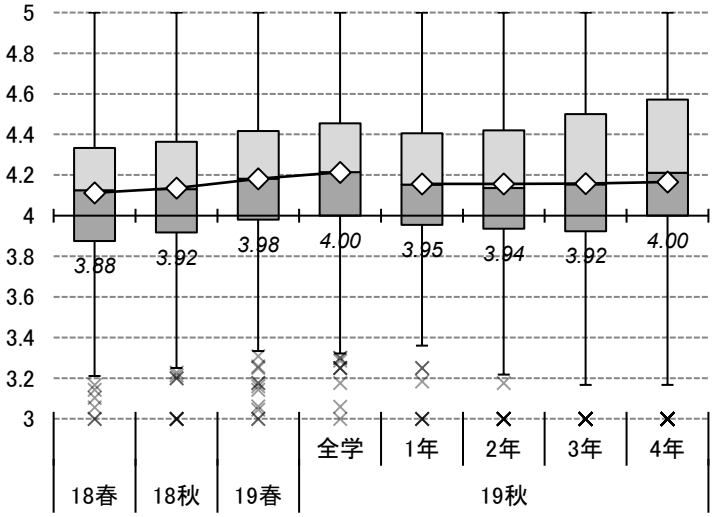


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.485	−0.011
Q2教員努力	0.495	−0.023
Q3教員シラバス対応	0.461	−0.033
Q4事前・事後学修指示	0.522	0.137
Q5教員質問相談対応	0.494	0.037
Q6教材・教具効果	0.510	−0.025
Q7授業に臨む姿勢	0.703	0.282
Q8質問・調査努力		
Q9目標達成	0.719	0.311
Q10学生の成長実感	0.638	0.069
Q11興味関心の向上	0.606	0.062
Q12有用性	0.576	0.016
Q13出席率	0.251	−0.003
Q14平均学修時間	0.369	0.151

平均値は直線的に伸びていますが、前回との比較では箱の下端に変化がありません。改善が必要でありながら、有効な改善策が講じられなかったケースもありそうです。Q7 授業に臨む姿勢との間には強い相関が観測されますが、この項目は学生の側での行動であり、先生方からの直接的な働きかけが及びにくいところです。前述のように Q7 に大きな影響を及ぼしている Q4 事前・事後学修指示に注力することで質問・調査努力を引き出すという作戦の方が上手く行きそうです。具体的な課題を与えて答えを考えさせれば、自ずと不明の所在に向き合いますので、その解消に向けた必要や動機も生まれるはずです。但し、不明の所在に気づいても、その解消の方策に習熟していなければ具体的な行動は起こりませんので、教室の内外でその練習も積ませましょう。練

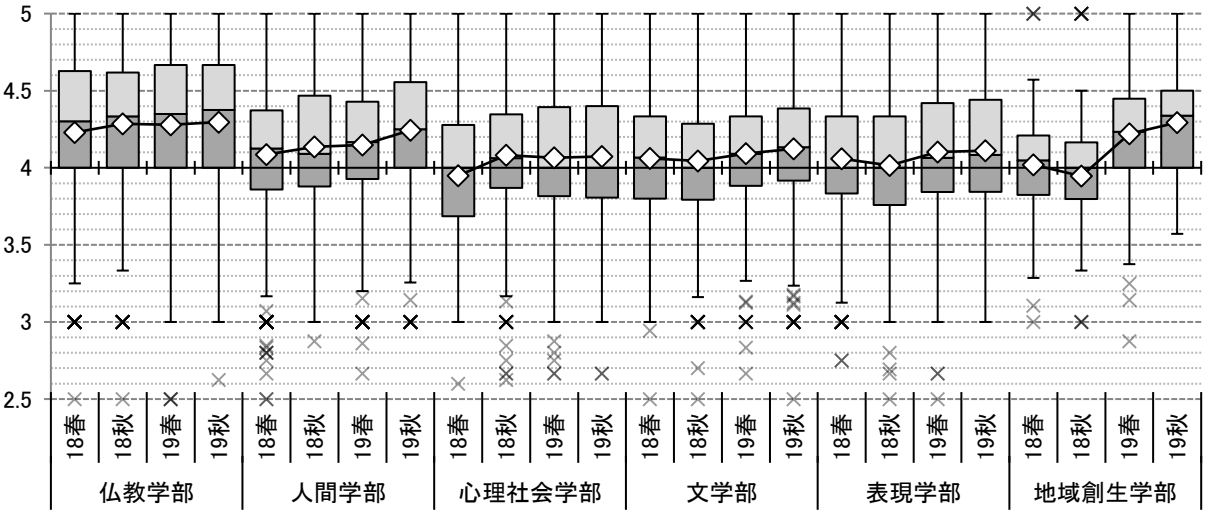
習の場の作り方については、前回の報告書でのご提案がお役に立てば幸甚に存じます。相関行列を見る限り、Q9 目標達成や Q14 平均学修時間の改善にも寄与するものと思われます。

Q9　私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）

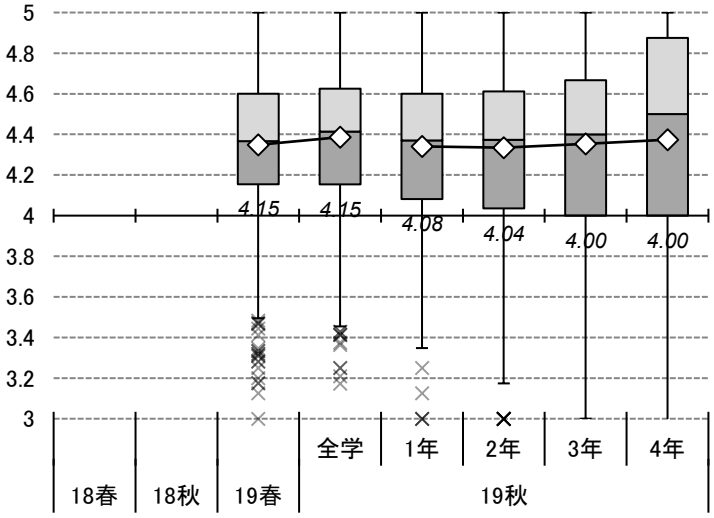


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.518	0.022
Q2教員努力	0.526	−0.013
Q3教員シラバス対応	0.495	0.033
Q4事前・事後学修指示	0.495	0.020
Q5教員質問相談対応	0.496	−0.046
Q6教材・教具効果	0.547	0.012
Q7授業に臨む姿勢	0.713	0.220
Q8質問・調査努力	0.719	0.311
Q9目標達成		
Q10学生の成長実感	0.715	0.209
Q11興味関心の向上	0.679	0.176
Q12有用性	0.623	−0.002
Q13出席率	0.282	0.053
Q14平均学修時間	0.321	0.040

平均値の伸びに加えて箱の下端も着実に上昇し、初めて 4.0 に達しました。下図に示す通り、いずれの学部でも平均値は昨年同時期と同等以上の水準にあります。相関行列では、Q7～Q11 の各項目との高相関が確認できますが、Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力の 2 項目は Q9 目標達成の前提要件をなし、Q10 学生の成長実感と Q11 興味関心の向上は Q9 目標達成がもたらす結果と考えるのが好適と思われます。なお、先生方の直接的なコントロールが及ぶ Q1～Q6（教員による授業への取り組み）を説明変数とした重回帰分析で偏回帰係数に有意性が確認できたのは、前掲（p.5）の通り、Q1 教員目標明示、Q4 事前・事後学修指示、Q6 教材・教具効果の 3 項目です。授業内容の理解を確実にする必要は言うまでもありませんが、明確な到達目標が達成検証可能な形で示されなければ、学生は「到達目標を達成できた」との認識を持ち得ず、授業で学んだことを携えて課題にじっくり取り組まないことには確かな学びなりにくいはずです。「学び終えて解くべき課題」を導入フェイズでしっかりと示すのは、両者を同時に満たす方法として好適です。

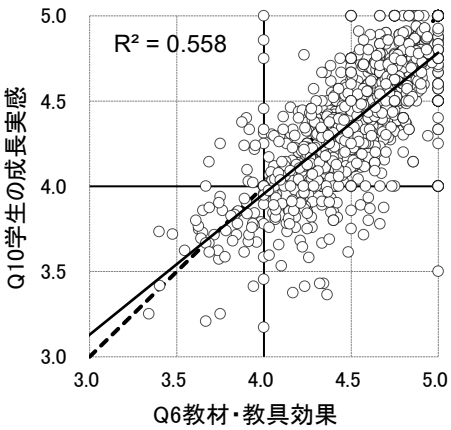


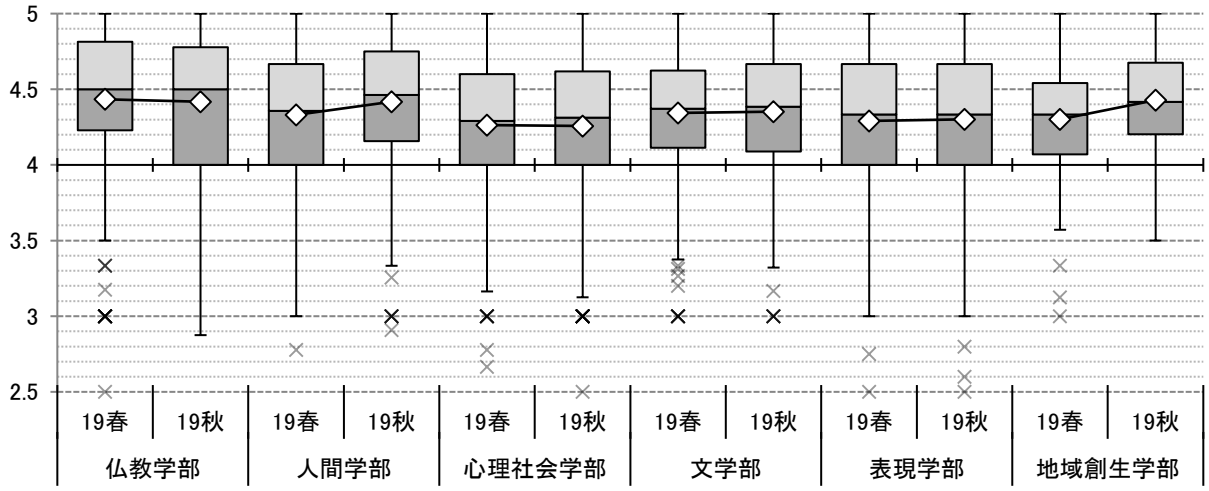
Q10 私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた



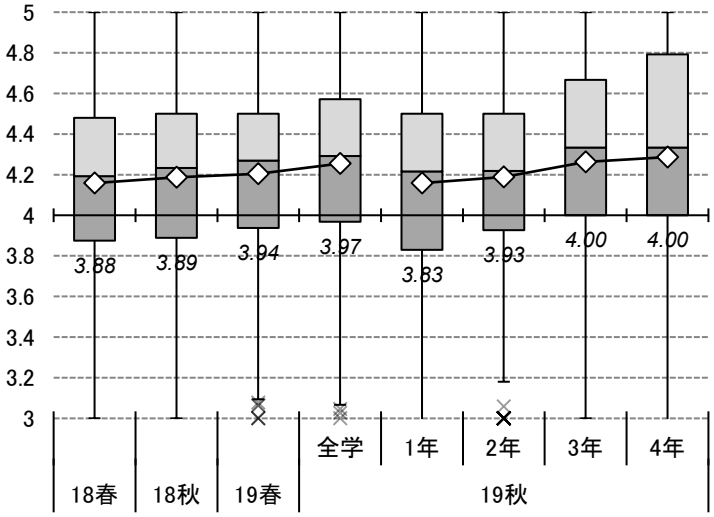
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.580	0.050
Q2教員努力	0.595	0.032
Q3教員シラバス対応	0.537	0.000
Q4事前・事後学修指示	0.505	−0.047
Q5教員質問相談対応	0.566	0.038
Q6教材・教具効果	0.613	0.042
Q7授業に臨む姿勢	0.681	0.097
Q8質問・調査努力	0.638	0.069
Q9目標達成	0.715	0.209
Q10学生の成長実感		
Q11興味関心の向上	0.754	0.291
Q12有用性	0.744	0.284
Q13出席率	0.272	0.038
Q14平均学修時間	0.281	−0.003

本年度に新設した評価項目ですが、春学期に比べて平均値や中央値には上昇があるものの、箱の下端には動きがありません。また、下図に見る通り、学部間でも箱の位置やその動き方には違いが見られ、改善が一様に進んだわけではなさそうです。相関行列では Q11 興味関心の向上と Q12 有用性との高相関が確認できます。新たなものの見方を得れば、そこに興味が生まれる可能性は高いでしょうし、学んでいることが繋がる先を知れば有用性への認識も高まるはずです。下図において近似線から下方に離れ、第四象限に位置する場合、「授業内容の理解に困ることはないものの、Q10 で問われることを満たさない部分がある」ということです。新しいものの見方を得るだけなら、わかりやすく刺激的な講義だけで十分かもしれませんが、「気づき」や「自分の成長」となると、学生が主体的に課題解決に取り組む場が欠かません。求められるのは、ＰＢＬの要素を備えた授業デザインかと思われます。





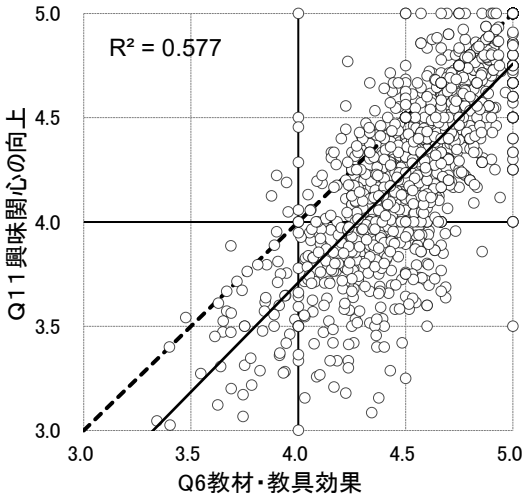
Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった

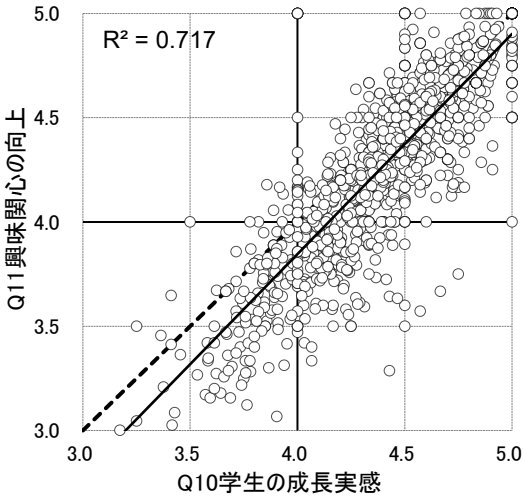


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.527	−0.019
Q2教員努力	0.553	0.027
Q3教員シラバス対応	0.491	−0.031
Q4事前・事後学修指示	0.472	−0.042
Q5教員質問相談対応	0.528	0.017
Q6教材・教具効果	0.594	0.109
Q7授業に臨む姿勢	0.629	0.025
Q8質問・調査努力	0.606	0.062
Q9目標達成	0.679	0.176
Q10学生の成長実感	0.754	0.291
Q11興味関心の向上		
Q12有用性	0.724	0.290
Q13出席率	0.216	−0.059
Q14平均学修時間	0.285	0.041

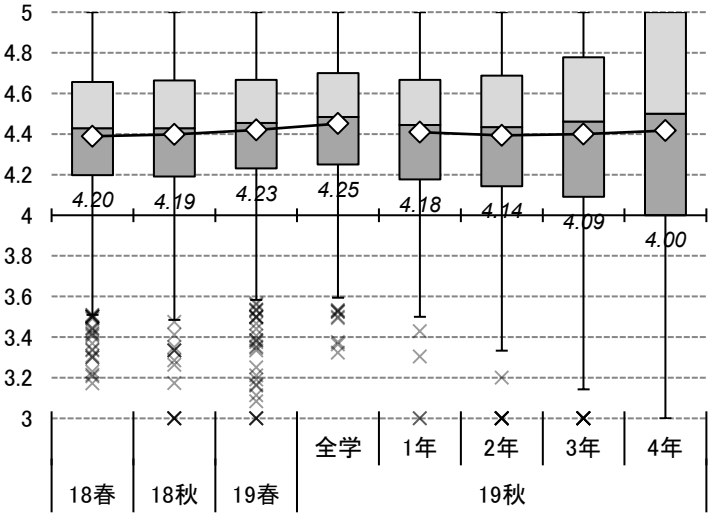
箱の上端は前回の 4.50 から 4.57 へと大きく向上しました。平均値にも有意な上昇が観測されました。改善は着実に進んできたと言えますが、依然として「どちらかと言えばそう思う」に相当する 4.0 ポイントに満たない授業が占める割合は全学で 25.6%（春学期は 27.8%）と、全項目の中で最も大きな値であり、さらなる改善が急務である授業も少なくありません。

前述の通り、Q10 学生の成長実感との相関はかなり強固ですが、これとは対照的に Q6 教材・教具効果との相関はそれほど高くありません。下図でご確認いただけるように、Q6 教材・教具効果「教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった」を説明変数とする散布図では基準線（目的変数と説明変数の値が同じになるところに引いた破線）をかなり大きく下回るところに多くの授業が分布しています。丁寧に教えて理解させるだけでは、科目に対する興味や関心を引き出すには不十分ということだと思います。一方、Q10 学生の成長実感「私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた」を説明変数とする場合、分布の収まりはかなり良くなります。前述の通り、学生が自ら課題の解決に取り組んで、その中で「気づき」を得て「自身の成長」を実感できる環境を作る必要がありそうです。



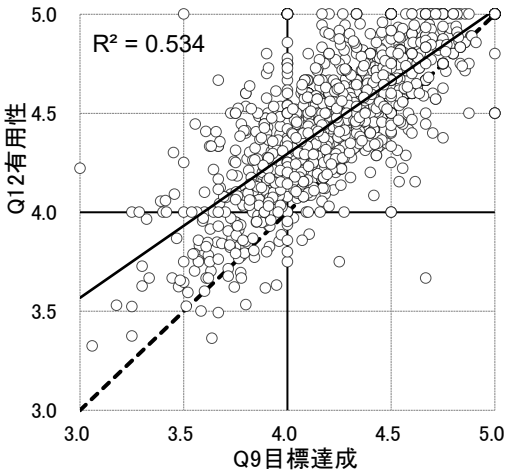


Q12 私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に活きる



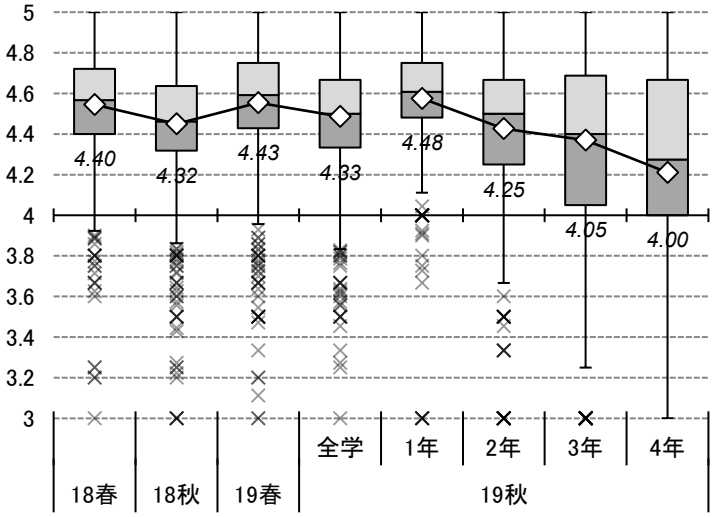
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.578	0.044
Q2教員努力	0.595	0.036
Q3教員シラバス対応	0.543	0.024
Q4事前・事後学修指示	0.520	0.038
Q5教員質問相談対応	0.563	0.017
Q6教材・教具効果	0.611	0.064
Q7授業に臨む姿勢	0.631	0.064
Q8質問・調査努力	0.576	0.016
Q9目標達成	0.623	−0.002
Q10学生の成長実感	0.744	0.284
Q11興味関心の向上	0.724	0.290
Q12有用性		
Q13出席率	0.268	0.076
Q14平均学修時間	0.276	0.037

変化の幅は小さいものの、平均値は着実に上昇しています。箱の下端は 4.25 までせり上がっており、下方のひげを大きく外れる授業も減りました。4.0 ポイント未満の授業は前回の 9.9%を更に下回る 8.7%です。学年が進むにつれて中央値が高まりますが、箱の下端が伸び、授業間の差異が徐々に大きくなっていく傾向が見られます。学部×学年での平均値の推移は下表の通りです。具体的な理由は不明ですが、今後の変化にも注視が必要かと思われます。Q9 目標達成との相関は決して強いものではありませんが、授業の到達目標を達成できない限り、身につけた知識や技能には不足が残りますので、「今後の学修活動や人生に活きる」ものになり得ないはずです。右図に示す通り、Q9 目標達成での評価は Q12 有用性の下限値をほぼ決定しています。科目の到達目標を確実に達成させた上で、学生が自分事として認識できる課題の解決に取り組ませて、獲得した知識・理解・技能が「生きて働く」場を体験させることが肝要です。



学部名		仏教	人間	心理社会	文	表現	地域創生	全学
現1年	19春	4.40	4.30	4.26	4.27	4.41	4.40	4.33
	19秋	4.45	4.40	4.22	4.29	4.38	4.43	4.34
現2年	18秋	4.45	4.42	4.20	4.33	4.27	4.14	4.30
	19春	4.54	4.47	4.17	4.33	4.30	4.14	4.32
	19秋	4.48	4.45	4.26	4.34	4.31	4.12	4.34
現3年	18秋	4.50	4.37	4.26	4.15	4.22	3.96	4.25
	19春	4.49	4.37	4.31	4.12	4.27	4.25	4.27
	19秋	4.55	4.35	4.33	4.18	4.25	4.36	4.31
現4年	18秋	4.57	4.32	4.30	4.17	4.24	3.96	4.28
	19春	4.59	4.34	4.24	4.36	4.29	4.31	4.36
	19秋	4.65	4.43	4.36	4.34	4.36	4.34	4.42
18卒	18秋	4.63	4.47	4.50	4.35	4.31		4.43

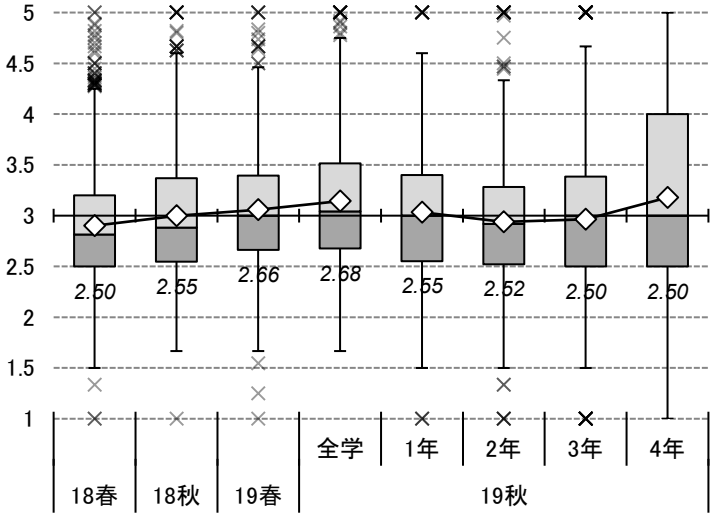
Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.181	−0.019
Q2教員努力	0.196	0.006
Q3教員シラバス対応	0.193	0.034
Q4事前・事後学修指示	0.146	−0.061
Q5教員質問相談対応	0.188	0.020
Q6教材・教具効果	0.181	−0.043
Q7授業に臨む姿勢	0.330	0.159
Q8質問・調査努力	0.251	−0.003
Q9目標達成	0.282	0.053
Q10学生の成長実感	0.272	0.038
Q11興味関心の向上	0.216	−0.059
Q12有用性	0.268	0.076
Q13出席率		
Q14平均学修時間	0.137	0.037

春学期に比べて秋学期で低下する傾向は昨年度までと変わりませんが、それでも出席率は引き続き高い水準にあります。学年が上がるごとに出席率が下がる傾向も昨年までと変わりません。他項目との相関はかなり弱く、偏相関において Q7 授業に臨む姿勢との間で比較的高い値が確認できるだけです。Q8 質問・調査努力や Q14 平均学修時間との相関の希薄さと併せて考えると、休まずに授業に出たことで真剣に取り組んだとの自己評価をしている学生も少なからずいるものと想像されます。授業に真面目に取り組むとはどういうことかを、様々な観点から学生を主語にしたセンテンスに書き出し、行動の自己評価における規準として示す必要もあるかもしれません。

Q14 この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか

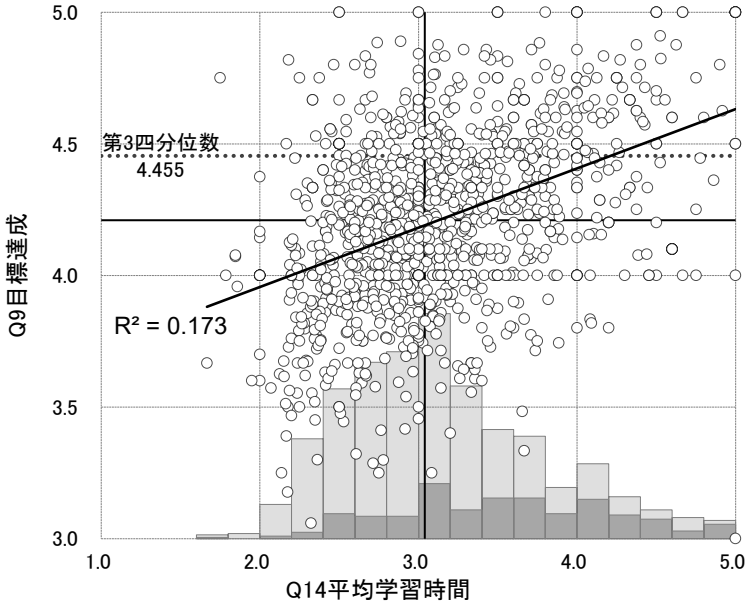


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.198	0.005
Q2教員努力	0.186	−0.040
Q3教員シラバス対応	0.177	−0.036
Q4事前・事後学修指示	0.284	0.148
Q5教員質問相談対応	0.183	−0.046
Q6教材・教具効果	0.198	−0.032
Q7授業に臨む姿勢	0.303	0.027
Q8質問・調査努力	0.369	0.151
Q9目標達成	0.321	0.040
Q10学生の成長実感	0.281	−0.003
Q11興味関心の向上	0.285	0.041
Q12有用性	0.276	0.037
Q13出席率	0.137	0.037
Q14平均学修時間		

少しずつ改善が積み上げられ、中央値は「31 分以上 60 分未満」に相当する 3.0 を超えるところまで来ました。箱の下端も、直近 3 回の集計では、授業 1 回あたり 30 分程度（「31 分以上 60 分未満」と「1 分以上 30 分未満」の境界）に相当する 2.5 を超えるところをキープしていますが、改善の余地はまだ小さからず残っているように思われます。相関行列の中で、比較的高い数値が確認できるのは、Q4 事前・事後学修指示と Q8 質問・調査努力（いずれも偏相関のみ）に限られま

す。事前学修（授業準備）で調べたり考えたりしたことを教室に持ち寄り、その成果でチームに貢献するような課題を与えれば、自分の怠慢が周囲に迷惑をかけますので、そう簡単にはさぼれないはずです。事後学修では、授業で学んだことをもとにじっくりと考えて答えを仕上げるべき課題をセットすれば、それに取り組む中で学びは深く確かなものになり、学修時間も伸びます。単に復習してきちんと覚えることだけを求められる場合とは、取り組むことへの意義も違ってくるのではないでしょうか。また、事後学修で学生が仕上げた答えの中から、特に優れたものや典型的な誤解／アプローチの誤りを含むようなものをピックアップし、次の授業の教室でシェアすれば、相互啓発の材料になるとともに一人の誤りを全員の学びに転じることもできるはずです。

Q9 目標達成との間では単相関でも 0.3 を少し超える程度です。「しっかり勉強したから目標が達成できた」という授業ばかりではないことは、下の散布図からも想像できます。前述の通り、教室での学びの成果を携えて改めて課題に向き合わなければ、学びは表層に止まり、深く確かなものになりません。授業準備が不足すれば、教室での学びは対話的なものに発展させ難く、「一人でもできること」に止まってしまいがちです。右図では、縦軸・横軸それぞれの中央値で座標面を区切りました。第二象限に位置する授業では、学生に対する要求水準（到達目標の高さ）をもう少し引き上げられそうですし、事前・事後学修に求める活動内容にも見直しの余地があるように思われます。



学部名		仏教	人間	心理社会	文	表現	地域創生	全学
現1年	19春	2.92	3.11	2.65	2.70	2.77	3.33	2.89
	19秋	2.89	3.07	2.66	2.84	2.88	3.63	2.92
現2年	18秋	2.99	2.84	2.47	2.86	2.65	2.88	2.75
	19春	3.23	3.13	2.64	2.95	2.72	2.82	2.89
	19秋	3.14	3.05	2.66	2.93	2.74	2.94	2.88
現3年	18秋	2.92	2.93	2.72	2.59	2.70	2.79	2.74
	19春	3.12	3.04	2.83	2.68	2.83	2.92	2.87
	19秋	2.95	2.94	2.82	2.71	2.90	2.98	2.85
現4年	18秋	2.74	2.76	2.80	2.84	2.85	2.77	2.81
	19春	3.04	3.14	2.73	3.10	3.03	3.06	3.03
	19秋	3.23	3.47	3.11	3.30	3.20	3.36	3.28
18卒	18秋	2.99	3.18	3.07	3.27	3.00		3.13

※上表をご覧になる際は、同一集団の経年的な推移に加え、一つ上の学年の１年前との差分にもご注目ください。

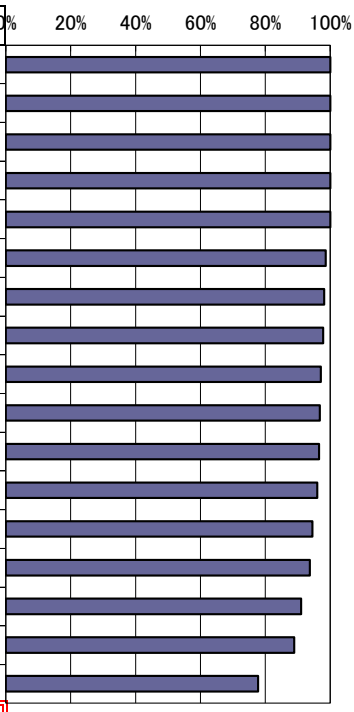
参考資料１

実施率／回収率

参考資料1-1. アンケート実施率(回収率)科目区分別

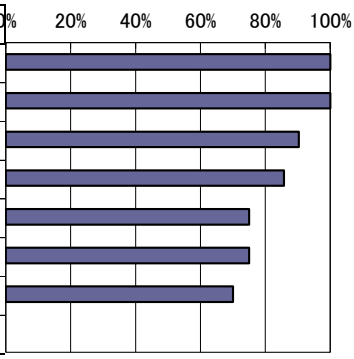
■学部1274科目

科目区分		授業数	実施数	実施率
04 Ⅰ類(留学生科目)	304	9	9	100.0%
08 人間環境学科	307	24	24	100.0%
10 人間学部共通	309	4	4	100.0%
12 地域創生学科	316	71	71	100.0%
15 第Ⅱ類科目(学部共通)	318	1	1	100.0%
18 仏教学科	305	145	143	98.6%
02 歴史学科	314	109	107	98.2%
05 人文学科・日本文学科	313	93	91	97.8%
03 社会福祉学科	306	69	67	97.1%
16 Ⅰ類(学びの技法)	303	248	240	96.8%
07 教育人間学科	308	58	56	96.6%
14 臨床心理学科	311	50	48	96.0%
13 第Ⅲ類科目	319	55	52	94.5%
06 Ⅰ類(学びの窓口)	302	48	45	93.8%
15 表現文化学科(表現学部)	315	134	122	91.0%
19 人間科学科	310	45	40	88.9%
11 心理社会学部共通	312	9	7	77.8%
計		1172	1127	96.2%



■大学院89科目

科目区分		授業数	実施数	実施率
02 院史学専攻(修士・博士)	302	11	11	100.0%
08 院比較文化専攻(修士・博士)	307	4	4	100.0%
01 院仏教学専攻(修士・博士)	301	31	28	90.3%
04 院宗教学専攻(修士・博士)	308	7	6	85.7%
03 院国文学専攻(修士・博士)	303	4	3	75.0%
06 院社会福祉学専攻(修士)	305	4	3	75.0%
07 院臨床心理学専攻(修士)	304	20	14	70.0%
05 院人間科学専攻(修士)	306	1	0	0.0%
計		82	69	84.1%



参考資料1-2. アンケート実施率（学部） 2005年度春学期～2019年度春学期

年度	学期	回収率	回収数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217
2017年度	秋学期	92.6%	1096	1183
2018年度	春学期	97.8%	1183	1209
2018年度	秋学期	95.1%	1098	1154
2019年度	春学期	95.7%	1219	1274

2019年度	**秋学期**	**96.2%**	**1127**	**1172**

参考資料２

自由記述回答

頻出キーワード分析

自由記述回答　頻出キーワード分析について

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に
「この授業において、あなた自身の『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じたのはどのような点でしたか。また、この授業において改善できる点があればお書きください。」
として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出する単語を調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1 として出現頻度の上位 10 ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11 位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2 による前回と前々回（＝前年同期）データに加え、今回の全学平均を表示することとしていますが、今回は今年度春学期からの質問文の変更があったため、前々回は掲載がありません。

分析上の主なポイント

質問文は前半の「『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点」（効果点）と後半の「改善できる点」（改善点）に分かれます。そこで記述内容により効果点と改善点に分けて集計を行いました。分析上の主なポイントは下記の通りです。

(1) 質問の前半に対する回答（効果点）と後半に対する回答（改善点）を分けて集計・分析を行っています。

(2) できるだけ具体的なキーワードに分解・集計しています。例えば「分かりやすい」は「〇〇〇で分かり易かった」「△△△をしてくれたので分かり易かった」など、分かり易い理由となった「〇〇〇」「△△△」を独立したキーワードとして集計。理由が明確でないものを「分かりやすい」として残しました。

(3) 当該授業そのものがテーマとしている項目は、キーワードとして出現数が高い場合でも全学共通の課題や効果点とはなりえないため、対象キーワードから除外しました。

※例：「レポートの書き方がよく分かった」はキーワード「レポート・課題」からは除外。
キーワード「レポート・課題」には「レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった」などに限定して仕分け・集計。

効果点と改善点

＜注＞今回授業アンケートにおける自由記述の記載率は前回と比べて 30%近く低くなったため、キーワードの出現率（キーワード出現数を回答者数で除した率）も全体として下がる傾向にあります。出現率の前回比較グラフについては、この点を念頭にご覧ください。

1. 効果点（『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点）

前回の首位「分かりやすい」に代わって「丁寧」が首位となりました。「分かりやすい」の具体的な理由として関連付けられる第 3 位の「説明・解説」（前回第 4 位）、第 4 位の「実例・具体的」（前回第 3 位）は順位が入れ替わりました。「レポート・課題」（レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった）は前回の 15 位から５位に大きく躍進しました。記載率が低下しているにもかかわらず出現率も８割近く伸び、大きく改善が進んだことを示しています。また、前回は番外だった「パワポ・スライド」（パワーポイント、スライドが分かりやすい／充実していた）が 12 位

に入りました。その他のキーワードは多少の順位の入れ替えはあるものの、前回と同様の内容となっています。

2. 改善点（改善できる点）

効果点で大きく順位を上げた「レポート・課題」が前回の 1 位から 2 位に順位を下げ、代わって「テスト・試験」が 2 位から 1 位になりました。「レポート・課題」（レポート、課題の出し方や評価方法を改善してほしい）の改善が進んだことを示すものとして考えられますが、依然として高位に位置することには変わりなく、「効果点」への転換を目指してさらなる継続的な改善が望まれます。

「レポート・課題」同様、効果点にも改善点にもリストアップされるキーワードは、改善が進めば「効果点」になる可能性もあることから、改善に向けてのポイントと位置付けることができそうです。具体的には「プリント・資料」（改善点 5 位/効果点 7 位）、「パワポ・スライド」（改善点 7 位/効果点 12 位）「説明・解説（不足）」（改善点 12 位/効果点 3 位）などです。

一方、出現率自体に着目すると、前回から増加となったのは「はやい」「聞きにくい」「パワポ・スライド」「出席」です。但し、学部、回答人数帯、学年により、出現数・率に大きな違いがありますので、引き続きそれぞれの集計カテゴリー別の改善行動が重要となりそうです。なお、自由記述の記載率低下以上に全体として出現率を下げた（＝改善が進んだ）項目は「分かりにくい」「レジュメ」「字が読みにくい」などでした。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

※1 キーワードと集計内容について

キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードに集約してカウントしています。各キーワードに含まれる「回答内容」については、「効果点」「改善点」それぞれの集計の最初のページ「頻出キーワード【全学】」の下段に掲載された一覧表を参照ください。

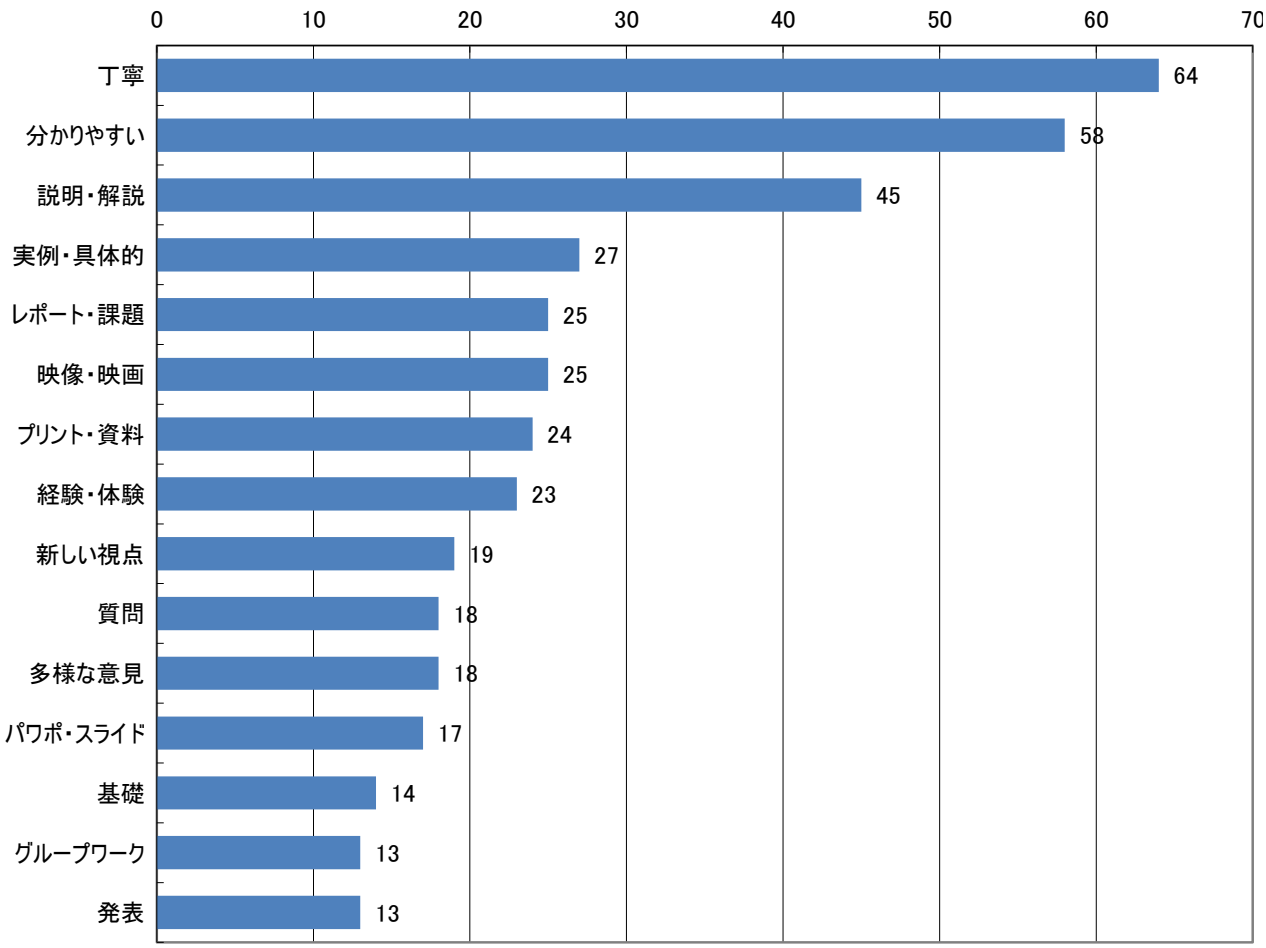
※2 出現率について

「出現率前回比較　全学」下段の説明を参照ください。

【効果点】

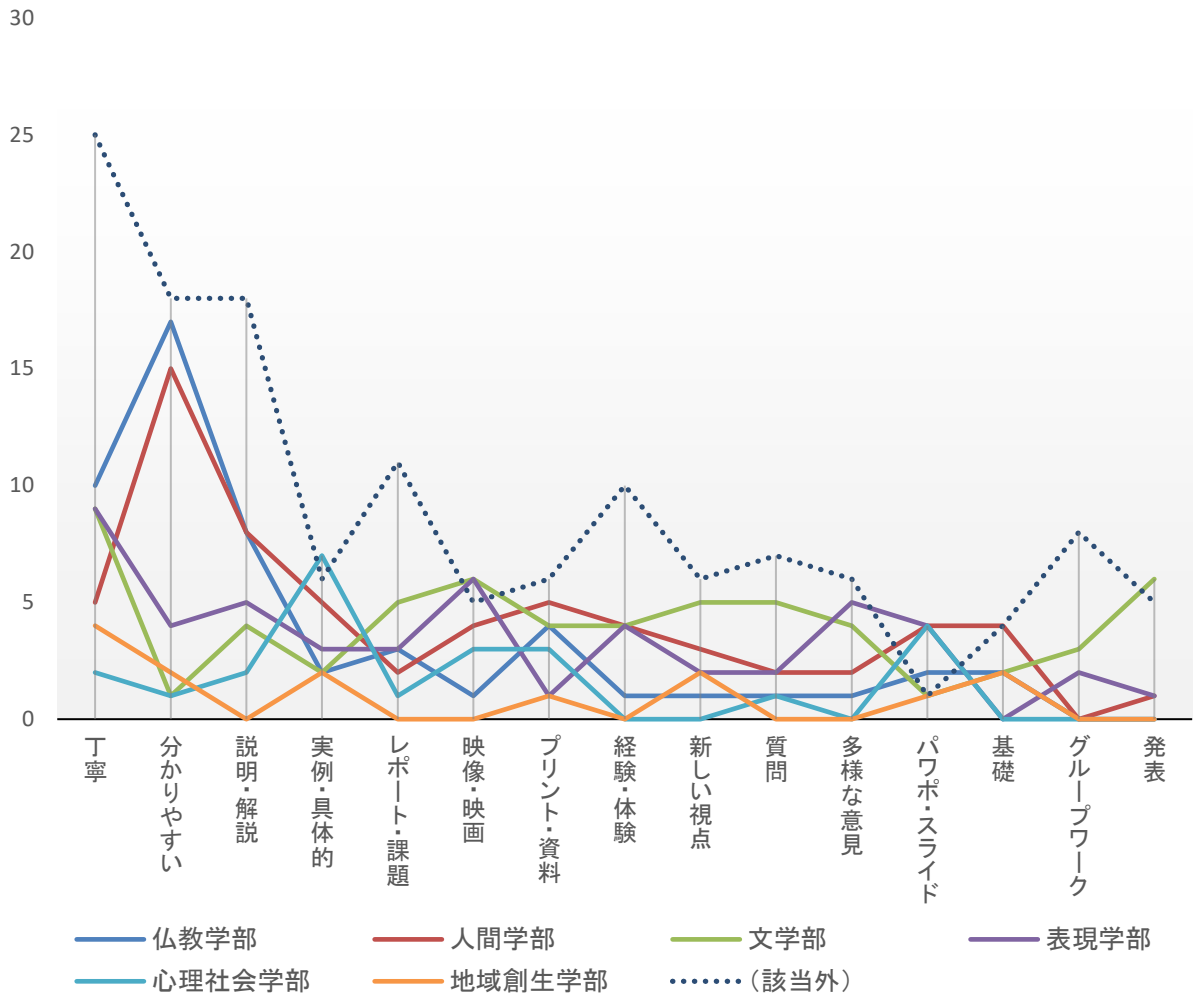
「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点

自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【全学】

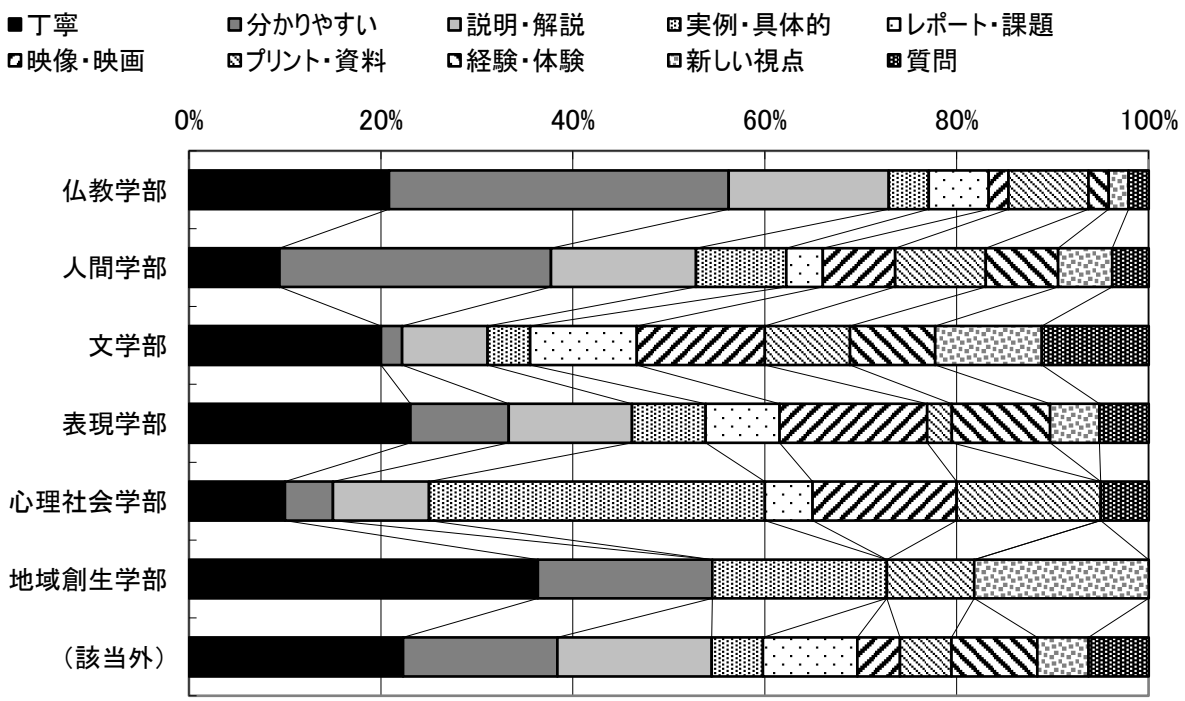


キーワード	主な内容	出現数
丁寧	授業、プリント、資料、教科書、テキスト、教材、パワーポイント、スライド、添削、質問対応などが丁寧で分かりやすい	64
分かりやすい	授業が分かりやすい ※分かりやすい理由の記載があるものは各項目に分類	58
説明・解説	（授業について）説明、解説が分かりやすい ※「具体的な説明、事例による説明が分かりやすい」は「事例・具体的」に、「丁寧な説明、解説」は「丁寧」に分類	45
実例・具体的	実例、具体例で分かりやすい、理解が深まった／具体的で分かりやすかった／具体的に理解できた	27
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった ※「レポート、課題について具体的に説明」は「実例・具体的」に分類	25
映像・映画	映像、映画で分かりやすい、理解が深まった	25
プリント・資料	プリント、資料が分かりやすい／充実していた ※「丁寧なプリント、資料」は「丁寧」に分類	24
経験・体験	授業がよい経験になった／授業で貴重な体験ができた	23
新しい視点	新しい視点を学べた	19
質問	質問しやすい、答えてくれた ※「丁寧な質問対応」は「丁寧」に分類	18
多様な意見	多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった	18
パワポ・スライド	パワーポイント、スライドが分かりやすい／充実していた ※「丁寧なパワーポイント、スライド」は「丁寧」に分類	17
基礎	基礎を学べて、ためになった、身についた、理解が深まった ※「基礎を丁寧に指導してもらえた」は「丁寧」に分類	14
グループワーク	グループワークを行って、ためになった	13
発表	発表を行って（発表を見て）、ためになった、身についた、理解が深まった ※「グループで発表できてよかった」は「グループワーク」に分類	13

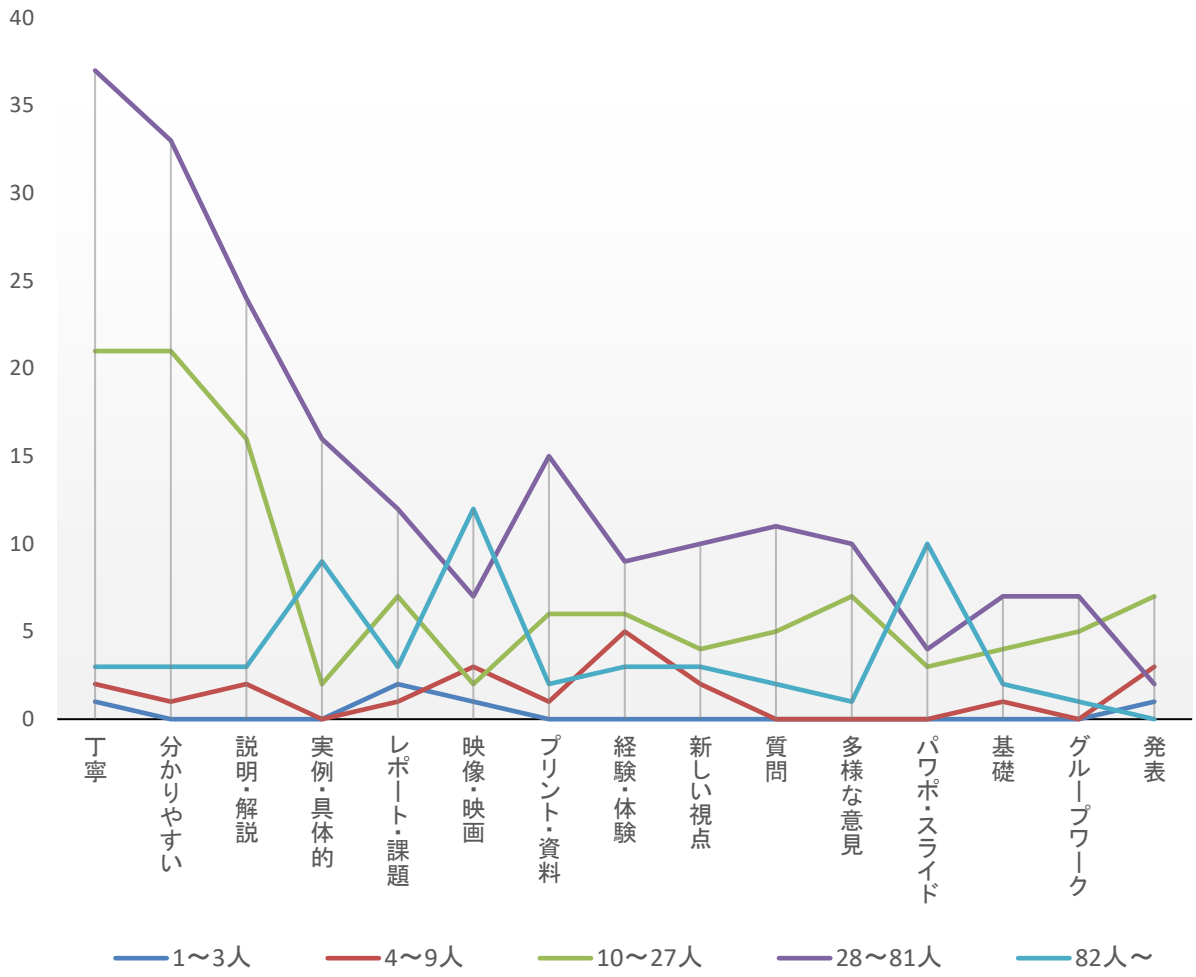
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【学部別】



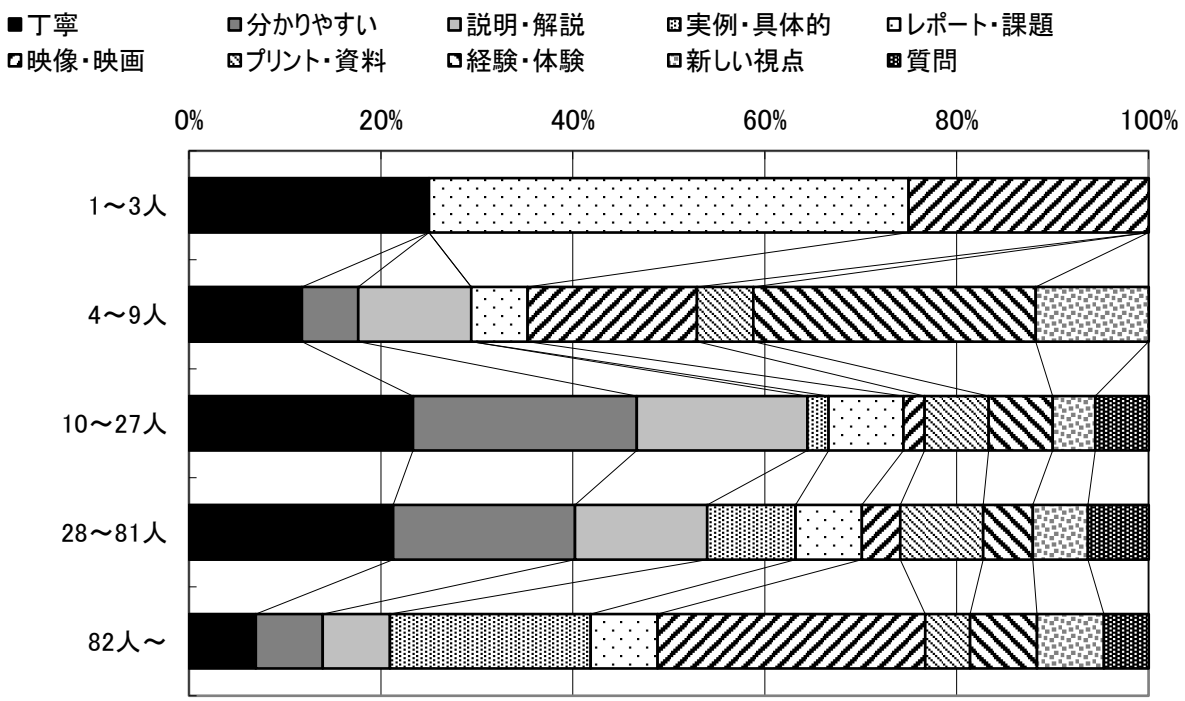
上位10項目の学部別割合



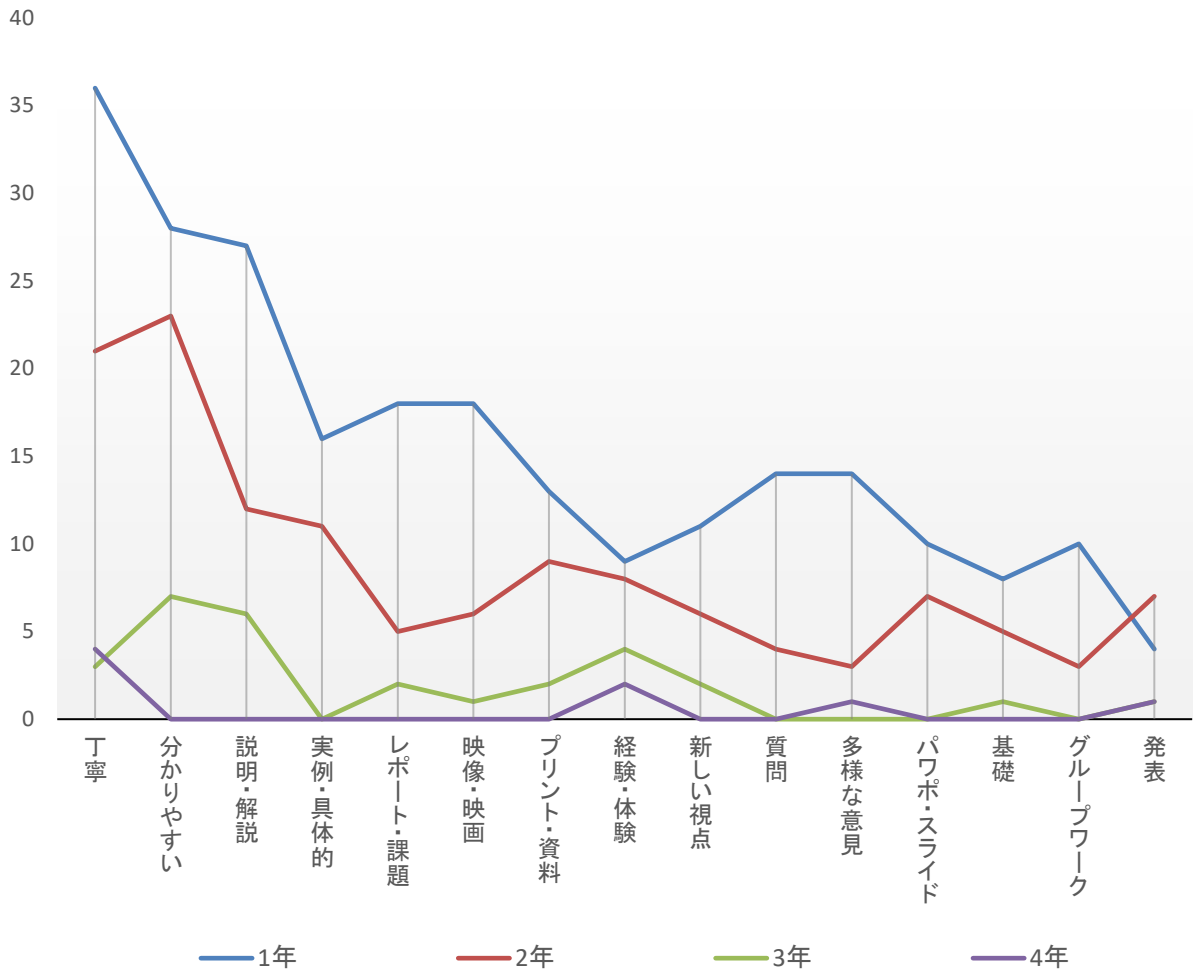
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【回答人数帯別】



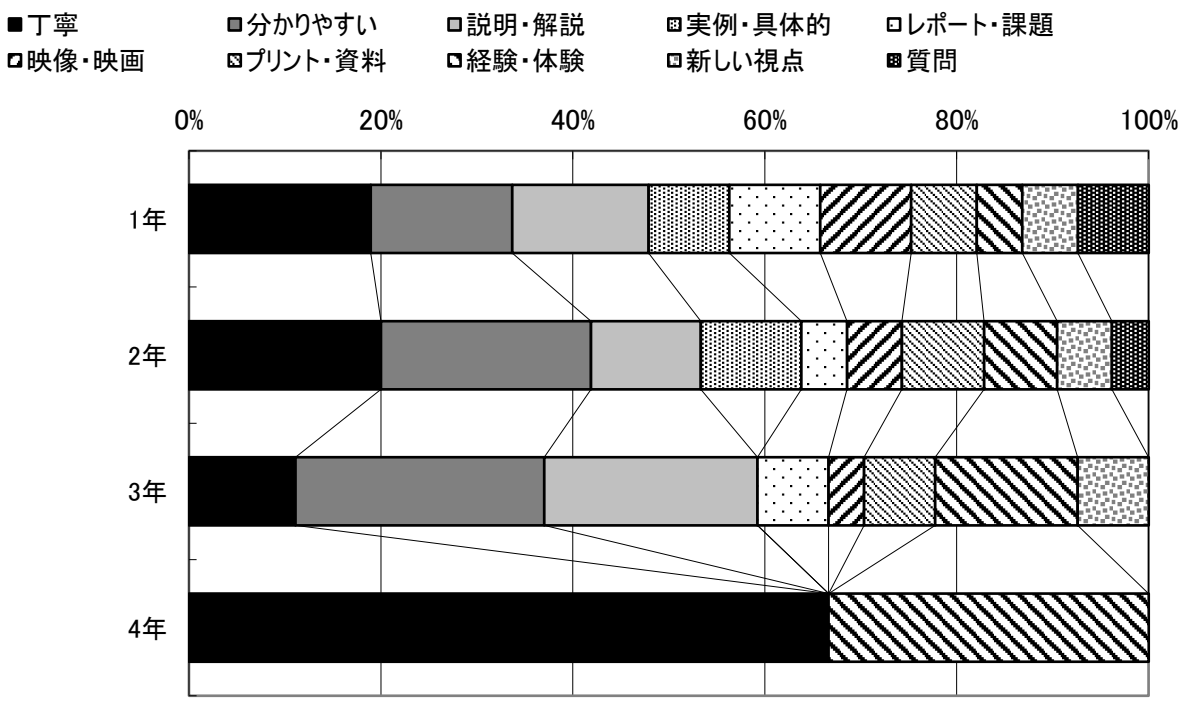
上位10項目の回答人数帯別割合



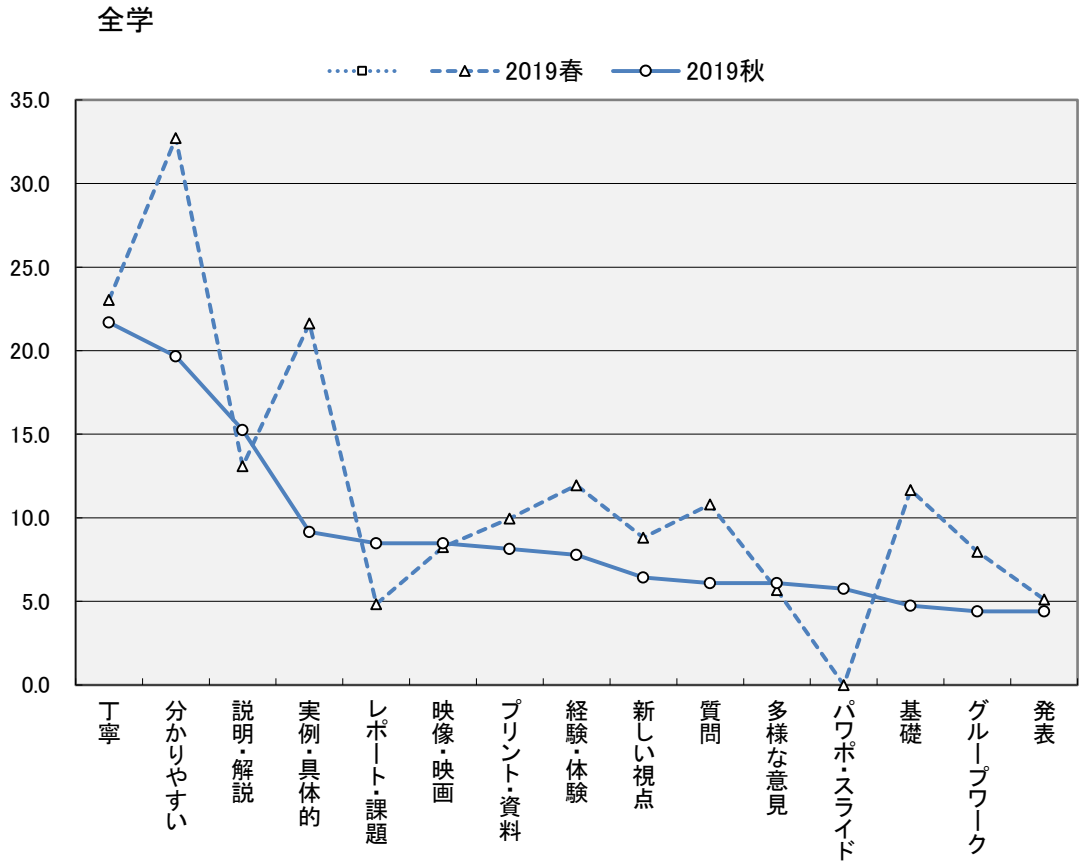
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 全学

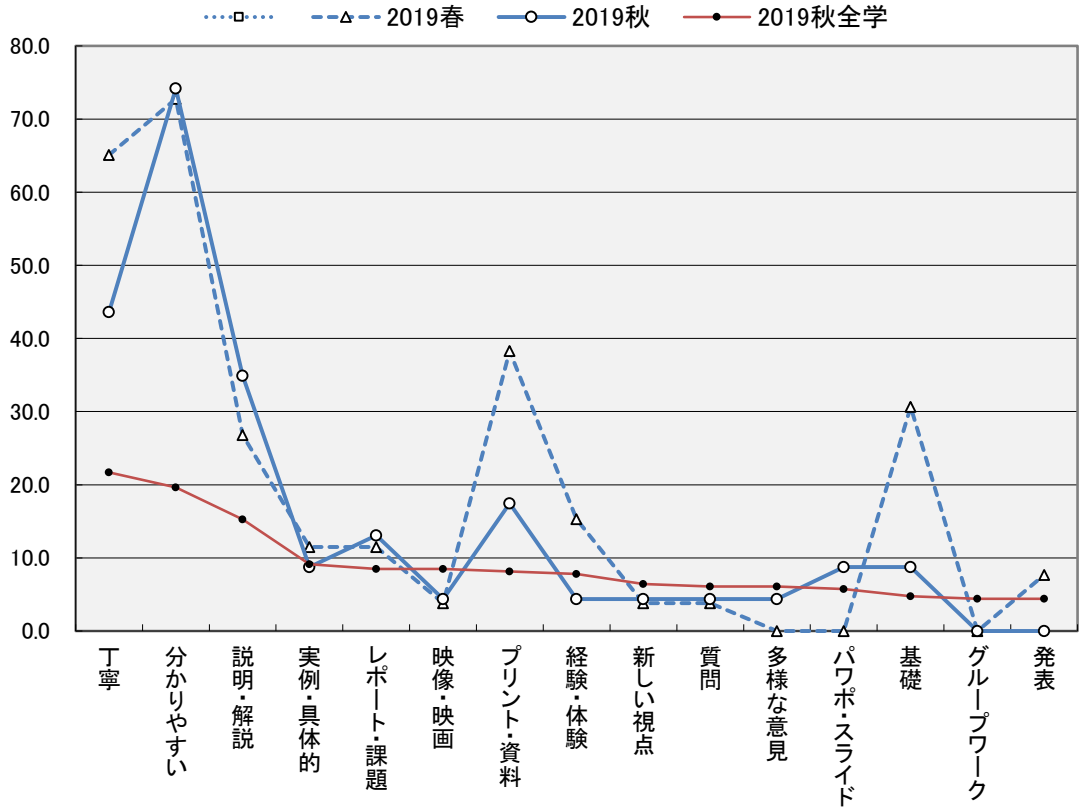


「出現率」について

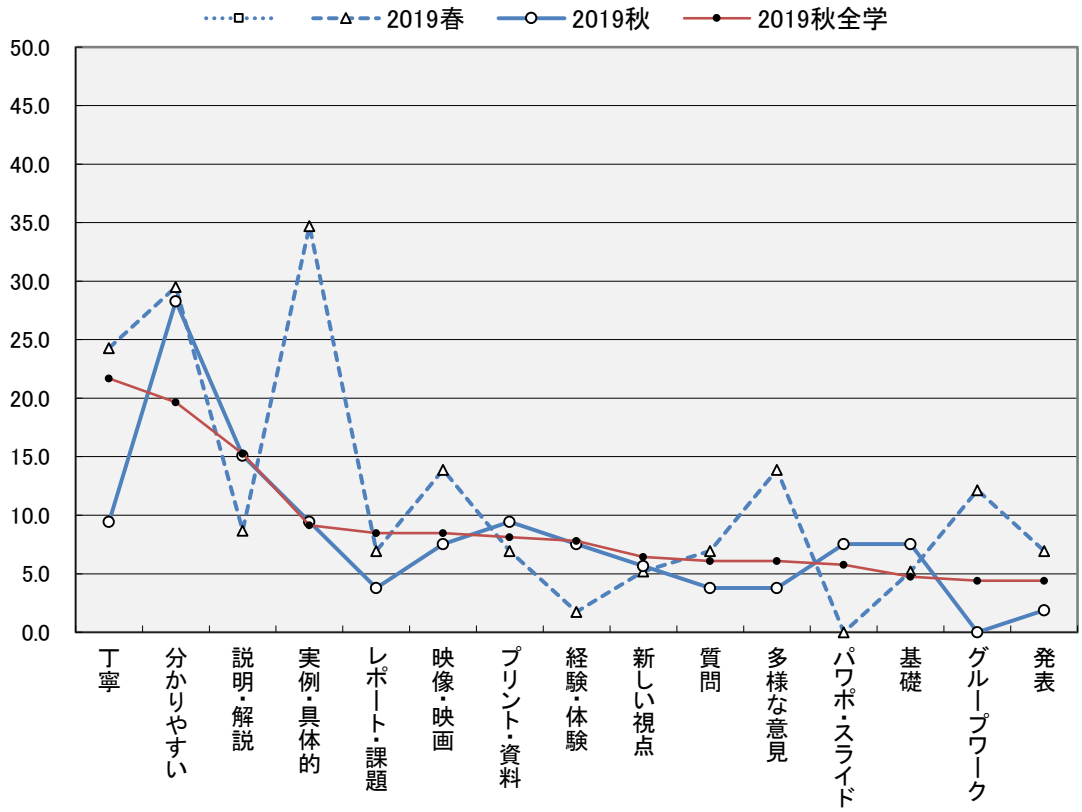
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
  総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
  出現率は下記の式で計算されます。
  出現率＝出現数／回答者数×10^4
  （回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。）
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《仏教学部》

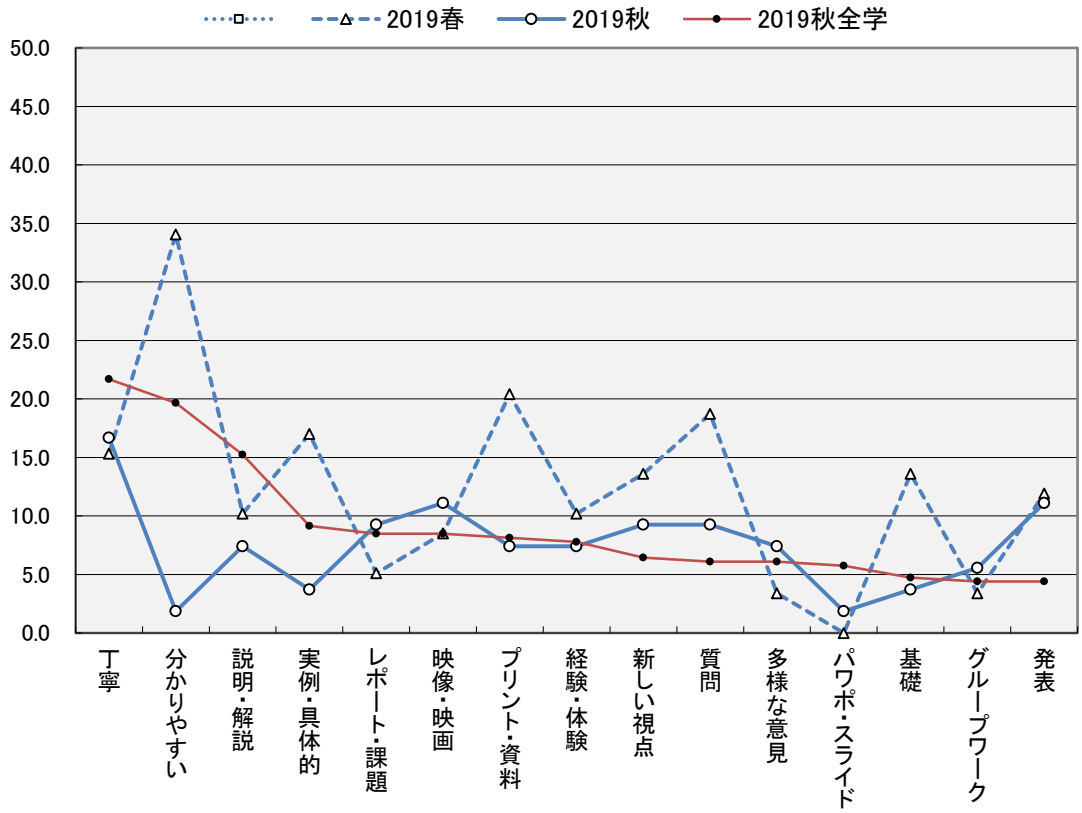


《人間学部》

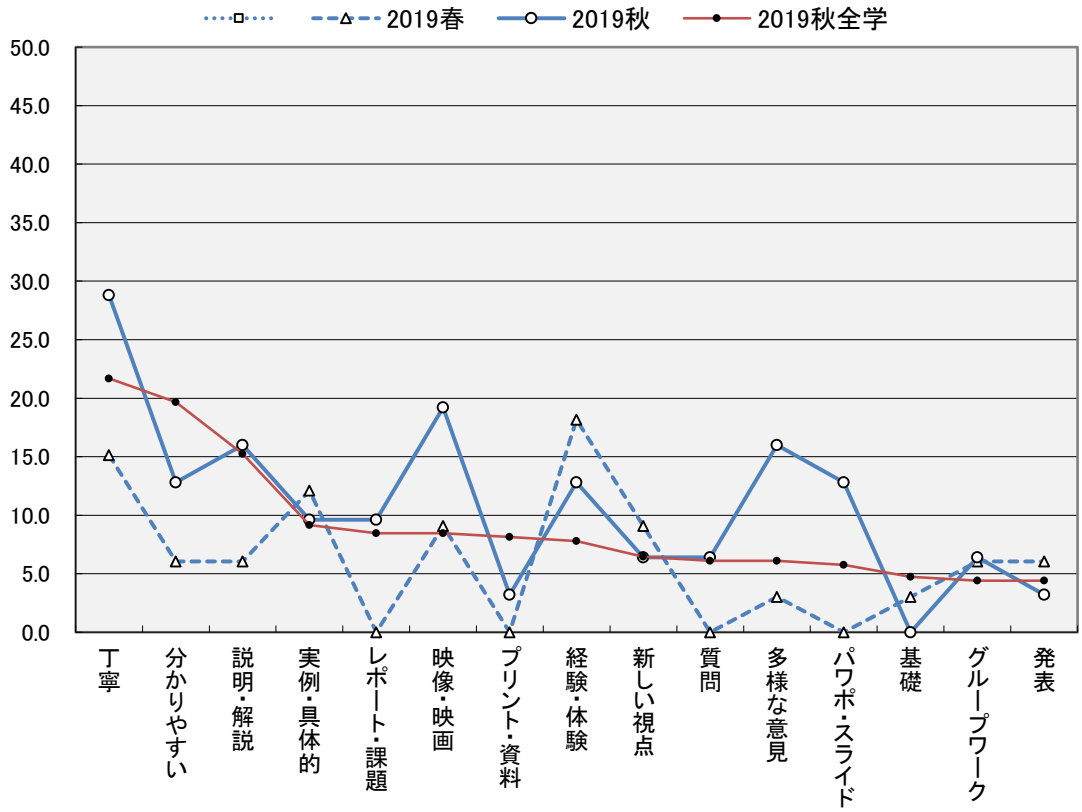


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《文学部》

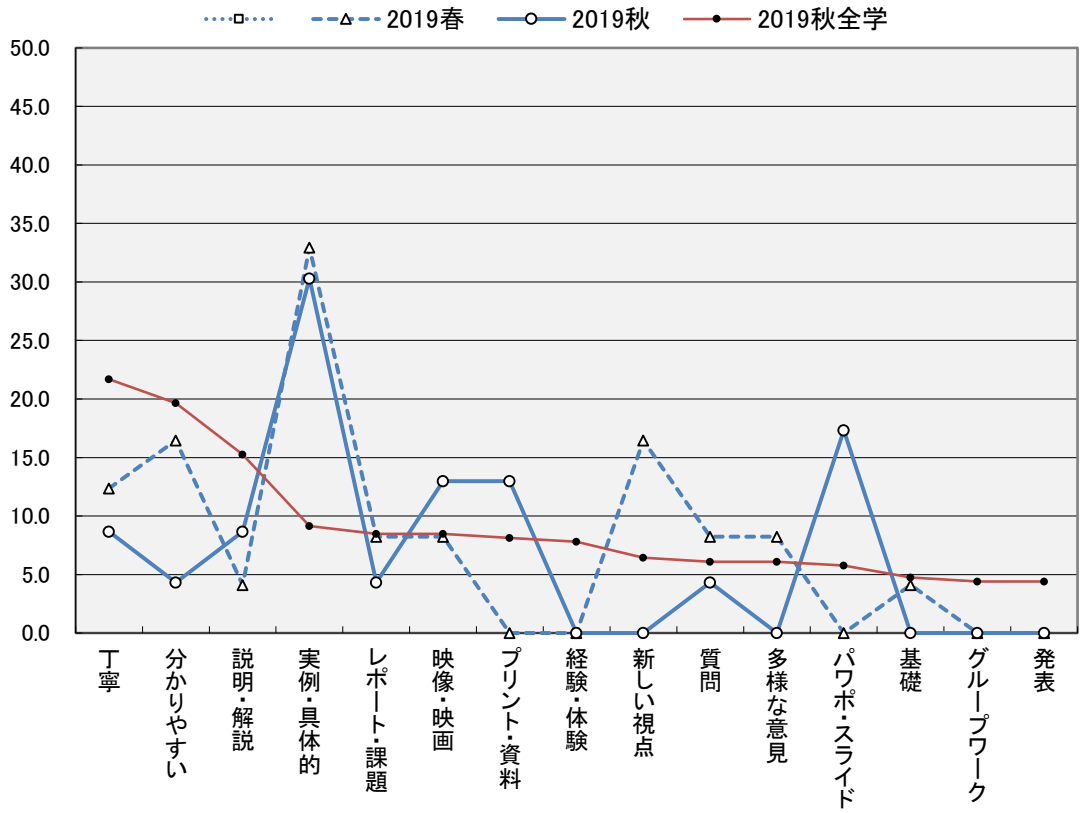


《表現学部》

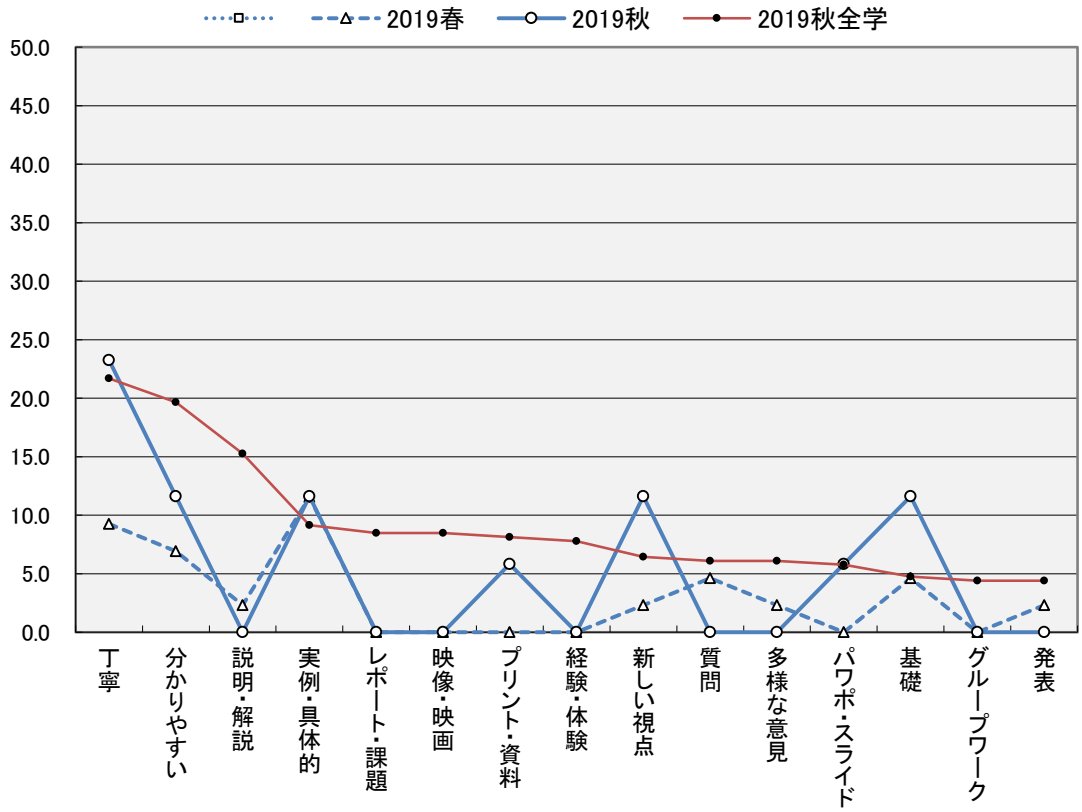


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《心理社会学部》

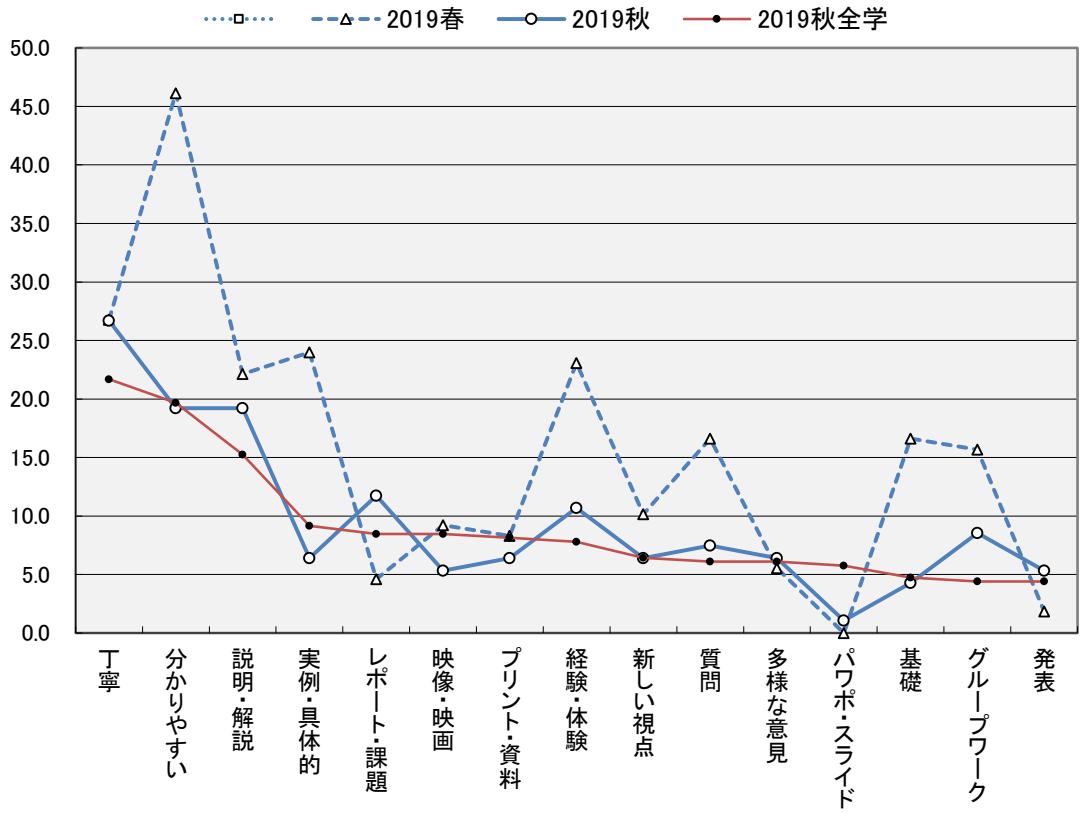


《地域創生学部》



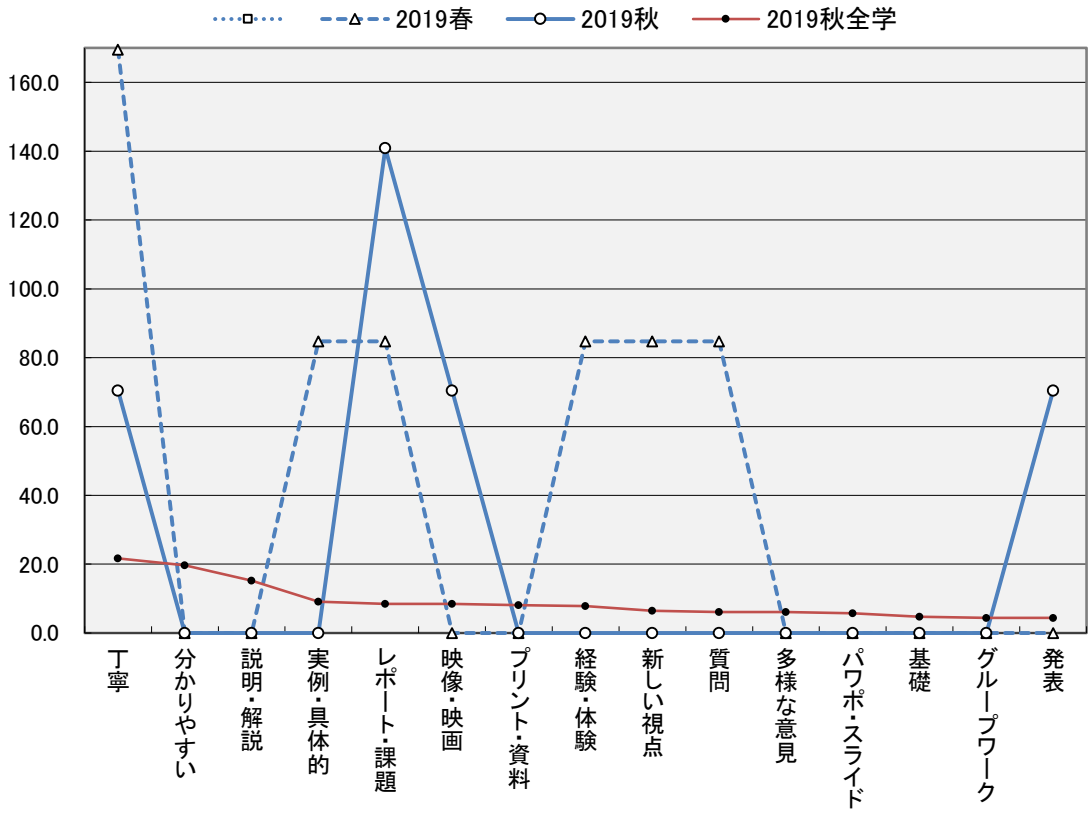
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《(該当外)》

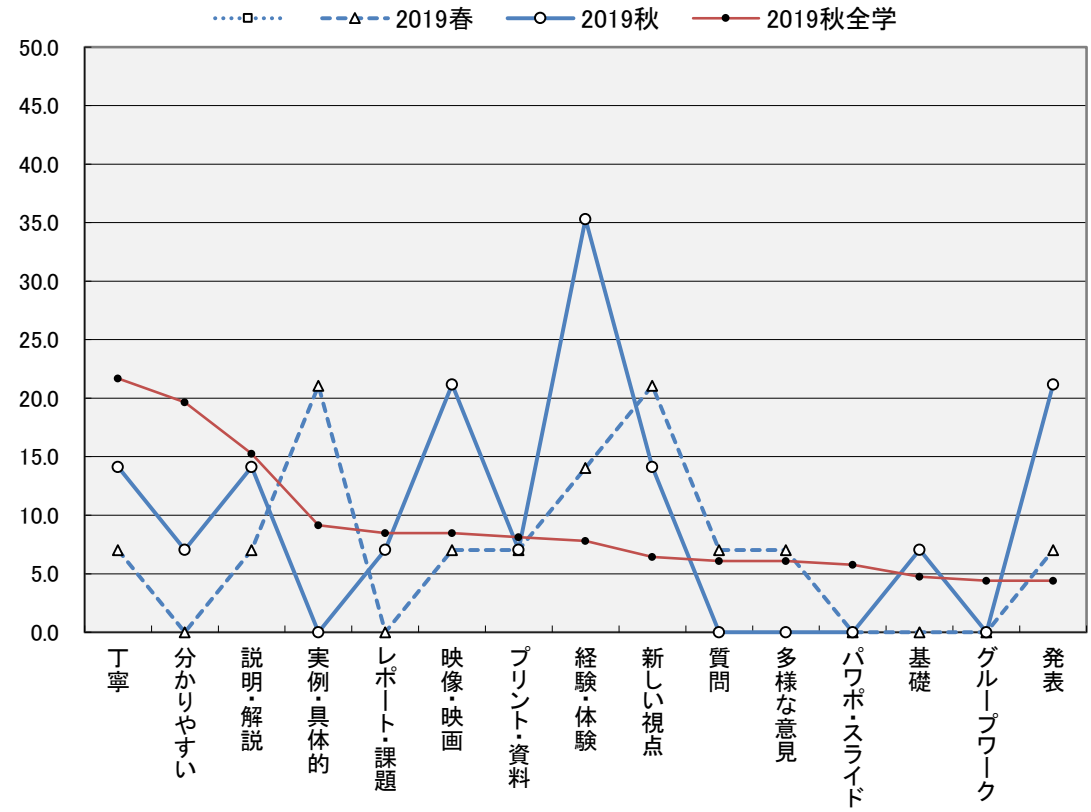


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

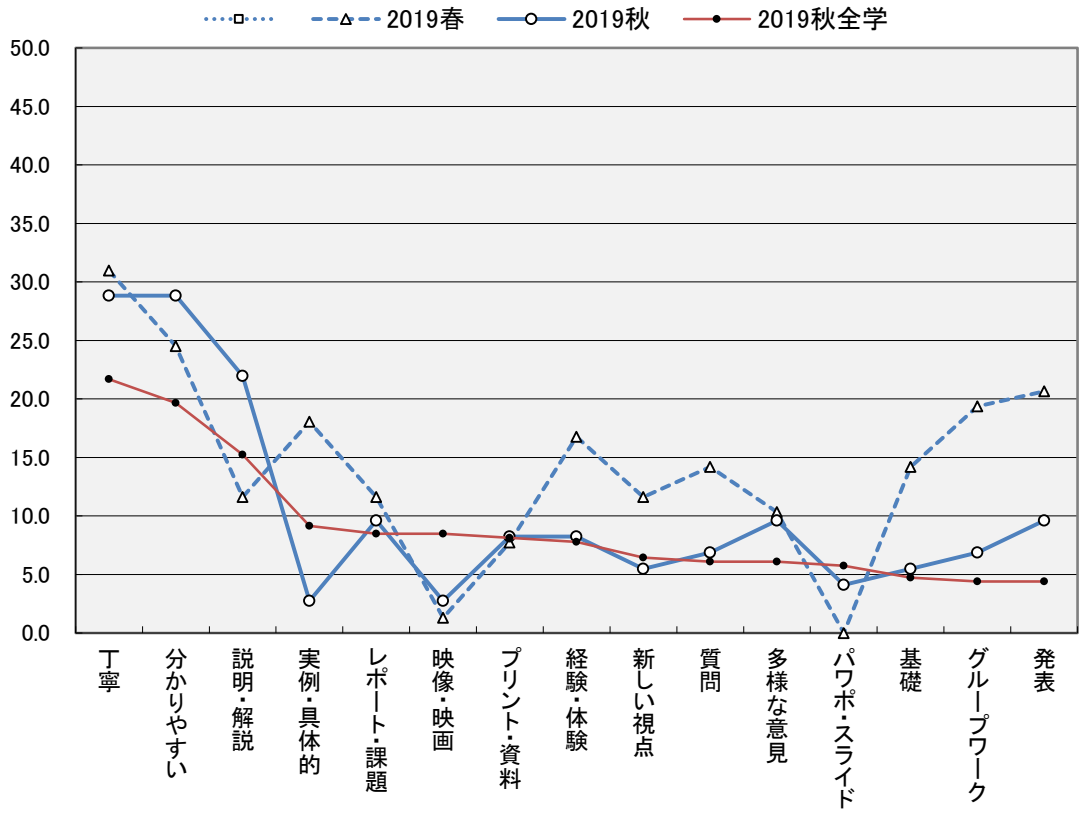


《4～9人》

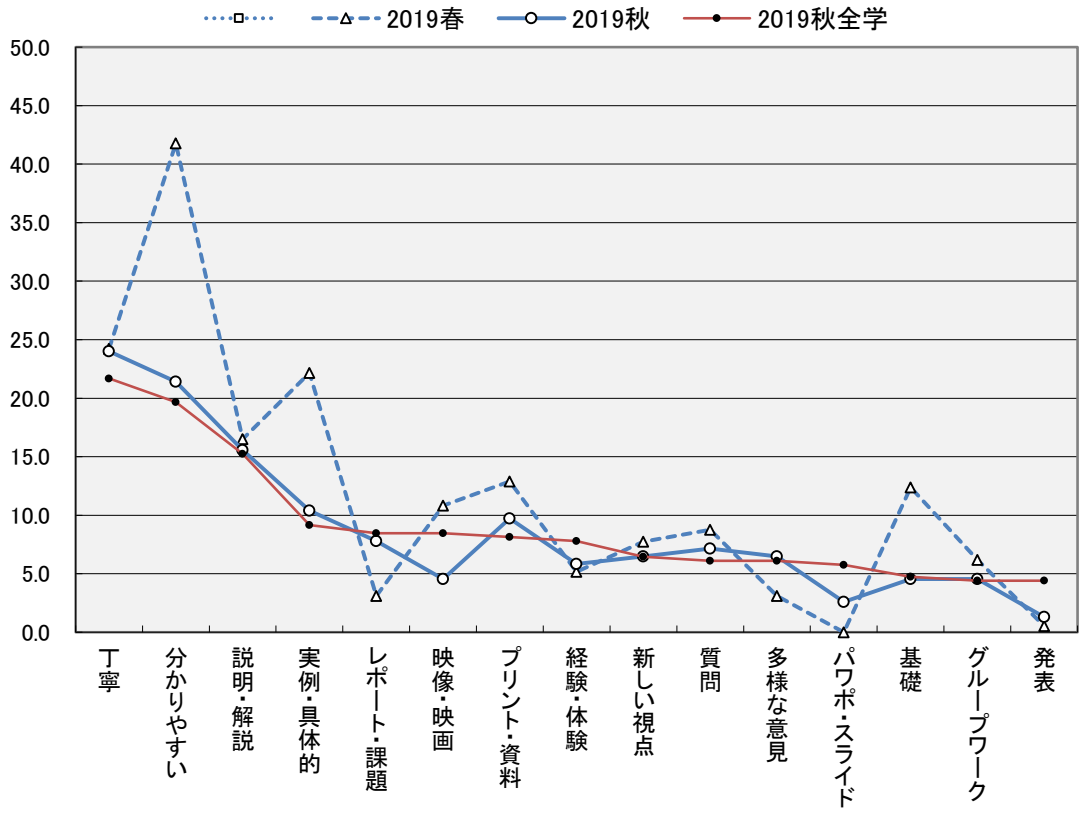


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《10～27人》

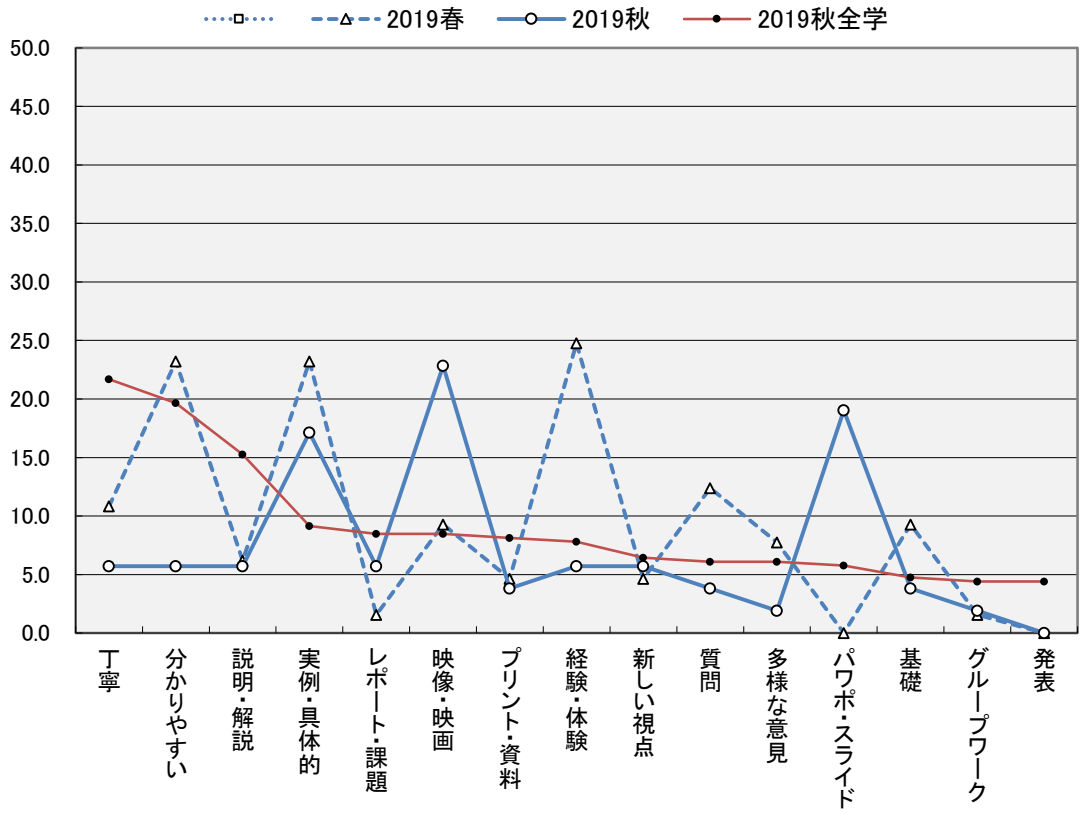


《28～81人》



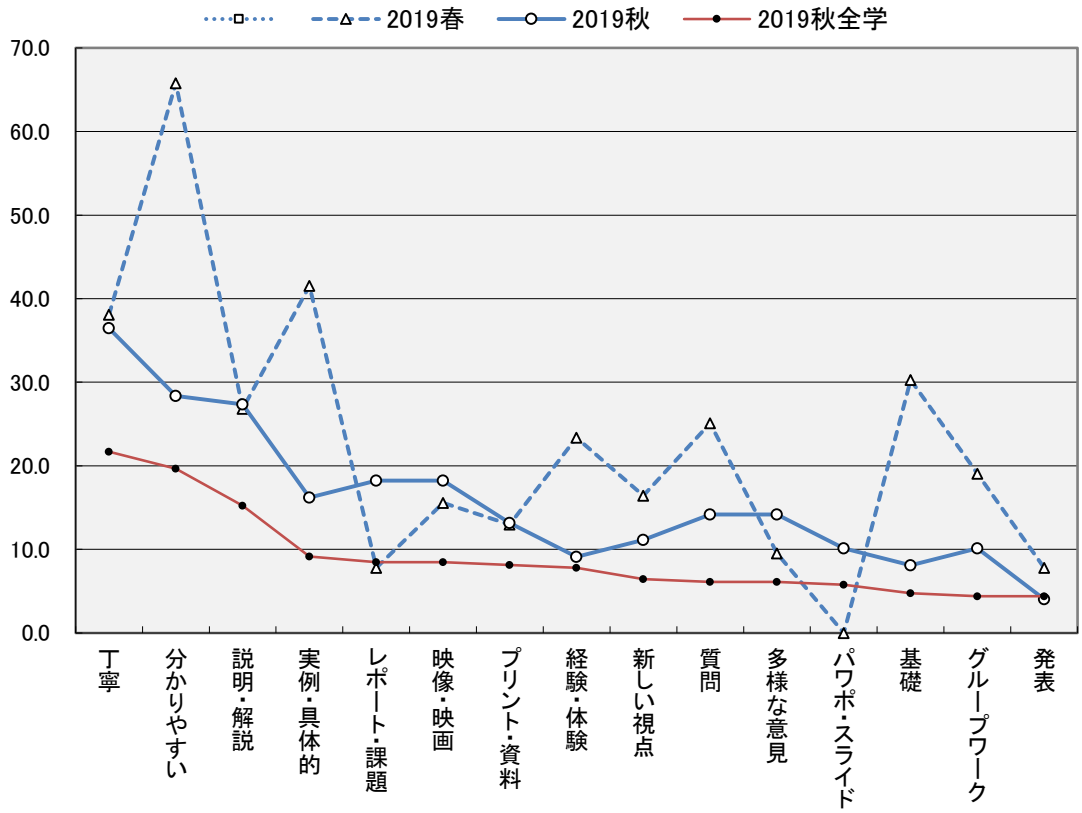
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《82人～》

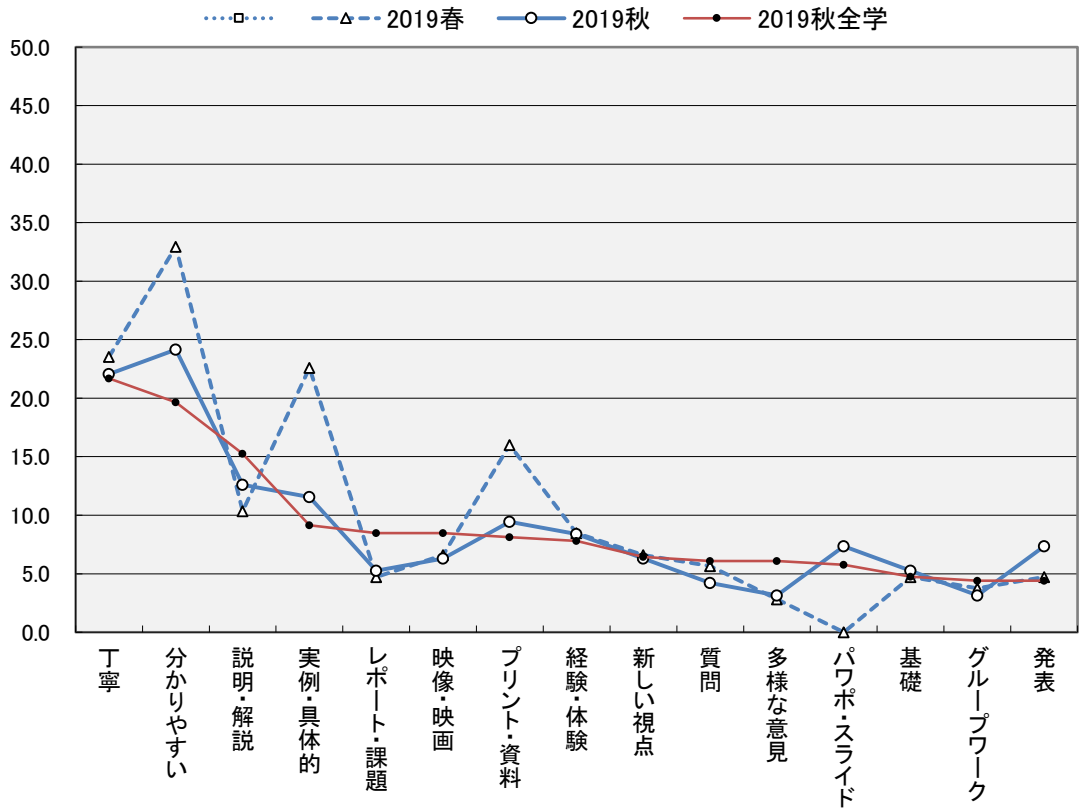


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

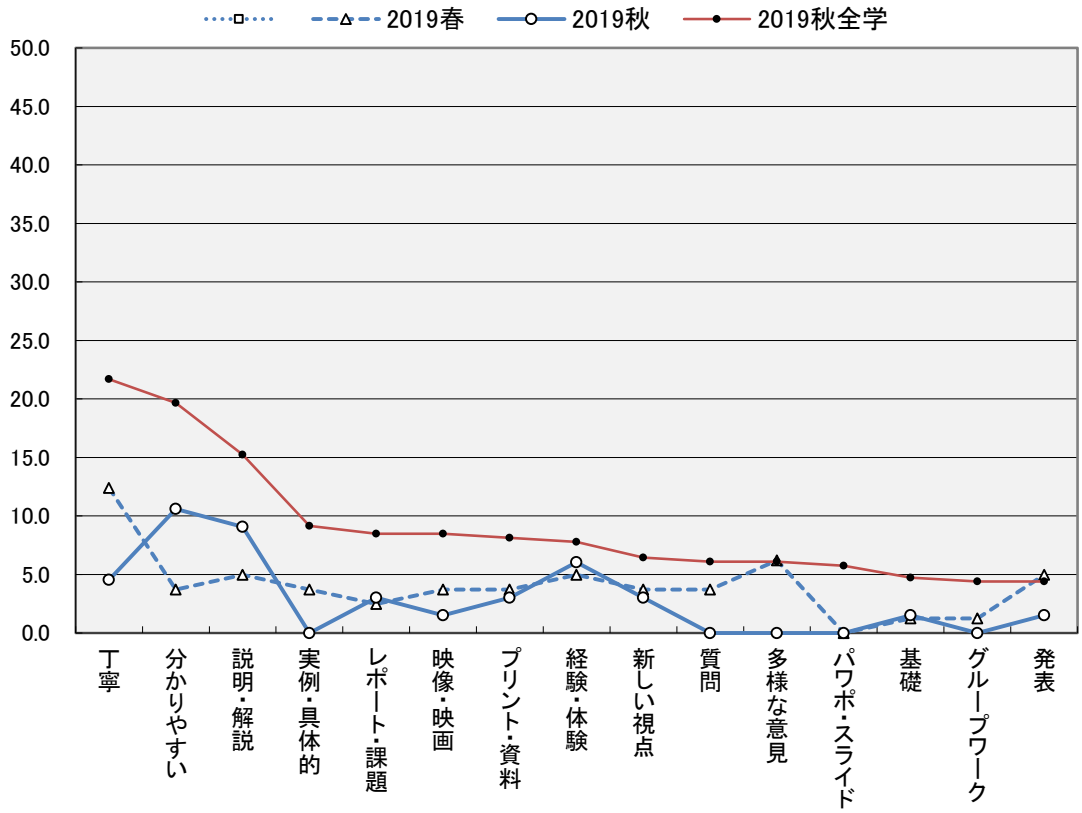


《2年》

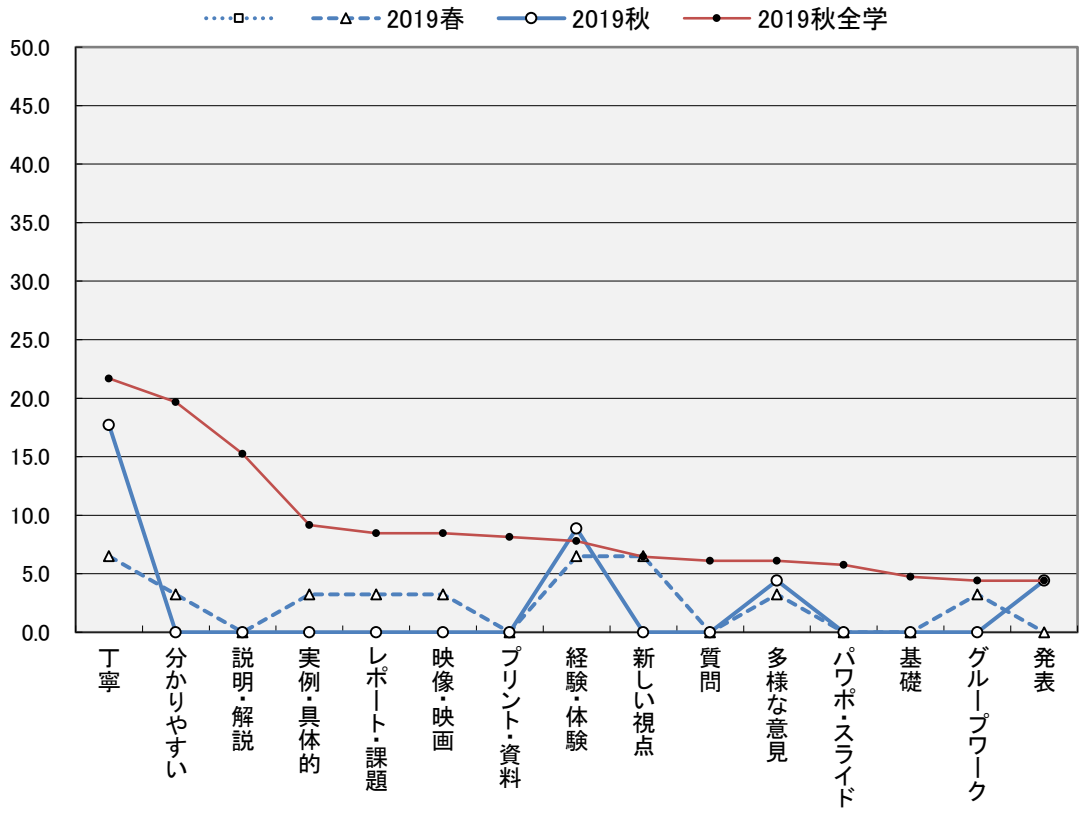


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



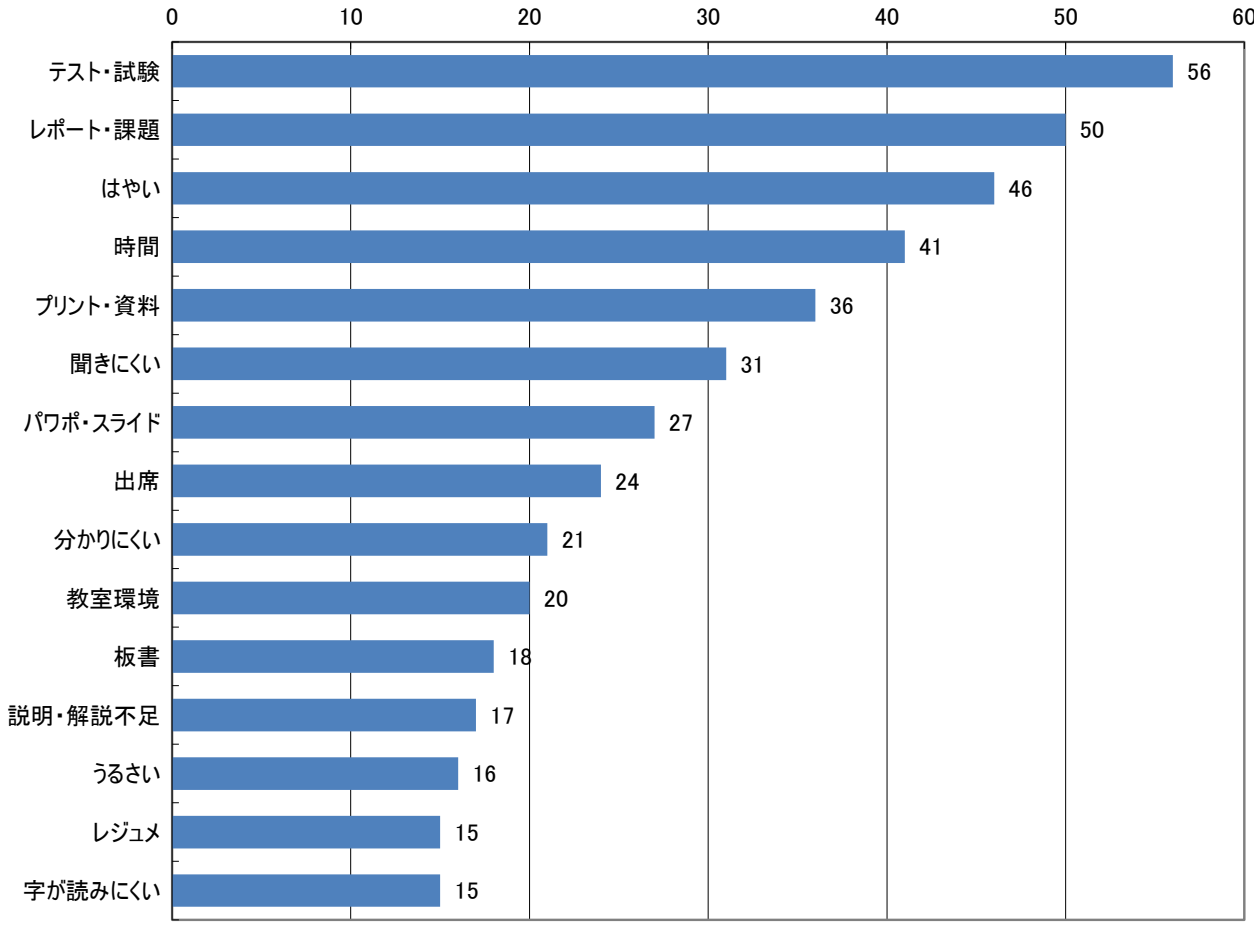
《4年》



【改善点】

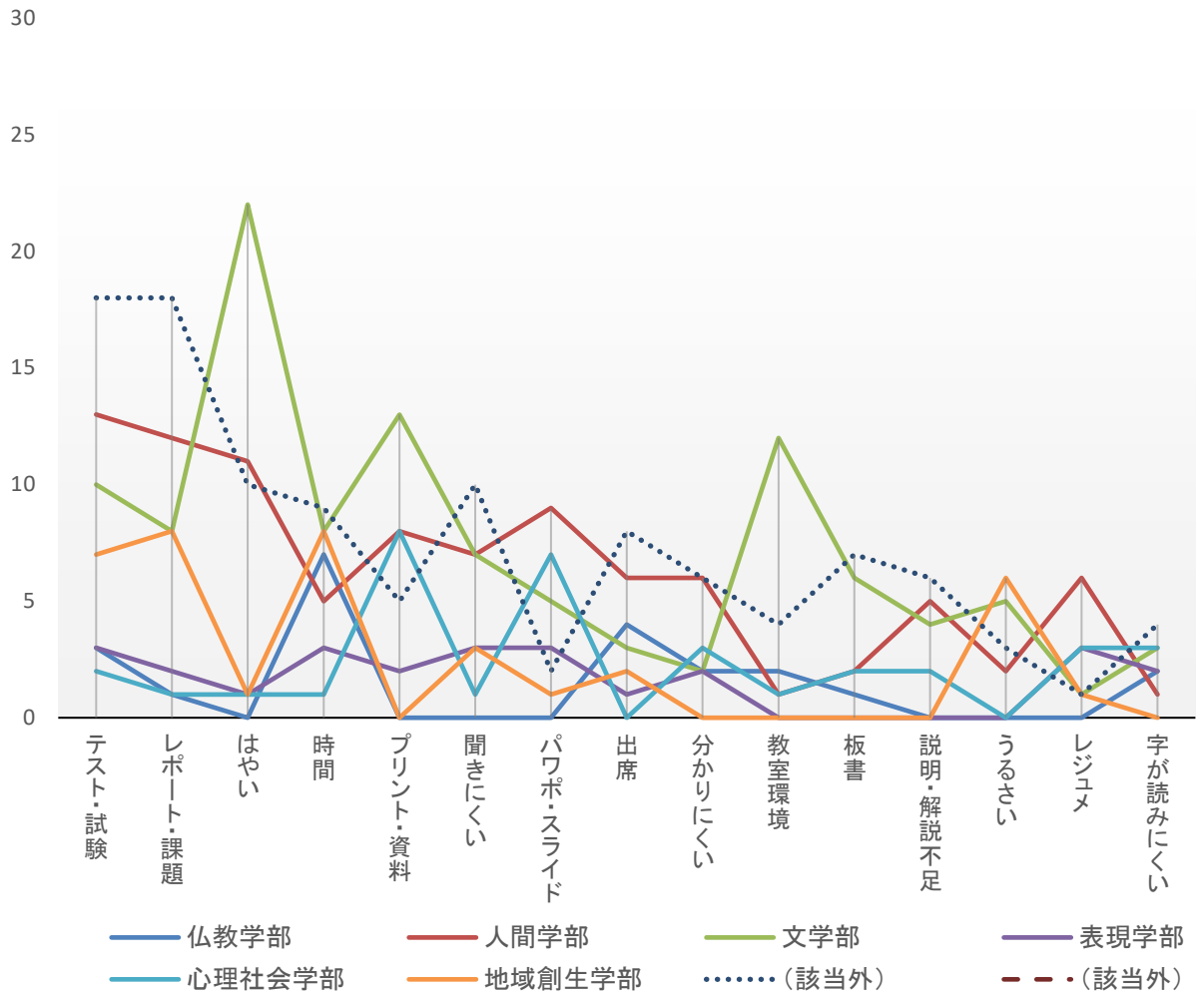
改善できる点

自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【全学】

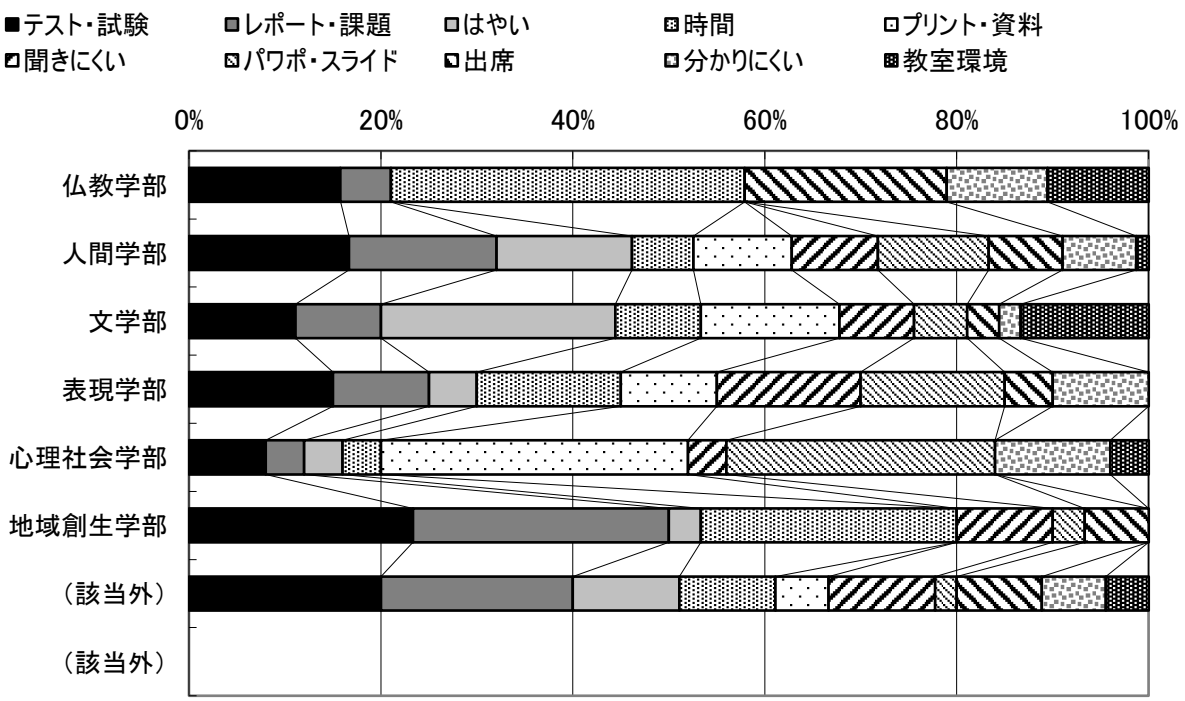


キーワード	主な内容	出現数
テスト・試験	テストの実施方法を改善してほしい／テストが難しい／テスト時間が短い、足りない	56
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法を改善してほしい	50
はやい	進行が早い、早口、画面切り替えが早いなどの理由で授業についていけない	46
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない ※「スライドを変える時間が短い」は「はやい」に、「テスト時間が短い、足りない」は「テスト」に分類。	41
プリント・資料	プリント、資料が分かりにくい／プリント、資料の内容、配布方法を改善してほしい ※「プリント、資料の字が小さくて読みにくい」は「字が読みにくい」に分類。	36
聞きにくい	声が小さい、聞き取りづらい／声が大きすぎる／（声が小さいので）マイクを使ってほしい／（うるさいので）マイクを使わないでほしい ※「早口で聞きにくい」は「はやい」に、「周囲がうるさい、私語が多い」は「うるさい」に分類。	31
パワポ・スライド	パワーポイント、スライドが分かりにくい、見にくい／パワーポイント、スライドの内容、配布方法を改善してほしい ※「字が小さくて読みにくい」は「字が読みにくい」に、「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類	27
出席	出席の取り方を改善してほしい（成績への反映の仕方など）	24
分かりにくい	授業が分かりにくい ※プリント、資料、レジュメ、板書などが分かりにくいはそれぞれの項目に分類。	21
教室環境	教室が狭い、暑い、寒い、臭い／環境を改善してほしい	20
板書	板書が分かりにくい／板書が読みにくい／板書してほしい、板書の内容を改善してほしい ※「板書の字が小さい、汚い、誤字脱字で読みにくい」は「字が読みにくい」に、「消すのがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類、「障害物や距離などで読みにくい」は除く。	18
説明・解説不足	（授業について）説明・解説が不足・不十分	17
うるさい	周囲がうるさい、私語が多い／私語を注意してほしい	16
レジュメ	レジュメが分かりにくい・見にくい／レジュメの内容、配布方法を改善してほしい ※「レジュメの字が小さくて読みにくい」は「字が読みにくい」に分類。	15
字が読みにくい	黒板、パワポ、スライド、レジュメ、資料等の字が小さい、汚い、誤字脱字 ※「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類。「障害物や距離などで読みにくい」は除く。	15

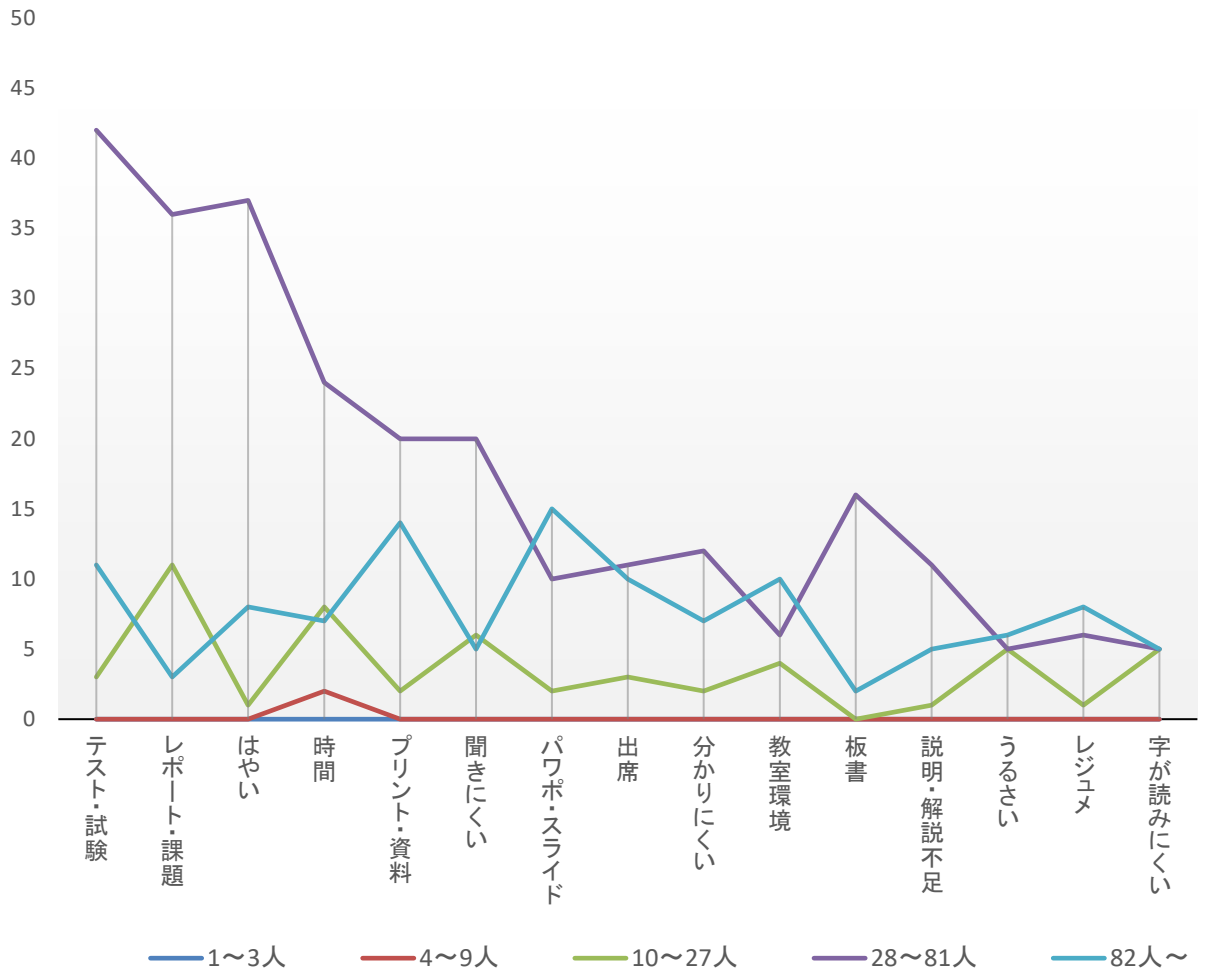
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【学部別】



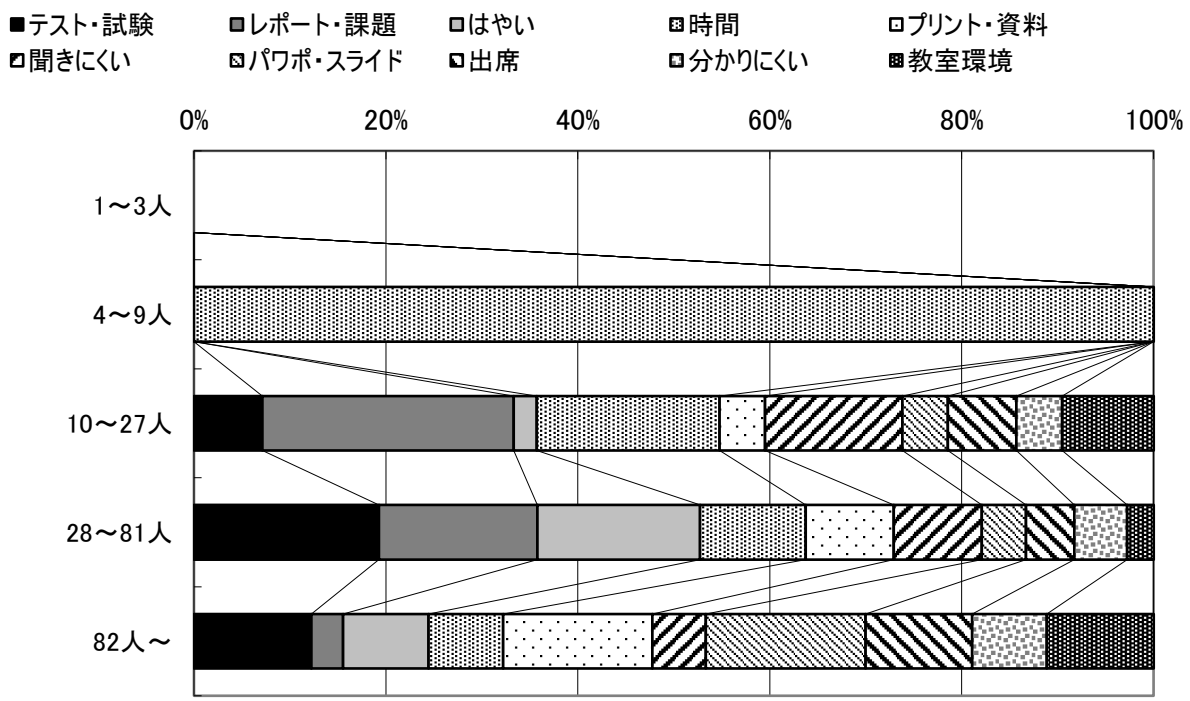
上位10項目の学部別割合



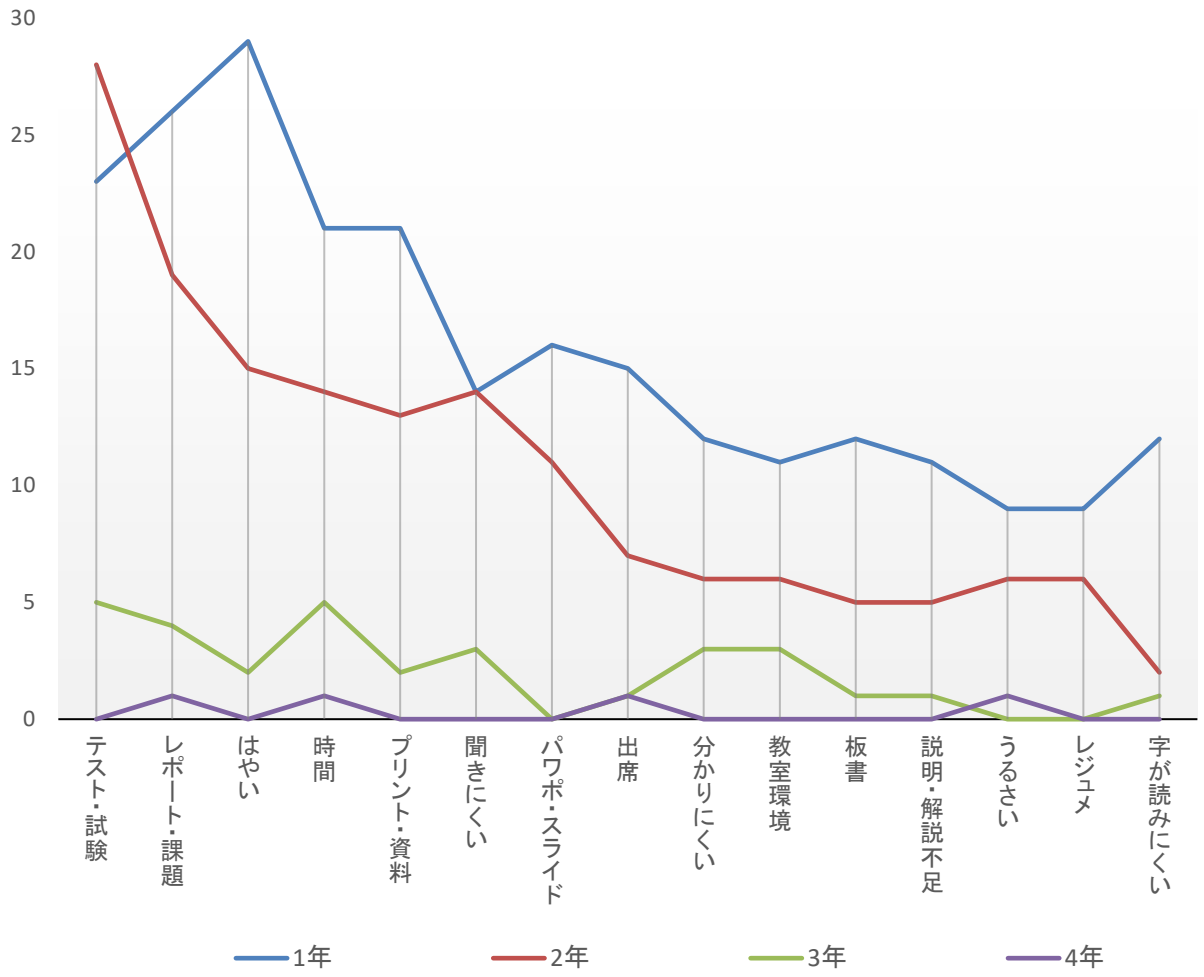
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【回答人数帯別】



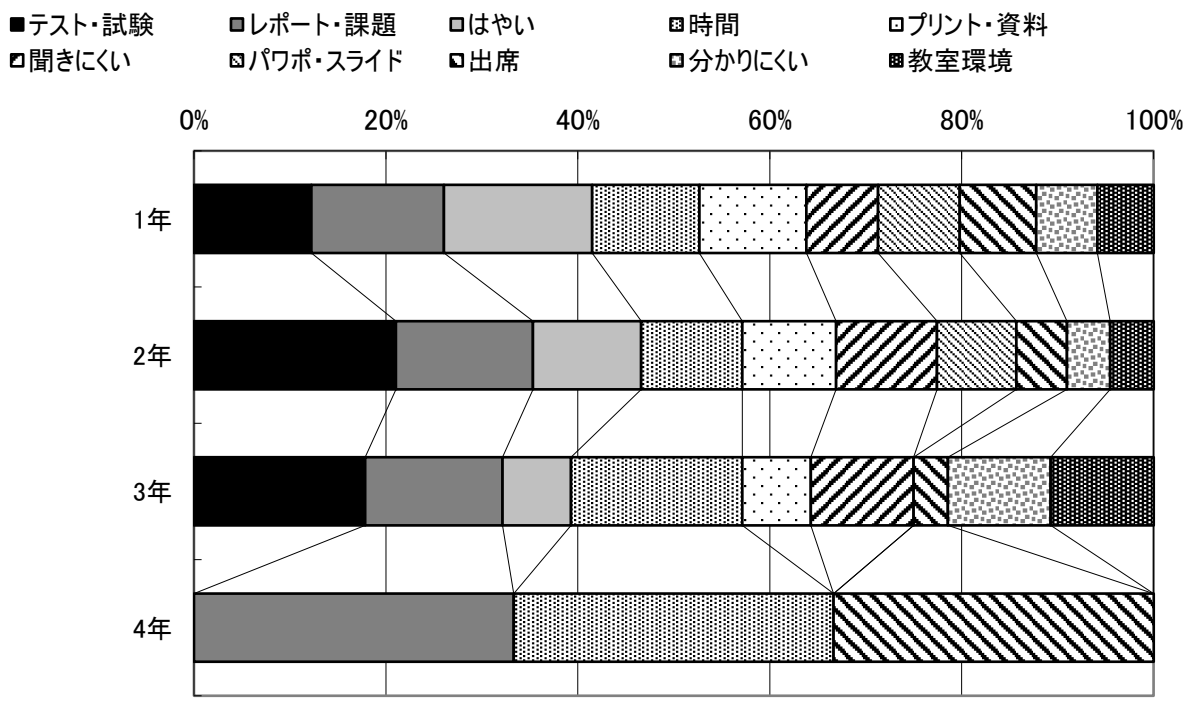
上位10項目の回答人数帯別割合



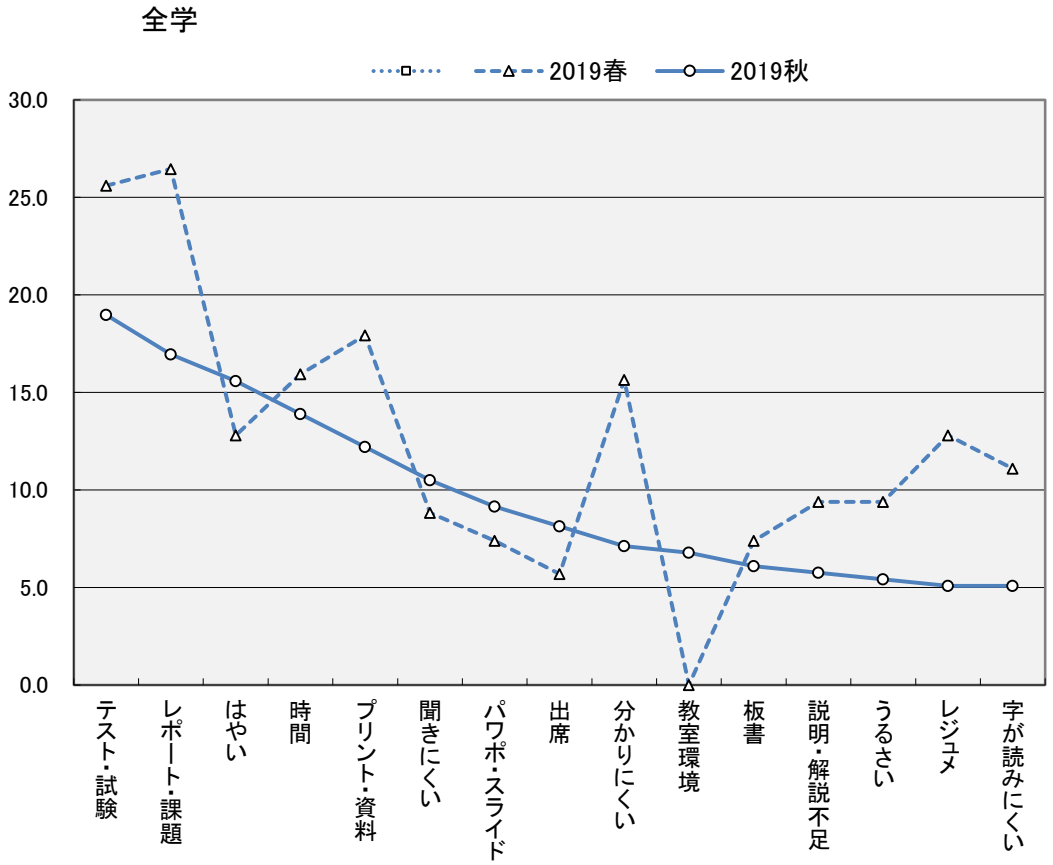
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 全学

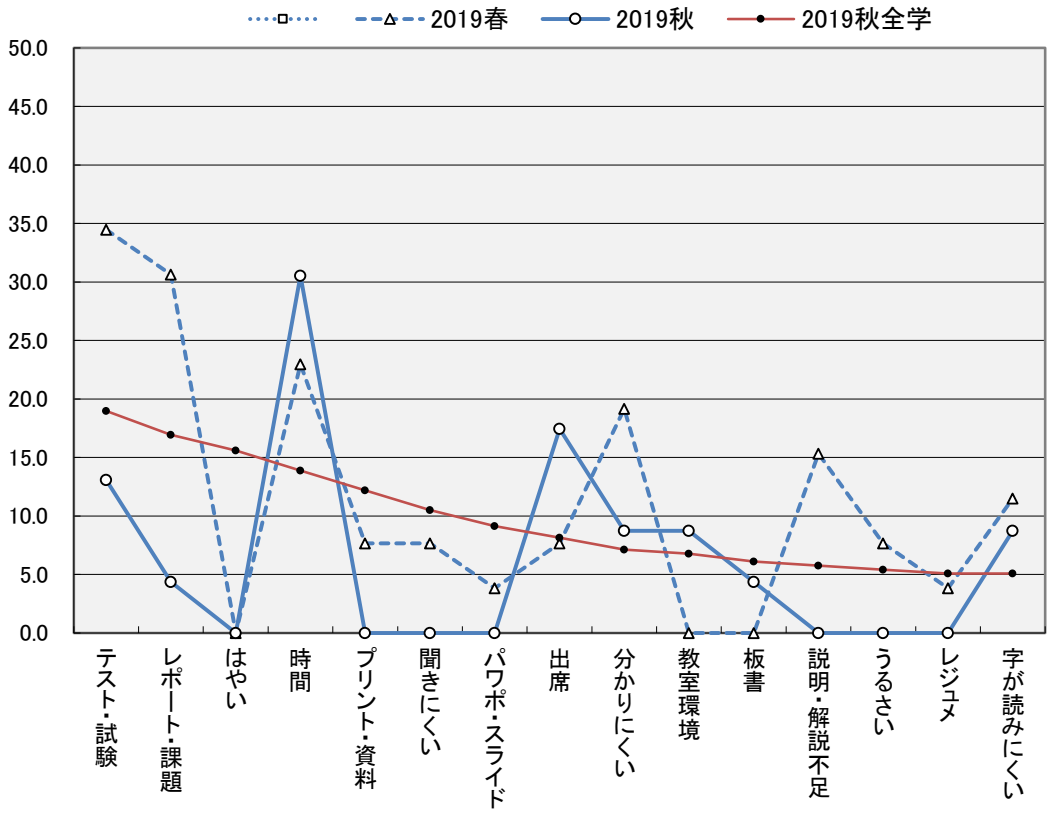


「出現率」について

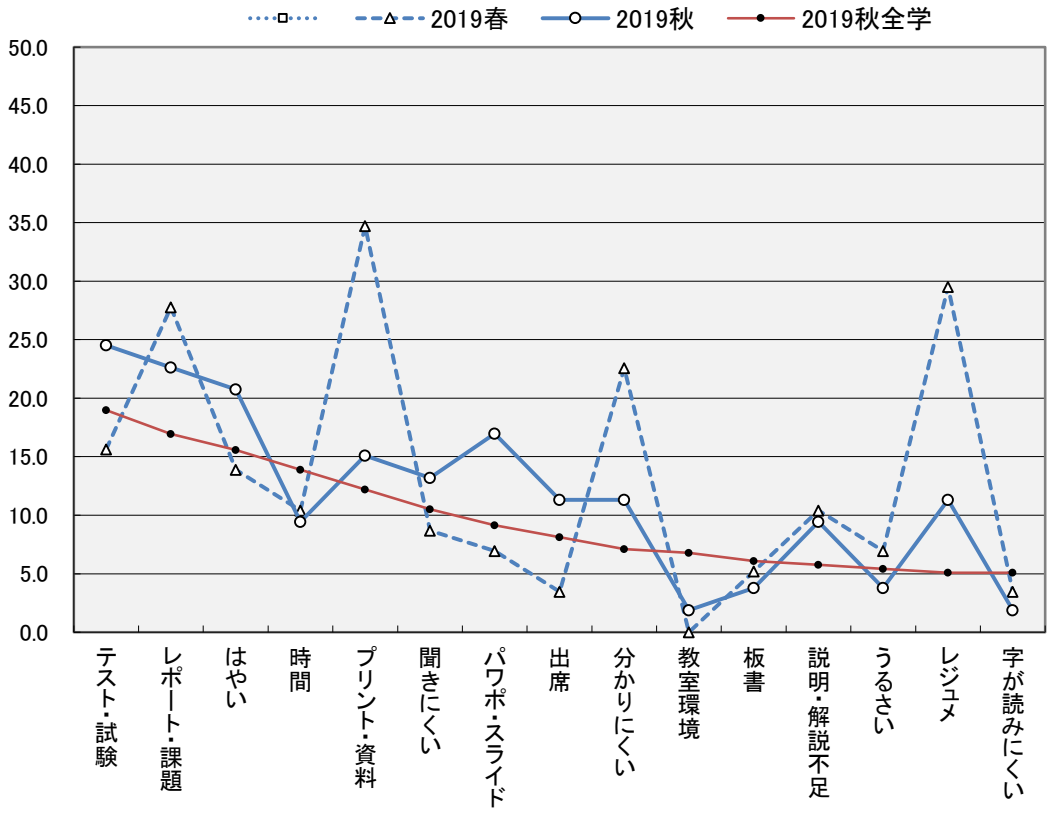
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
  総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
  出現率は下記の式で計算されます。
  出現率＝出現数／回答者数×10^4
  （回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。）
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《仏教学部》

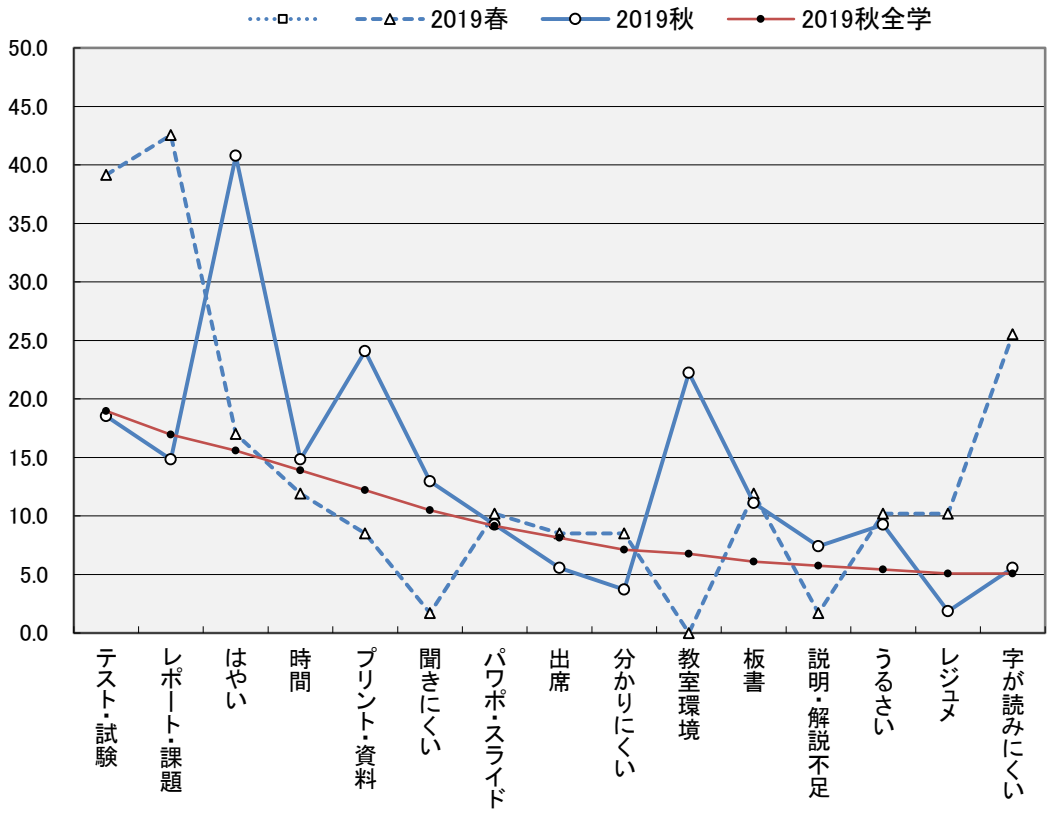


《人間学部》

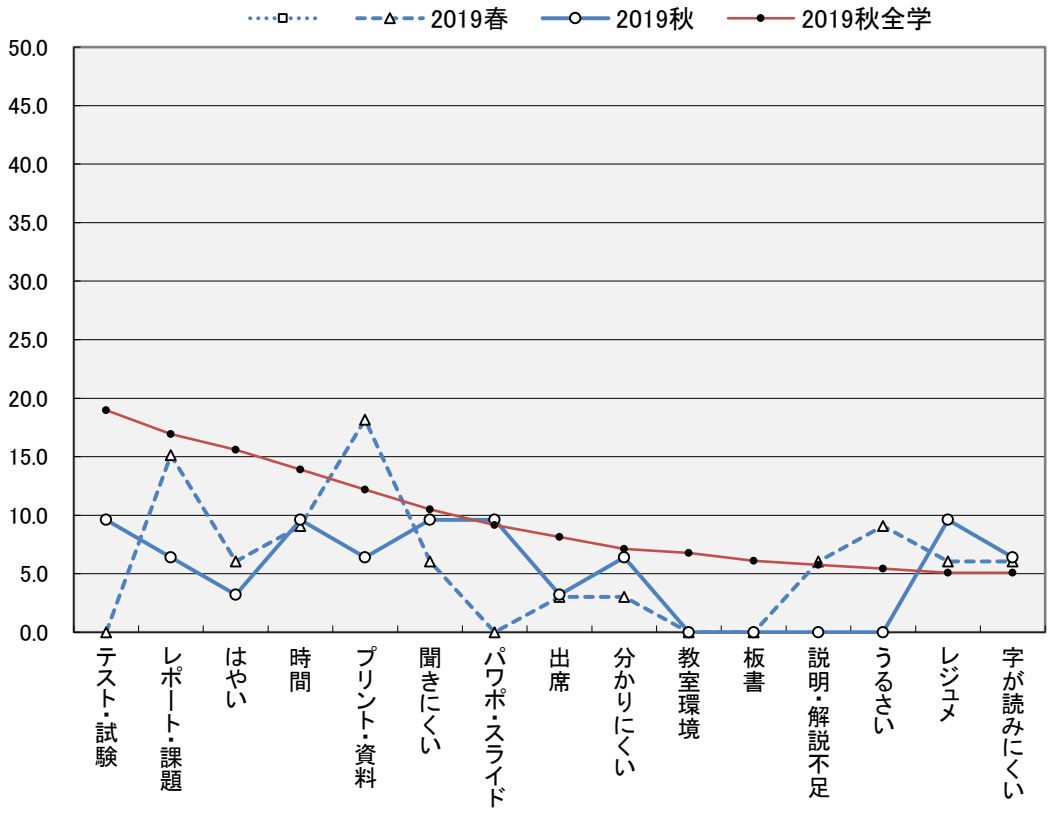


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《文学部》

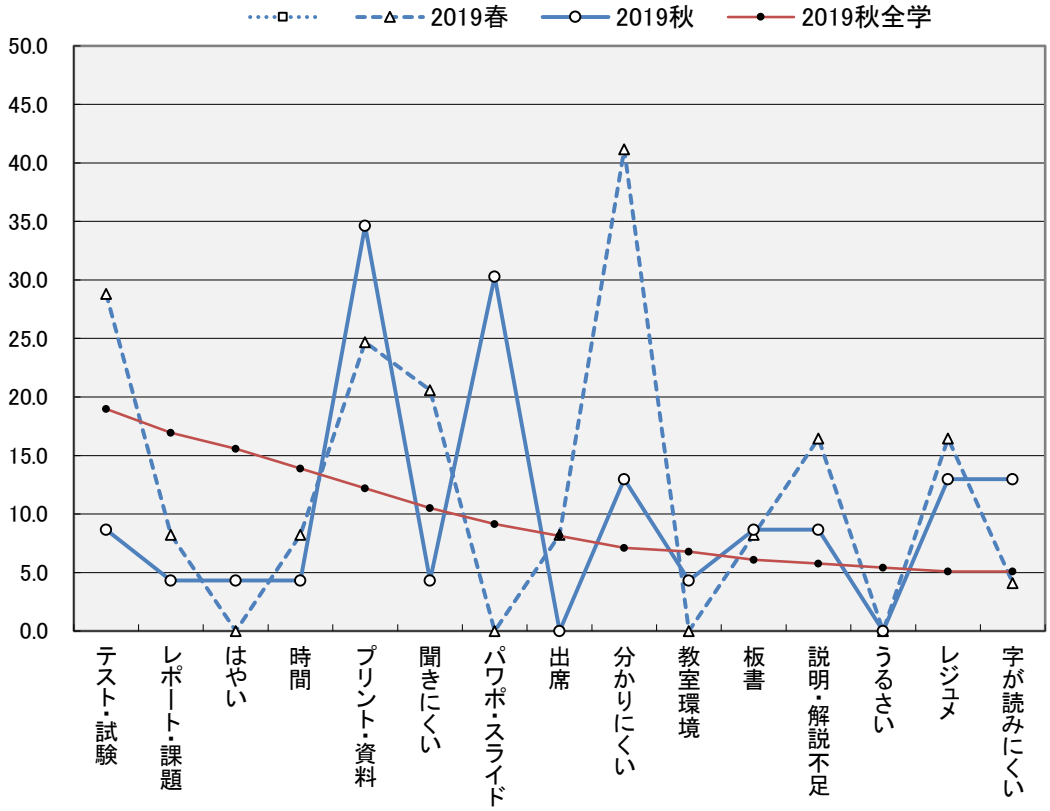


《表現学部》

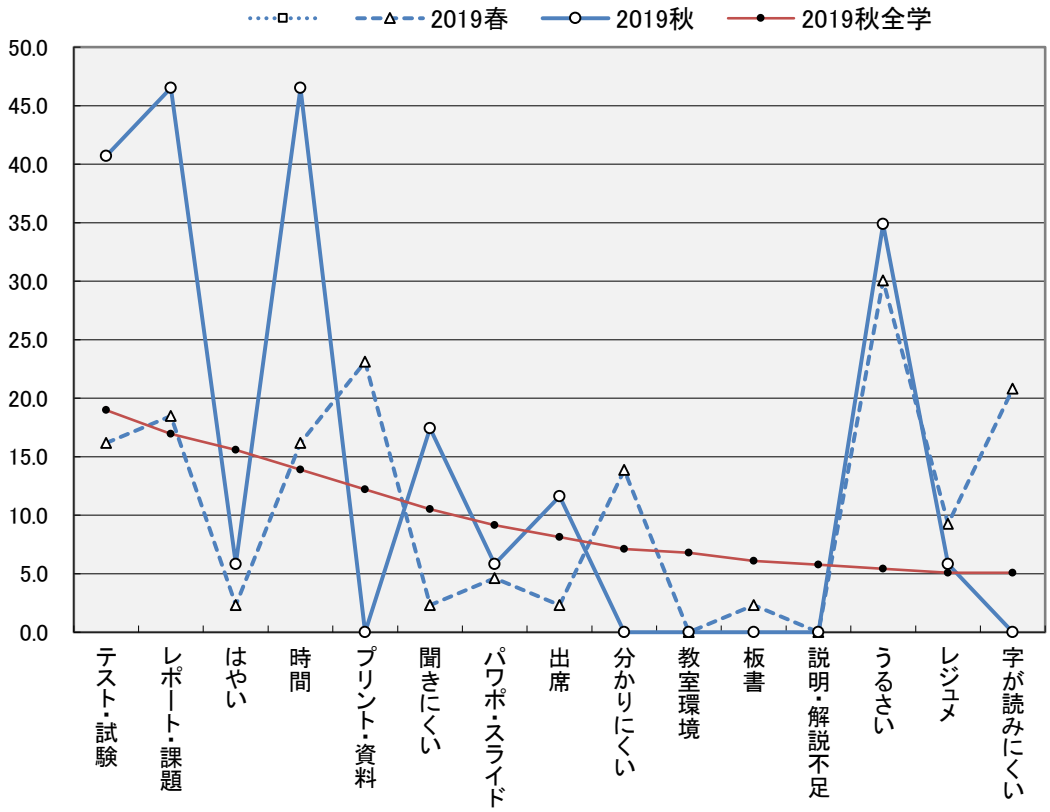


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《心理社会学部》

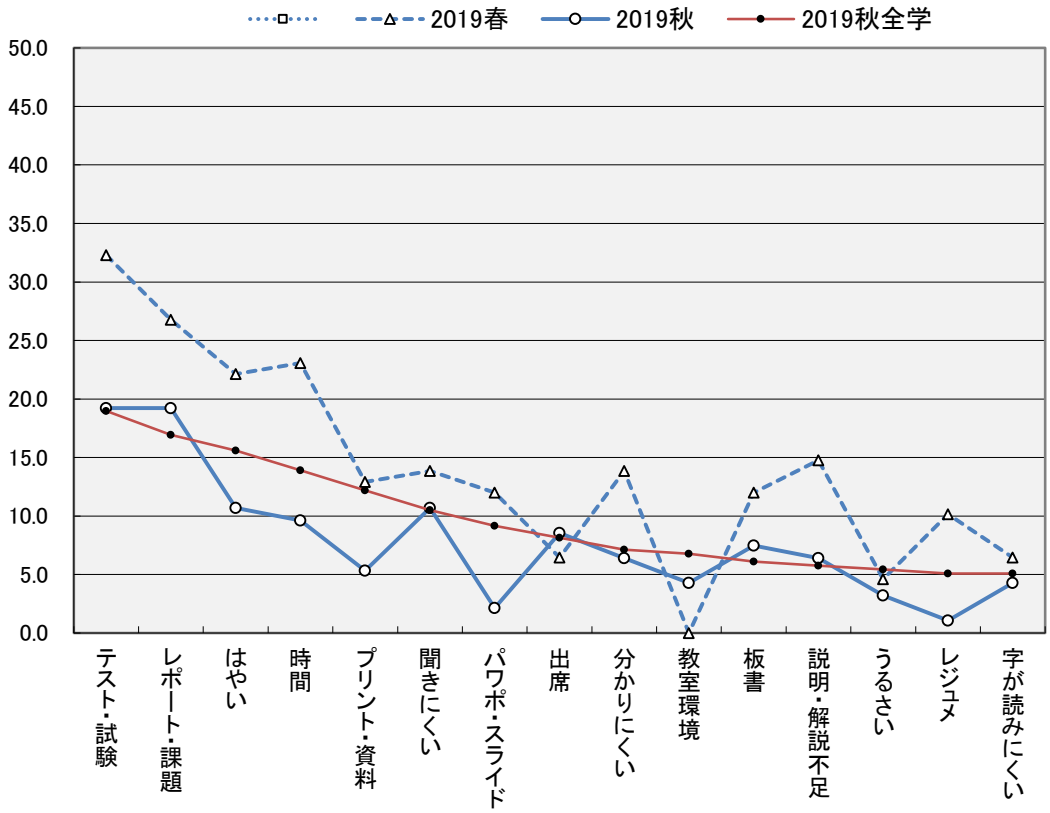


《地域創生学部》



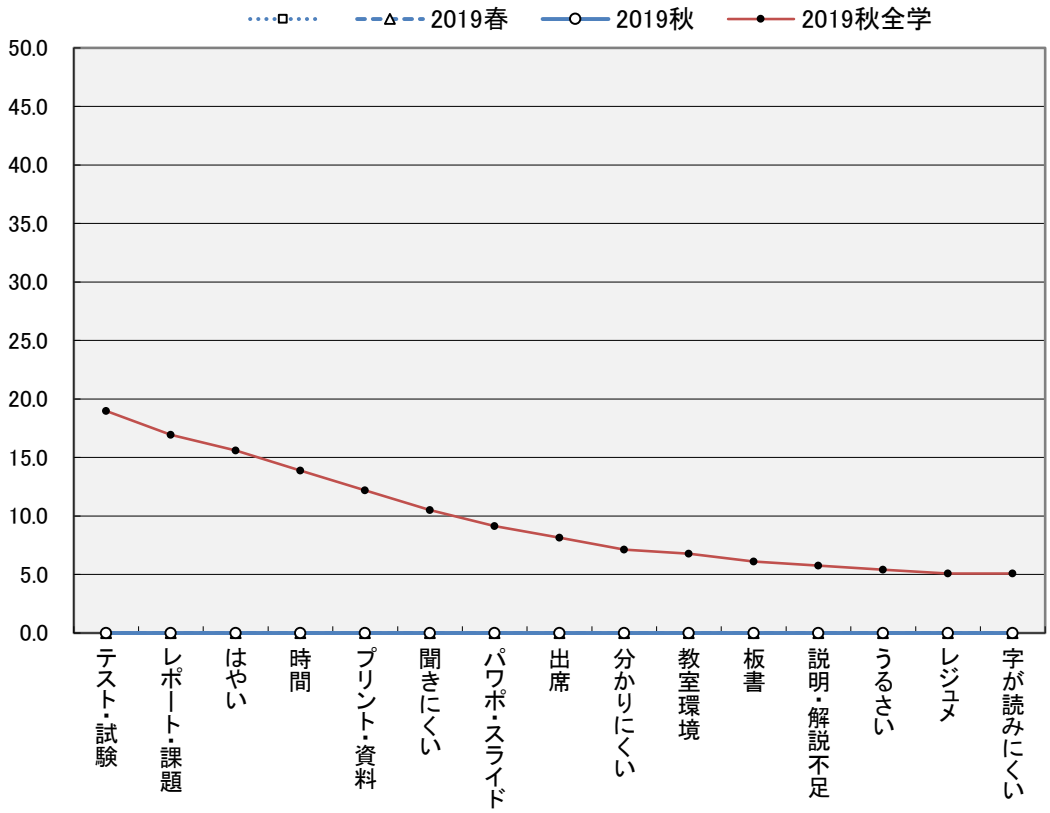
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《(該当外)》

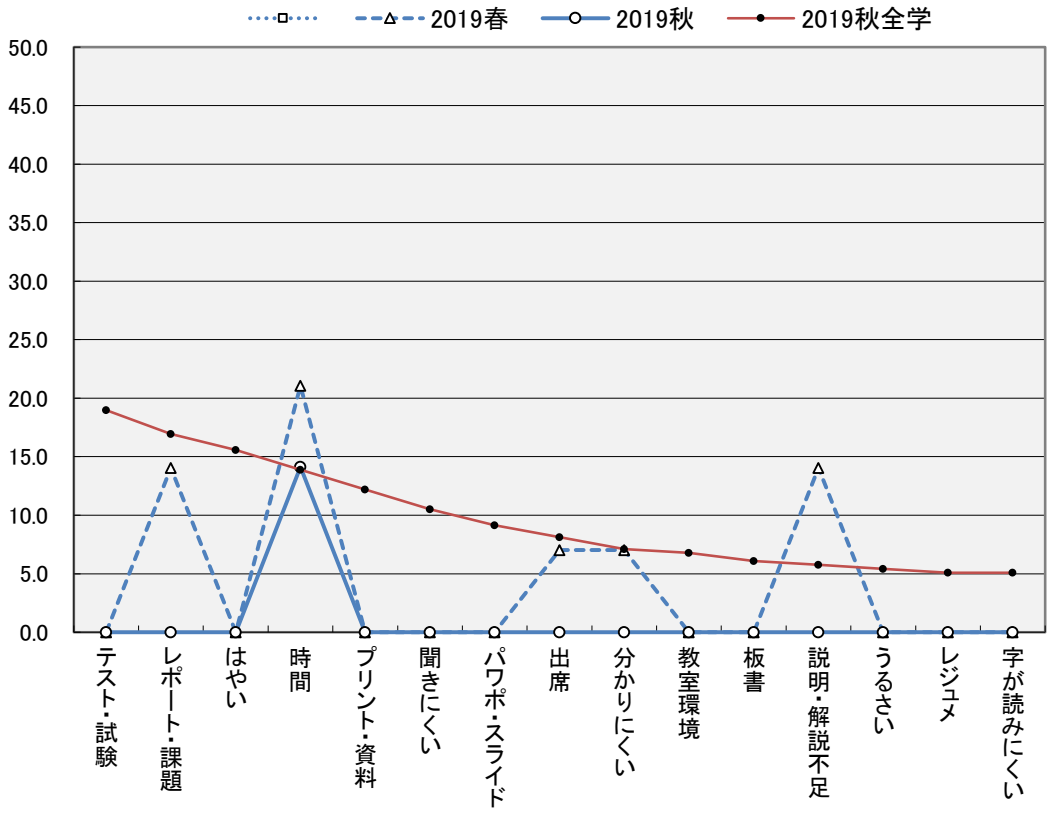


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

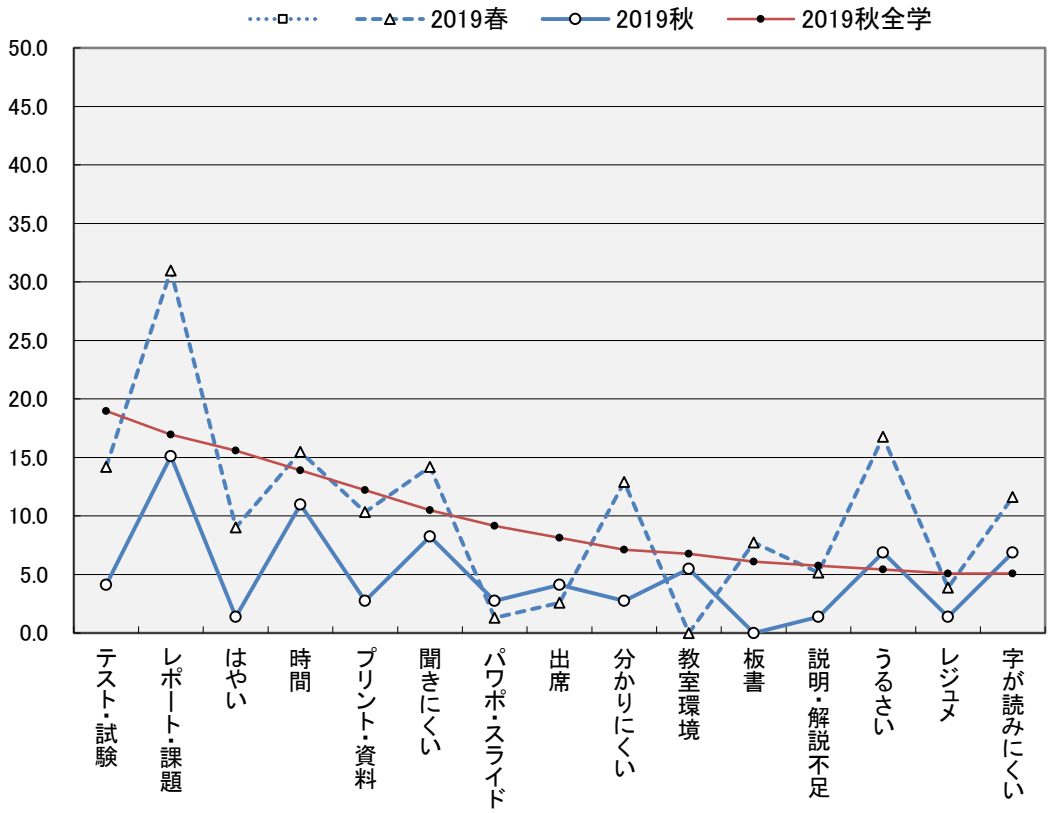


《4～9人》

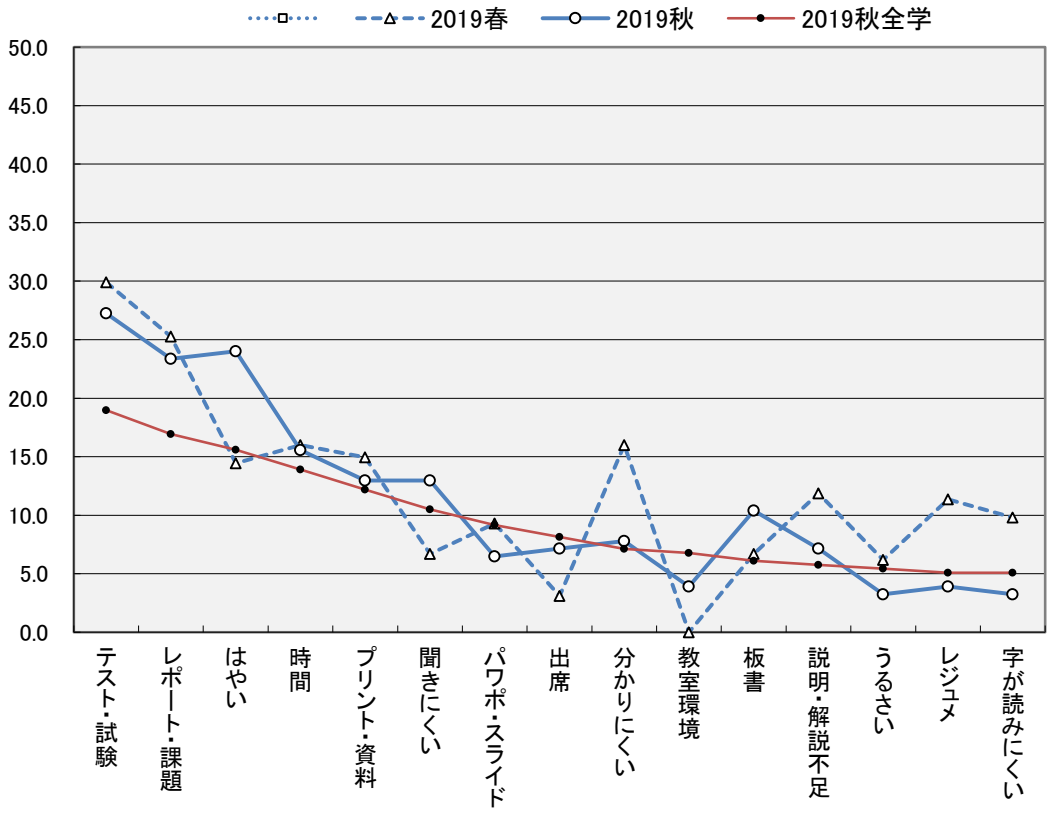


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《10～27人》

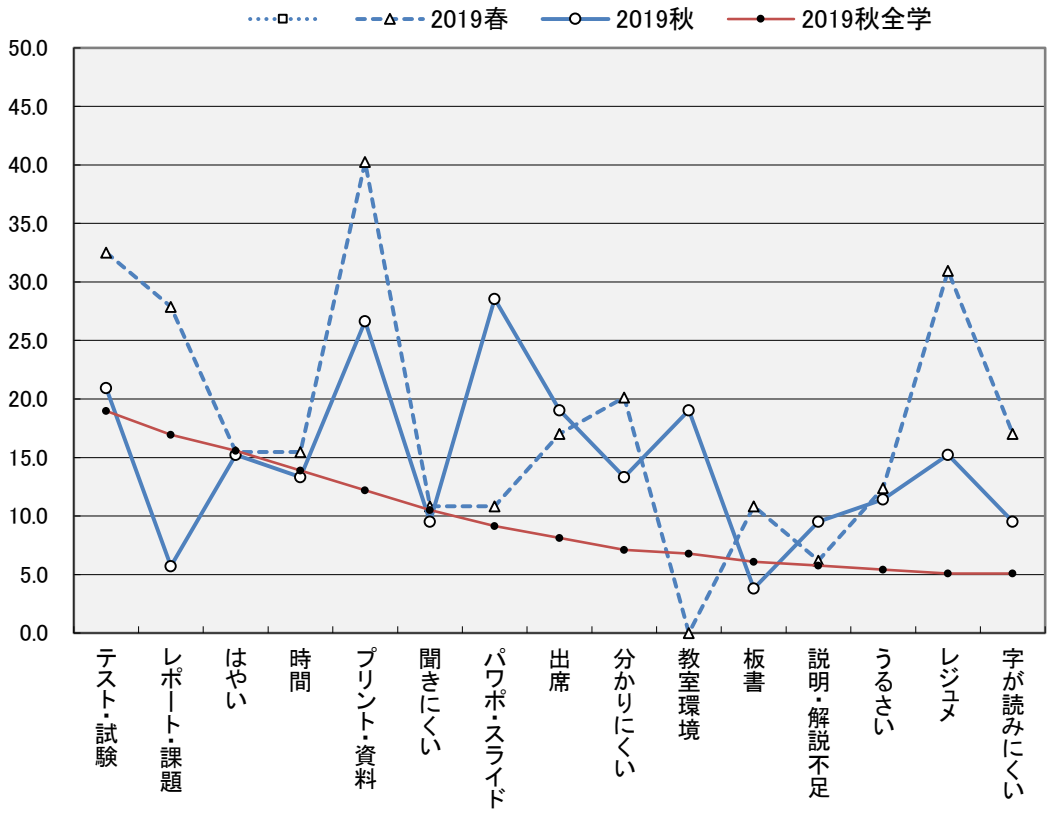


《28～81人》



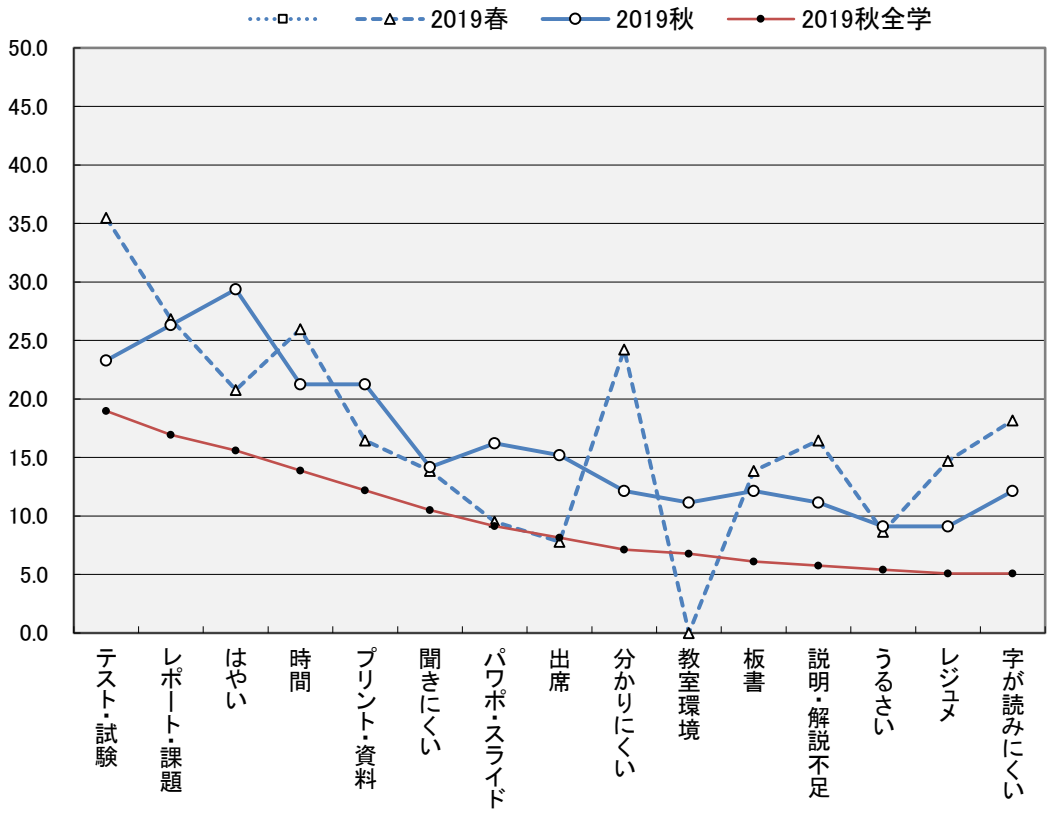
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《82人～》

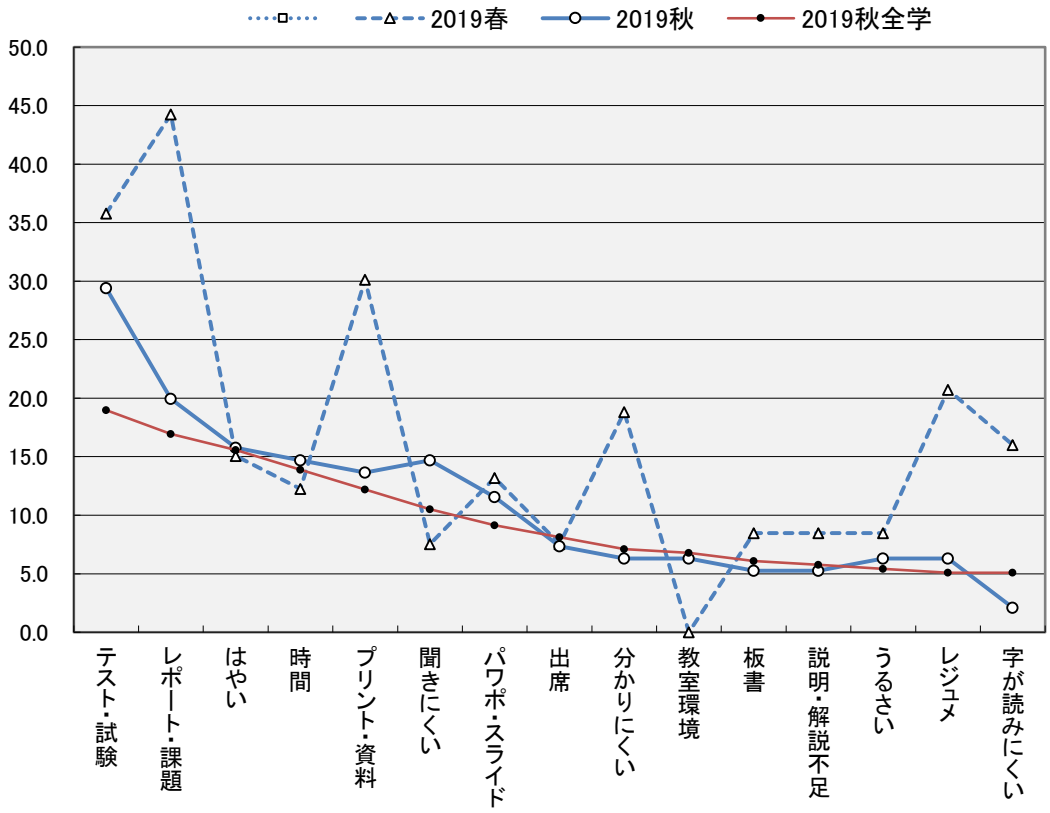


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

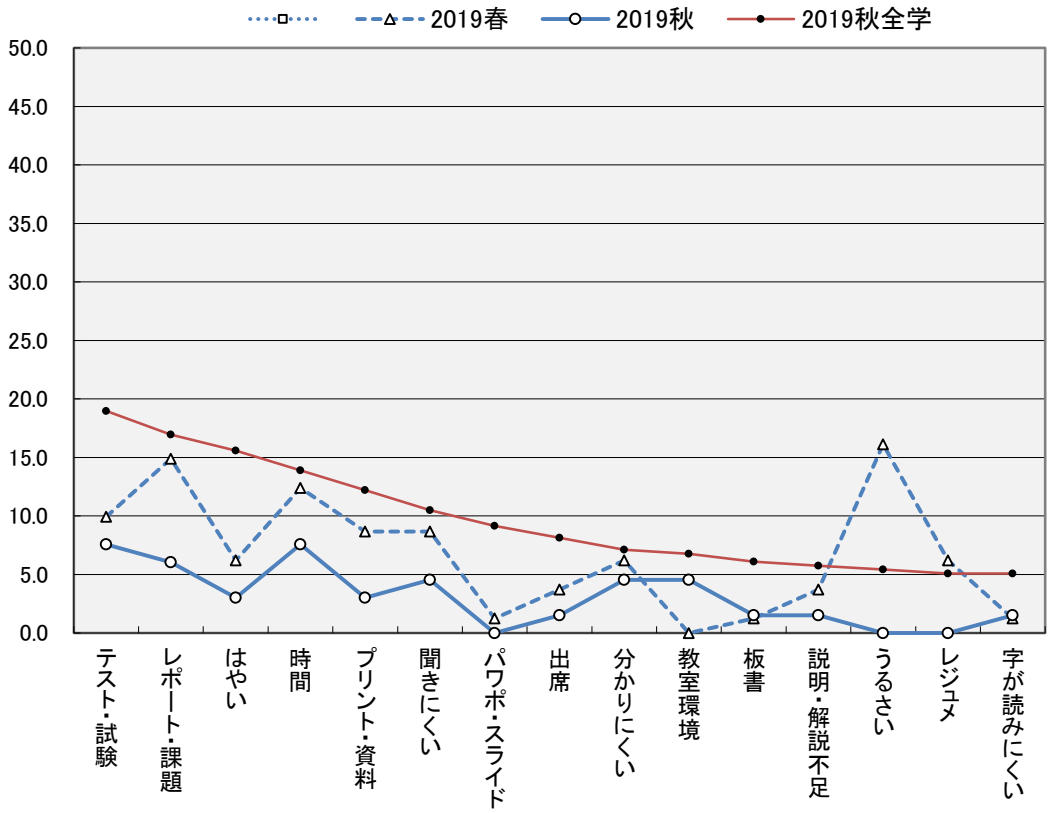
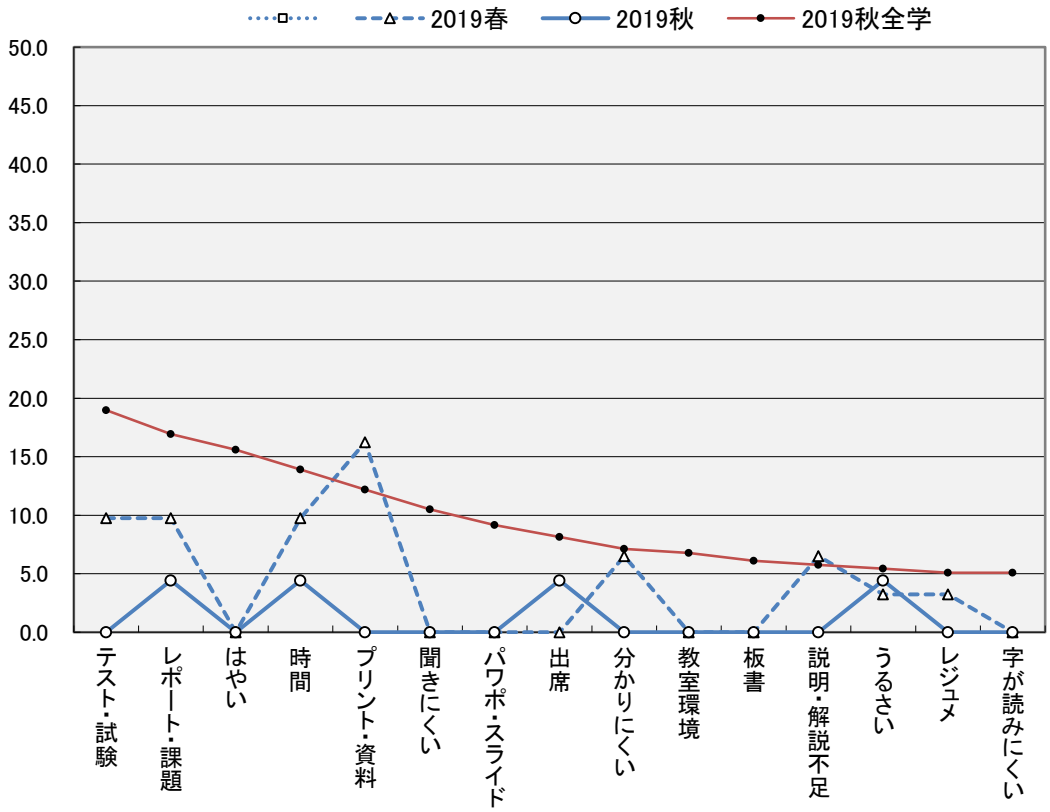


《2年》



自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



《4年》